

平成 27 年度
東北大学大学院情報科学研究科
博士学位論文

**ライフストーリーの生成継承性に関する研究：
協働の場の実践を通して**

東北大学大学院情報科学研究科
人間社会情報科学専攻
メディア情報学講座メディア文化論分野

B3ID3002

佐々木 加奈子

2016 年 3 月 10 日 提出

目次

第1章 序論	1
第1節 研究の背景	2
1-1. メディアにおける忘却の危機	2
1-2. 浪江町におけるライフストーリーの埋没と聞く耳の喪失	3
第2節 先行研究	6
2-1. 生成継承性 (generativity) に関する理論研究	7
2-2. ライフストーリーの抽出法に関する研究	10
2-3. 生成継承性の実践に関する研究	10
第3節 本研究の目的・手法	11
第4節 本研究の意義	13
第5節 本論文の構成	15
第2章 メディア表象と語れない記憶:福島県浪江町の事例から	17
第1節 テレビ報道における福島の表象とその現実	18
1-1. 届かない浪江の声	18
① メディア報道と忘却	18
② 浪江町の現状	18
③ 調査方法	19
④ アンケート調査から	20
1-2. 伝えられてない福島の現実	21
① 放置された請戸—空白の1ヶ月間	21
② オリンピック招致—歓喜に沸く日本との温度差	22
③ 帰還という表象—除染と事業再開 掲げる復興のイメージと現実	23
1-3. 残像としての「絶望的」な福島	25
第2節 表象が促すスティグマとライフストーリーの埋没	26
第3節 福島表象に隠れる避難者たちの思い	27
3-1. 福島表象の限界	27
3-2. 表象不可能性を超えて	28

第 3 章 協働の場の設計	30
第 1 節 協働の着想	31
1-1. 協働の定義	31
1-2. 協働についての先行研究	32
第 2 節 2つの協働の場の設計	33
2-1. 協働の場の実践①：ライフストーリー・インタビュー	33
2-2. 協働の場の実践②：memorytalk アプリケーション開発	35
2-3. 協働の場の実践②：memorytalk を用いたワークショップ	37
第 4 章 ライフストーリーのテキスト分析：実践□から	40
第 1 節 ストーリー領域表出率からみる「語り直し」	41
1-1. 分析方法：ストーリー領域における評価機能	41
1-2. 協働の場によるストーリー領域表出率	43
1-3. NHK 震災デジタルアーカイブストーリー領域表出率との比較	46
第 2 節 「語り直し」のパターンとその分析	47
2-1. ライフストーリーの分析概要	47
2-2. 対比の語り	52
2-3. ユーモアの語り	58
2-4. カタルシスの語り	66
第 3 節 小結：「語り直し」の生成継承性	74
第 5 章 協働の場における多元的な役割距離：実践□から	76
第 1 節 役割距離概念について	77
1-1. ドラマツルギーと役割距離	77
1-2. 岩田による役割概念の再検討	79
1-3. 役割距離のコミュニケーション的側面	80
第 2 節 役割距離とコミュニケーション	81
2-1. 古老役割によるユーモアを交えたコミュニケーション	81
2-2. 通訳者役割による翻訳、代弁のコミュニケーション	82
2-3. カウンセラー役割としてのフォローコミュニケーション	84
第 3 節 カメラの役割	85
第 4 節 小結：多元的な役割距離からその先の生成継承性へ	86

第 6 章	MEMORYTALK において制作された動画分析:実践□から	89
第 1 節	語りの生成過程と動画作品について	90
1-1.	ワークショップの過程記述	90
1-2.	分析方法:ストーリー領域における評価機能	92
第 2 節	動画作品のパターンとその分析	95
2-1.	ユーモアの語り	95
2-2.	告白によるカタルシス	97
第 3 節	写真による記憶想起	97
3-1.	写真による断片的な記憶の現れ	99
3-2.	写真による多様な物語の現れ	100
3-3.	写真の絵日記的使用	101
第 4 節	震災の語りの演出	103
第 5 節	小結:「解き放つ」生成継承性	106
第 7 章	協働の場における高次なコミュニケーション:実践□から	108
第 1 節	MEMORYTALK が与える生成継承性	109
1-1.	考察(i):副次的関与の発生	109
1-2.	考察(ii):ロールプレイングの発生	110
1-3.	考察(iii):公開への手助けの発生	112
第 2 節	断片から「集合知」に変わる時	113
第 3 節	小結:多元的な役割距離からその先の生成継承性へ	114
終章		116
第 1 節	本論文のまとめ	117
第 2 節	今後の生成継承性の在り方	121
第 3 節	今後の課題と展望	124
謝辞		126
参考文献		128

Appendix A.....	136
1. クローズドキャプション解析.....	137
2. 浪江町に関するテレビ特集番組表.....	138
3. テレビ報道に関するアンケート質問表.....	139
Appendix B.....	141
1. インタビュー後のアンケート質問表.....	142
2. NHK 震災デジタルアーカイブ証言逐語録.....	144
3. インタビュー収録 DVD パッケージ.....	160
Appendix C.....	161
1. ワークショップ告知用ポスター.....	162
2. MEMORYTALK ユーザー挙動.....	163
3. プレイベント用配布資料.....	166
4. ワークショップ後のアンケート質問表.....	169

第 1 章

序論

第 1 節 研究の背景

第 2 節 先行研究

第 3 節 本研究の目的・手法

第 4 節 本研究の意義

第 5 節 本論文の構成

第1節 研究の背景

1-1. メディアにおける忘却の危機

震災や経済危機、紛争をはじめとする惨事の情報は、テレビやインターネットなどのあらゆるメディア媒体から私たちにむけて発信される。衝撃的な映像はテレビや新聞などの見出しを飾っているが、これらの発信された情報は人々の記憶に留まることなく、次の惨事の情報に塗り替えられる¹ (Hoetzlein, 2012)。これに伴い人々の興味も次から次へとおこる惨事に移行して行く。このように、惨事の記憶は時間と共に薄れ、過去に埋もれてしまう。

その一例として、震災当時に比べ、東日本大震災の被災地に関する報道の放送頻度が減っていることがあげられる²。震災数日後から1ヶ月間の震災ハネムーン期³には、人々の間で生き残ったことへの幸福感や共通被災体験による連帯感が強まることで、被災者たちは積極的に取材を受けていた。しかしながら、風評被害の拡大を恐れ、避難者たちは次第に取材に応じなくなった。新しい情報が入らないために、テレビ局は東日本大震災の被災地に関する報道を減らした。一方で、メディアは、南海トラフ地震を将来起こりうる自然災害の情報として次々に発信していった。東日本大震災における被災地の声はさらに届きにくくなっているのが現状である⁴。

東日本大震災では、スマートフォンなどの普及により、未だかつて無い膨大な記録がとられた。多くの被災自治体ではそれらの記録を収集・保存し、震災の教訓として後世に残すためデジタルアーカイブ活動を行っている。また総務省は、2013年に震災の記録・教訓を次世代に伝える国立国会図書館東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」

¹2011年3月の世界情勢における wikipedia ページトラフィック統計によれば、3月7日のエジプト革命がピークで40,000件、その後5,000件まで下がった。13日には福島第一原発事故によるメルトダウンについてピーク時で49,500件の検索があった。その後19日には3,000件に下がった。また、22日には米軍によるリビア介入で60,000件の検索があった。その間、東日本大震災における津波被害 (Tohoku earthquake and tsunami) へのヒットはピーク時には、92,900件にのぼり、断続的に観覧された。28日以降、検索内容はリビア市民革命や Threat of the US government shutdown (アメリカ政府機関の閉鎖の危機) などへ移行したという報告がある (Hoetzlein, 2012)。

²クローズドキャプションとは、字幕のひとつで、映像内に使われている音声情報の内容を聴覚障害者に伝えるための文字情報波として表示する技術 (ASCII.jp デジタル用語辞典) である。国立情報学研究所が収集した東京地区地上波所有データベース検索によるクローズドキャプションを用いて、「被災地」「福島」「浪江」などの単語について、使用回数を計測した。その結果、日別単語使用回数が年々減少していることが確認できた (Appendix A: クローズドキャプション解析参照)。

³被災者にみられる心理状況の三相性変化として范然自失期 (数時間後～3日)、ハネムーン期 (数日～1ヶ月)、幻滅期 (数ヶ月～1年) の変化が見られる。「ハネムーン期は多くの愛他的行動が生まれ、人々が一致団結してことにあたり、ほとんど震災後の困難な生活状況に適応したかに見える。」(藤森, 2012:34-35)。語源は Beverley Raphael, “When Disaster Strikes- How Individuals and Communities Cope with Catastrophe”(1986)に由来する。

⁴福島放送、テレビユー福島、福島中央テレビに対して著者が行ったインタビューによる (2013年3月18日、22日)。

(<http://kn.ndl.go.jp/>)を立ち上げ、民間団体と連携し、震災に関する音声や画像、写真、文章などの記録を一元的に検索できるポータルサイトを公開している。総務省は 2013 年 3 月には、デジタルアーカイブの普及促進のために、アーカイブ活動のガイドラインを作成し、全国規模での震災記録の収集・保存を掲げてきた。しかし、震災後、被災 3 県で開始された 54 ものアーカイブ活動は、収集活動に従事する人の不足や資金不足、震災記録の利活用の問題から、2012 年時点では 28 団体が活動を休止または閉鎖している (永村ら, 2013)。そのため、多くの収集された震災の教訓や被災者の声は死蔵され、次世代に届きにくい状況である。このような現状から、アーカイブの利用者が年々減少する傾向にあり、利用者の興味を促すコンテンツや継承法が必要である(岡本, 2012)。震災 5 年目 (2015 年現在) を迎える被災地は、より一層忘却の危機に瀕している。

1-2. 浪江町におけるライフストーリーの埋没と聞く耳の喪失

本研究では、このように惨事への忘却が進むなかで、福島第一原発事故によって、避難を余儀なくされた福島県浪江町民に焦点をあてる。

現在、東日本大震災での東京電力福島第一原発事故を受け、福島県双葉郡に位置する浪江町全住人約 2 万 1000 人は、故郷を追われ、仮設住宅や慣れない土地で避難生活を送っている。避難者数としては市町村の中で最も多い。浪江町については、原発と向き合ってきた忘れてはいけない歴史がある。1950 年代半ばから、過疎と財政難に悩まされていた浪江町は、その打開策として原子力発電所の誘致を行った。1960 年頃、福島県による原子力発電所の誘致の候補に挙げたものの、同じ双葉郡の双葉町と大熊町に決まった。それまで出稼ぎが一家の経済を支えていたが、福島第一原子力発電所に近い自治体になったことにより、地元での雇用も増え、経済の波及効果を受けてきた。その一方で、沿岸部請戸地区の漁業組合は漁場が脅かされると常に反対の姿勢をとっていた。その間、“原発は安全”という神話は徐々に浸透していったものの、その安全神話の浸透は力づくのものであったことは否めない。その後 1980 年代に入り、東北電力が浪江町と小高町に原子力発電所の新設を持ちかけたが、町民の反対運動は続いていた。その矢先、この東日本大震災によって、原発事故が起きたのである(恩田, 1991)。

本研究では、まず浪江町避難者たちの意識や実態を知るために、メディアの受け手側調査として、アンケートと聞き取り調査を行った⁵。その結果、回答者の約70%が、テレビの報道では浪江の本当の姿が伝えられていないといういらだちや違和感を感じていることがわかった。

⁵ 2012 年 11 月から 2015 年 2 月まで福島県福島市笹谷仮設、北環線仮設、県外などの借り上げ住宅で避難生活をする浪江町の人たちへ聞き取り調査を行った。

その違和感の原因の一例として、福島原発事故における絶望的なイメージとして、爆発や鼻血といった視覚表象を取り上げる（第2章）。このようなメディアが描く「かわいそうな被災者、避難者像」は、震災を捉える上で、支配的な表象として使用されている。そこで、本研究では継承の在り方を考える上での課題として、メディアを通じ浸透したヘゲモニーについても取り上げる。ヘゲモニーは、グラムシにより現代の権力が人々を強制的に抑圧するだけでなく、自発的に服従する主体を作り出す力として用いられた言葉であり、被支配者の同意に基づいた支配力を指す。現代社会では抑圧的権力よりも、大衆文化やメディアを通じてヘゲモニーの行使が行われる（松浦, 2014: 250）。本稿で用いる用語として、メディアが発信するヘゲモニックに構築された「被災者像」・「避難者像」や画一化した震災教訓などを、「支配的な表象／語り」あるいは「主流な表象／語り」とする。

著者は、福島県浪江町からの避難者たちへの聞き取りを重ねながら、浪江町民のふるさとを思う強い気持ちや、震災後語られなくなった浪江の記憶が埋もれていることを確認した。しかし、そこには故郷喪失の中、後世に伝えたい浪江という土地の歴史、メディアには取り上げられない日常の思い出、苦悩や喜び、浪江という土地が奏でた多様な浪江の物語があった。現在、放射線量が高く帰宅困難地域となっている津島地区は、戦後入植者が開拓した土地であり、山を農地にするまでの苦労や、収穫の喜びなど、この地には幾重にもかさなった物語が眠っている。震災当時の教訓としてだけでは伝わらない、失った浪江町を深く意味付けしたライフストーリー⁶が存在している。桜井 (2010; 2012:6) はライフストーリーを個人のライフ（生涯、生活、人生など）についての口述の物語として定義している。また、桜井・小林 (2005:36) は、ライフストーリーは、いま-ここでの語り手と聞き手の相互行為、とりわけインタビュー行為によって生み出されるその場での物語であると定義している。

最も重要なことは、このようなライフストーリーが語られないまま封印されていたことである。浪江町民のケースに限らず一般的に、ライフストーリーは語られづらい。家族内の人間関係や身近な人々に対する論争を巻き込みかねないのである。したがって、その土地に生きたライフストーリーは省略され、当事者たちは、本人たちにとっての重要な出来事には関心が持たれていないという違和感に苦しめられている。さらに、賠償金受給などにより社会の重荷となる負い目をつくりあげてしまい、すなわち避難者たち

⁶ ライフストーリーをライフヒストリー（歴史的真実を表そうとする物語）と区別し、「他者に対して語られた部分」、つまり「相互行為によって生まれる経験の語り」とする（Kotre, 1999；桜井・小林, 2005；やまだ, 2007b）。

の多くは避難者であるスティグマを背負い、自らの声を閉ざし生活している (Sasaki and Sakurai, 2015)。このように、メディアによる支配的な表象やスティグマなどにより、ライフストーリーが語られず、継承が抑制されている (第2章)。

一方で、当時仙台市で被災した20代男性は、「もう震災の体験談は聞きたくない。聞いても何と書いていいかわからないし、大体話の筋は予想がつく。」と率直に震災体験談に対する思いを語った⁷。男性は津波被害には遭遇していない被災者であるが故に、繰り返される津波関連の震災録や防災技術、備えに関する口述を聞かされることは拷問であった。主に「あの時、どう避難したのか」という出来事の教訓に焦点が当てられている多くの震災アーカイブは、メディアによる福島表象同様に、震災の教訓として決まりきった内容で解釈され、その土地に生きたライフストーリーは省略され、表現されない状態にある。

現状では、継承のために何が抽出されているのか? 「地震がきたら津波に用心」という既に知り尽くされている公式だけが抜き出されている。20代男性が感じたように、「またあの話か」と出来事を教訓として聞き流してしまう。その結果、継承すべき重要なことは、聞き手に届くこともなく埋もれてしまう。例えば、漫画『はだしのゲン』を「反戦の話」と画一化し、その物語を読まずに、あたかも理解したように感じていることは日常多々あるのではないだろうか。『はだしのゲン』が、絵や日常生活の物語を用いて表現している戦争に対する重要なメッセージや臨場感は、届くことなく埋もれてしまう。単なる一つの情報として受け取られ、教訓だけが記憶に残り、人々はその出来事について考えることすらしない。画一化された物語のみが継承されるべきものとしてアーカイブされるこのような現状に対して、本研究では継承とは何かを改めて検討する。

本研究では、継承のあり方を単なる保存ではなく、積極的で多元的なライフストーリーが生成されることとして捉える。多元的なライフストーリーが存在することで聞き手との接点が増し、第三者は共通点を見出しやすくなる。このことから、我がこととして関連性を見い出すことができるため、より深く感情移入できる効果が期待できる。さらに、大惨事にのみならず平常時のライフストーリーを収集することで、平時と有事の差分がわかる。

本研究では、多元的なライフストーリーを様々な側面・次元を持つ物語と定義する。例えば、震災に関するライフストーリーの多元性とは、津波を逃れた物語だけではなく、それに付随して「あの時は寒かった」や「あの逃げた丘は昔開拓地だった」、「あの時ふきのとうを摘んでいたけど、このふきのとうがまた天ぷらにすると美味しい、懐かしい

⁷20代男性インタビュー、2014年5月24日。

なあ。」など、様々な側面をもつことでストーリーが多元的な意味づけがされることである。多元的とは一つの出来事に対して多様な物語が共存することである。また、幾重にも人々の声が重なり合い、多声化されることで、より多元的なストーリーへと変容する。したがって、多元的なライフストーリーを発現させることは、同時に支配的な表象や教訓に対して、多動的なあり方や他にあるべき姿を私たちに提示してくれる。このことから、より多くの人々が多動的なライフストーリーによって、出来事を我がこととして個人の記憶に定着することができる。

加速する高齢化社会において、戦争体験者たちは貴重な話も語り継ぐことなく亡くなった。時間の経過や社会構造、風潮が変化するとともに、人々の記憶にとどまらないだけでなく、当事者たちの声に耳を傾ける環境すら失われつつある。当事者に耳を傾ける環境がなくなり、語りも制限されている。この結果として、当事者の経験の伝達がなされ辛く、次世代への継承性は危機的状況にある。では、どのように語りを引き出し、継承していけばよいのか。本研究は、継承のために「ライフストーリーはどのようにすれば自発的に語られるのか」について問うものである。

従来、ライフストーリーの抽出には、1対1のインタビュー形式による聞き取りが行われてきたが、多動的なライフストーリーの抽出について考慮されておらず、理論に基づいた手法は構築されていない。小林(1992)は、聞き手と語り手の親密さが増すにつれて、1つの話題の多動的な変換が行われることを指摘している。したがって、多動的な語りの抽出には聞き手と語り手がどのような間柄であるか、または親密性の向上を促すための語りの環境(空間、場)が重要な要素であると考えられる。

第2節 先行研究

本節では、第1節で述べた課題(①メディアによる忘却の危機、②ライフストーリーの埋没)を解決するために、どのような研究が行われてきたのかについて、理論研究と実践研究について概観する。まず、記憶の継承に関する研究(生成継承性「generativity」研究)を概観した後、語りの物語性に着目した新たな概念である生成継承性に関する理論研究について述べる。次に、埋もれているライフストーリーを引き出す方法に関する理論研究である。3点目として、生成継承性の研究でどの程度実践研究が行われているのかについて概観する。その後、それらの先行研究の問題点を指摘する。

2-1. 生成継承性 (generativity) に関する理論研究

通常 generativity は「世代継承性」と訳されており、成人期の重要な精神発達課題として、「次の世代を確立させ、導くことへの関心 (concern in establishing and guiding the next generation)」として位置づけられている (Erikson,1950)。エリクソン(Erikson, 1977) は generativity を「包括的な意味で生み出すこと、すなわち世代から世代へと生まれゆくあらゆるもの、時代、事物、技術、思想、芸術作品などを生み出し育むこと」と定義している。岡本ら (2013) は世代継承性には、伝統文化などの肯定的な継承や発達促進的な継承のみではなく、災害や戦争体験、世代間の葛藤、アンビバレンスなどの負の世代継承もあることを指摘している。さらに、これらをどのようにとらえ、考察していくかが今後の重要な課題であるとし、強調している。

generativity は次の世代をより良くしていくために関わることであり、子孫をつくるだけでなく、地域のボランティア活動への参加やモノ作りなどを通して、自分中心的な発想を超えて、次世代のために世話をする行為全般と、過去、現在、将来をつなぐことが generativity の現れである (McAdams and de St. Aubin,1993)。

この概念は抽象度が高いため、マクアダムスら (McAdams and de St. Aubin,1993) によって実証研究を通し、generativity の評価方法が確立されるなど、多くの国内外の研究者によって、特に発達心理分野での研究が進められてきた⁸。そして、物語の必要性から generativity を扱う研究アプローチとしてライフストーリー・インタビューが注目されている。ライフストーリーの観点から、熟練した工芸家が工芸品を世に残していくことや、研鑽を積んだ舞踏家が技能を次の世代に伝えることは、母親や父親が子育てをして後続世代をケアすることと同様に generativity の中で扱われる (竹内, 2012)。

「現代社会は、世代継承性 (generativity) の危機の時代」と言われ、震災をはじめとする過去の重要な事実が語り継がれないこと、継承者がいないために途絶えようとしている文化や技芸が数多く存在することには「基本的な人間的強さや成熟性の劣化がみられる」と考えられている (岡本ら, 2013)。

このような世代間伝達が実行されない状況について、世代間の結びつきを活性化し、永続的に関係を保ち続けるために、generativity の可能性について、高い generativity を発揮している人が、どのように自らの経験を意味づけするのかを知ることが不可欠である。西山 (2010) は、generativity の物語的側面に着目した実践研究の必要性を促している。

⁸発達心理学では、中年期と老年期間ではたらく世代性についての検証がすすんでおり、老年期においては世代性のなかでも世代継承性の重要性が示唆されている。老年期では、自身の経験や上の世代から継承したものを次の世代に残そうとする態度がみられ、これらが自己の死を強く意識した世代性が示唆された (深瀬・岡本, 2012)。同様に、孫と祖父母間に関する研究からは、孫から見た祖父母機能と、祖父母から見た孫の機能のいずれにおいても、世代継承感覚の促進という因子がみいだされた (田淵・三浦, 2014)。

つまり、物語を語ること／語り直すことで、物の見方を変えることが出来れば、現在や未来を自分の力で切り開いて行くことが可能になり、それこそが generativity の現れである (McAdams et al., 2001:279-309; Kotre, 1984)。

このように generativity の概念は非常に広く、そして深く意味づけられており、それゆえ、どのように generativity にアプローチするかということ自体が研究者の間での論点となりうる。しかし、多くの既往研究では、世代連鎖性をとらえるモデルや評価方法は示されているが、「当事者の経験の継承をどのように継承していけば良いか」について実践研究している例は串崎 (2005, 2008) のみ存在するが、具体的な手法は示されていない。

本研究では、generativity 研究領域において物語論的解釈を導入したライフストーリー研究者であるやまだようこ (2000a) における「生成継承性」に依拠し、語り直されたライフストーリーを解釈する。やまだ (2000a) は、エリクソン (Erikson, 1950) の発達段階とその generativity における直線的な時間概念や個人主義的な継承の捉え方とは異なり、循環や共同体といった東洋思想的要素を踏まえ、Generativity Life Cycle Model として generativity の連鎖性を捉えている (Yamada, 2004)。

やまだ (2007a) は、同じものをつなぎながら新しいものを生み出し、生み出したものを世話し、将来世代へとつないでいく力として generativity を、「生成継承性」と訳している。やまだ (2007a) は、この力を「生成する」と「世代継承する」に分けて使用しており、生成するは新しいものを生み出すこと、継承性は見守り・関心をもち、ケアする (維持し、はぐくむ) こととしている。この「ケアする」は、次世代に向かって「生み出す」「はぐくむ」「解き放つ」というプロセスをもつ。死にゆく人が、何かを生み出し (話す事柄を何にするか)、それを自分の中ではぐくみ (どのような内容にするか、どんな構成、物語にするか)、そして、看取る人に解き放つ (伝える)。看取る人は、死にゆく者から、何かを感じ取り (受け取り)、それを、時間をかけて自分のものとして新たに生み出し、はぐくみ、そして、次の人へ解き放つ。そしてまた・・・というように生成継承的サイクルを形成する。

生成継承性が高まることで、新たに出来事を語り直すとともに新たな意味を見いだす (つまり、生み出し、はぐくむこと)。こうして、死にゆく者と看取る者との相互行為 (できごとの継承) から生み出された死にゆく者の物語は、世代を超えるたびに複数化、つまり、色々なバージョンに変化する多声性をおびて、自己を他者へと結びつける継承性を取得する。そして、多声性のある語り、継承に寄与している (やまだ, 2007a)。

やまだ (2007a) は、F1 ドライバーの死を弔うファンの語りを調査し、仮定法による自己回復のプロセスを紹介している。仮定法とは、死の体験、喪失を生きる力に変えて

いく生成プロセスのことを指す。ファンは「もし・・・するくらいなら、この方が良かった」というように、死を肯定的なものに「変換」し、「納得」した。ここでは、ファンによる語りから死者とともに生きていくことを決意した語り手たちの姿が浮かび上がってくる。

また、これらの喪失から生成へのプロセスを生成継承性の現れとして捉えている。喪失を意味付けし、生きて行く力へと転換する物語の現れとして捉えるやまだの視点は、本研究の対象としている浪江町避難民においても、震災の経験をポジティブにとらえるという点で必要な視点である。

やまだの物語論を整理すると、「語り直し」は人生に新たな意味を生成する行為として生成継承性に大きく貢献する。そして、生成学の観点から、物語を完結しない開かれた物語として考えており、新しい物語論を指示し、実体験かフィクションかを問わず、堅固で語られたすべてをテキストとして扱っている（やまだ, 2000b）。

やまだ（2000a:20-23）は、物語研究の必要性は以下の6つの理由によるものと述べている。

- ① 私たちは科学者の様な論理-実証モードではなく、物語モードで生きているから。
- ② 物語モードが記憶など認知情報処理に優れているから。
つまり、意味化すると記憶しやすいからである。
- ③ 物語モードでは出来事と出来事のつながり、移行、生成、変化、帰結などの筋立ての仕方で、新しい意味がうまれる。
- ④ 物語モードでは個別の具体性から丸ごと一般化しようとし、それをモデルとして代表させる方向性をもつ。
つまり、自分のこととして置き換えることが容易で、定着しやすいである。
- ⑤ 物語モードはコミュニケーションの威力を発揮しやすい。
- ⑥ 物語モードが論理的知ではなく、感性的知にかかわっている。伝達するのに物語が適しているだけでなく、生成の循環を生みやすいからである。

以上のように、継承を考える上で、物語を引き出すことは不可欠である。したがって、本研究では、継承を考える上で、当事者の物語である「ライフストーリー」が重要な視点であり、どのようにすればライフストーリーをより多く表出させることができるか、が重要な課題である。しかしながら、既往研究では実践的に当事者の経験をどのように引き出し、その経験をどのように継承して行くかについては、まだ十分に検討されていない。

2-2. ライフストーリー抽出法に関する研究

次に、ライフストーリーを効率的に表出させる手法に関する研究について概観する。ライフストーリーを引き出すインタビュー方式としては、インタビュアー・聞き手と語り手が共同で意味構築をおこなうアクティブインタビュー論のバイオグラフィカル・ワーク手法 (Gubrium and Holstein, 2003) や、インタビュアーが質問せず聞くことに徹して自由に語ってもらう「不干涉のテクニック」がある (Rosenthal, 2004)。これらの手法は、心理学やセラピーへの応用を考えて考案されたものであり、インタビュアーと語り手の1対1の対話において、安心して語らせるために、インタビュアーがどのような対応を行えば良いかに焦点が置かれている。しかしながら、世代間の継承のために必要な語り手の自発的な語り直しについては考慮されていない。インタビューの場についての議論では、語り手が安心していられる自宅や、匿名性の高い喫茶店などがあげられているが (Thompson, 2002; Plath, 1985)、継承を目的とした多角的な語りを促すためのインタビュー手法の理論化はなされていないのが現状である。

また、多くのライフストーリー研究では、語られた内容を分析している。例えば、小林 (1992) は、語り手と聞き手の関係が内容にどのように影響を及ぼしているのか検討している。その結果、親密さが増すにつれて、1つの話題は異なるストーリーで語られるようになることを明らかにした。ライフストーリー・インタビューは、語り手とインタビュアーによる過去の出来事が、現在のインタビューを通し相互行為によって実践される。語りは、両者のコミュニケーションの在り方次第でどのようにも語り出される。ゴフマンの対面的相互行為論としてのコミュニケーション的特質と結びつけて考察すると、この対面的相互行為の場は個人的体験が表現され、共同構築される場である (小林, 1992)。本研究では、親密さが語り直しに影響すると考え、語りを促す手法に取り入れる (第3章)。

2-3. 生成継承性の実践に関する研究

generativity 研究の発達心理学分野では、主に中年期や老年期にあたる高齢者を対象とした generativity における関心の特質や生活に及ぼす実践研究があるが、いずれも generativity の現れや個人がもちうる generativity の評価に関するもので、継承の手法や生成性についての研究はない (深瀬・岡本, 2012; 田渕・三浦, 2014; 串崎, 2008; 小澤, 2004)。また、ライフストーリーに着目した研究はされているが、継承のために必要な要素が何であるか考慮されていない。そして、史実や経験の語りの何に着目し、またどのようにライフストーリーを引き出すかについては検討はなされていない。例えば、安田・やまだ (2008) は、女性の生涯発達の観点から不妊治療をやめる選択プロセスの語りを対象

にした。そして喪失体験から次世代継承につながる女性像としての心理的発達を分析した。この分析では、語り直しが重要であるとし、マクアダムス (McAdams, 2001) による補償の連鎖⁹を分析に用いている。しかしながら、ポジティブ変容のメカニズムを明らかにするのみで、その理論を実際の事例に応用しておらず、さらに語りを促す試みに発展させるべきだろう。

その他の継承法として、デジタルコンテンツ研究では沖縄戦におけるデジタルアーカイブ教材に地域資料が用いられている (大城ら, 2013)。しかしながら、これらはシステムの構築やユーザビリティに焦点が当てられ、どのような物語が継承に必要であるかは議論されていない。ドイツやイスラエルなど歴史教育に力を入れている国々では、世代間継承の研究が活発であるが、これらは主として歴史認識としての集合的記憶構築に留まっており、個人史や地域の記憶への関心は高いものの、その継承法に向けた実践的研究が少ない (人権問題研究室主催国際シンポジウム¹⁰, 2013)。

第3節 本研究の目的・手法

先行研究では、語りを記憶へ定着させるためには、その語りの中身がライフストーリーである必要があることを指摘している。しかしながら第三者や次世代への永続的な継承を考えた際に、次にはどのような要素が新たに必要なのか、または必要でないのかが課題になるに違いない。やまだ (2007a) は、死にゆく者から受け取った何かを自分の中ではなく、次の世代へ解き放つことで継承が進むとしているが、「解き放つ」とは具体的にどのような意味であるのか、「解き放つ」が持つ要素は何であるのか明確に理論化されていない。

また、先行研究では生成継承性は個人の資質によるものではなく、その人のいる環境に依存していることを示唆しているが、どのような環境 (空間・場) が最も生成継承性を高めるのか検討されていない。そして、これらの生成継承性の先行研究は理論の構築のみで、特定の事例に理論を適用した実践分析へと展開させるべきであろう。

したがって、本研究では、これらの問題点を克服し、生成継承性のために「ライフストーリーはどのようにすれば自発的に語られ、後世へ語り継がれるのか」、という問いを明らかにするために、以下のように目的を定める。

⁹ 次世代に何かを継承しようとする志向性の高い大人は、人生において鍵となる経験を語る時、悪い出来事の次に必ず良い出来事を語ると見いだした。そして、そうした補償の連鎖を **Sacrifice, Recovery, Growth, Learning, Improvement** にまとめている (安田・やまだ, 2008)。

¹⁰ 2013年11月16日関西大学「戦争と歴史認識—歴史教育学の可能性—人権問題研究室主催国際シンポジウム」

- ① 実態調査からライフストーリーが語られていない現状を把握し、なぜ語られていないのかその要素を特定すること（第2章）。

次に、多元的なライフストーリーの抽出のためには、どのような環境（空間、場）が必要であるかについて、協働の場を用いた2つ実践研究を行う。

そこで、2つ目の目的として、

- ② 協働の場が多元的なライフストーリーの生成と継にどのように寄与するのか、そのメカニズムを、ゴフマンの役割概念を一視角とした相互行為分析を行うことで明らかにする。協働の場での人々のやりとりをゴフマンの相互行為理論で考えることで、これまで語られてこなかった語りが発現に至った経緯やメカニズムなどの相互行為に関して理解を深める。また、福島県浪江町避難者たちを対象に協働の場の実践研究を行う（4～7章）。

最後の目的として、得られたメカニズムをもとに、

- ③ 自発的に多元的なライフストーリーを生成させる生成継承性の在り方について提示する（終章）。

本研究では「生成継承性」(*generativity*)を、後世に伝えていくために、いかに語られていないライフストーリーを自らが語り、そのライフストーリーの中で、語り直しが行われること、と定義する。

語りの継承に必要な生成継承性を「語り直す」と「末永く語り継ぐ環境」の2つのパートに分け、「協働（力を併せて1つの物事を遂行する）」という概念をもとに、それぞれに対応した2つの協働の場をデザインする。これらの2つ舞台設定では、安全空間の確保と聞き手の配置が考慮されている。

(i) 個人が担う「語り直す」生成継承性のメカニズムを解明するために、対面的 Face to face (FTF) 協働の場。

(ii) 「末永く語り継ぐ環境」における生成継承性として、どこからでも参加可能なバーチャルな協働の場。

(ii) に関しては、ソーシャルメディアという現代型のコミュニケーション様式である語りの場「memorytalk¹¹」を開発した。Computer mediated communication (CMC) の協

¹¹ memorytalk は、地域の記憶継承法としてのデジタルアーカイブの再検討のために、著者らが開発した参加型・協働型のアプリケーションである。詳細は第3章を参照。

働の場である。バーチャルな協働の場を設定した理由は2つある。1つ目は、浪江町は全町避難命令が出されたことで町民が全国に散り散りになり、物理的に集まることが困難であるため、インターネットを介してどこからでも参加出来る環境が必要だからである。2つ目は、現代以降の世代におけるコミュニケーションの形態を考えると、物理的に集まるよりも、インターネット上でコミュニケーションをとることが多いことである。これら FTF と CMC の実践を通し、より現実的で、汎用性のある生成継承性の発現メカニズムの解明が可能になる。

本研究では、2つの実践（実践①、②）を通して、故郷を追われ仮設住宅で避難生活をおくる福島県浪江町民の多面的なライフストーリーがどのように表出されたのか分析する（実践①）。次に、開発した memorytalk を用いたワークショップを行う（実践②）。浪江高校の全生徒とその教員 36 名が、memorytalk を用いて浪江町の思い出を動画作品として制作する。彼らにとって意味のある語りはどのようなものか、どのように自らのふるさとの体験を語り直し、意味づけしたのか、なぜそれらが協働の場で語られたのか考察する。さらに、末永く語り継ぐ環境として、共同構築型である memorytalk が、継承性に与える連鎖性などの効果についても考察する。物語的側面との関連を明らかにすることで、継承のあり方を再検討し、生成継承性につながる多面的なライフストーリーを引き出す手法の構築を行う。その際、語りの多元性を促す要素を特定するため、ライフストーリーの発現における語り手と聞き手の関係性の分析に、ゴフマンの相互行為理論を用いる。

第4節 本研究の意義

これまで1対1のインタビュー形式による聞き取りが行われてきたが、インタビューにおいて回答を多面的に引き出す手法の理論的基盤については議論されてこなかった。本研究は、協働の場で多面的なライフストーリーがどのように語られたのかを解明するため、ゴフマンの役割概念を一視角として相互行為分析を行う研究である。構造主義的なマクロな視点で検討されている語りの在り方を、ゴフマンによるドラマツルギー（演劇論）的見解から相互行為を読み解くことで、個人の多面的自己がどのように扱われているかを明らかにすることが出来る。このことから、文化・社会学の学術的側面にも新たな解釈法を提示することができる。

さらに本研究では、積極的に写真や映像を分析対象とする。昨今、質的研究では映像の可能性として、映像資料の作成や活用も調査分析機材の飛躍的な技術革新にともない

増えていることを受け、映像を使った質的研究が注目されている¹²。したがって、映像作品を通した質的分析を行った本研究は、学術的側面にも新たな解釈を提示することができる。

本研究では、ライフストーリーと協働の2つの概念を援用することで、震災時の語りだけではなく、「日常の物語であるライフストーリーが第三者の心を引きつけ、我がこととして捉える」という生成継承性の発現メカニズムを浪江町避難者に適用した実践研究を通して当事者の経験の継承をどう捉え、可能にして行くかについて分析する。

また、本研究では、主体性を保持することで、主流な教訓の語りや支配的な表象に対するオルタネティブな語りとして、多元的なライフストーリーを生成させる。オルタネティブが提示されることで、支配的な言説や表象に頼らない、多元的な語りの在り方から個人の物語想起や記憶の定着を促進することが可能である。そして、マンネリ化した継承法としての収集・保存から、主体性をもって創造する行為としての生成性のメカニズムを明らかにする。それによって、今後の *generativity* 研究にも「多声性の創出」として、新たな知見を提示することができる。

デジタルアーカイブ事業における新たな利活用を考慮した永続的な継承法のためには、語られなくなった物語を抽出するだけでなく、コミュニケーションツールとして次世代の人が興味をもつようなコンテンツが必要である。本研究で実践された、参加者自らが物語を創造する表現法を現在のメディア環境のコンテンツに取り入れる方法は、災害のみならず、沖縄戦や被爆体験者などオーラルヒストリーの収集・保存の際、デジタルアーカイブにおける利活用の問題において、生成継承性を取り入れた実践研究であり、より柔軟な手法としてその打開策となりうる。

本研究の協働の場でみられた特性である「自由な役割の創出」を継承法に取り入れた研究は皆無である。協働の概念が語りを促し、自由に表現することで、その聞き手も次の語り手になりうる連鎖を生み出す。この一連のプロセスにおいて、協働が継承性に及ぼす影響を明確にすることが本研究の独創的な点となっている。また、永続的な物語の継承を考えたとき、作品化や表現論を取り入れた方法は皆無である。本研究では、記憶継承における協働の有用性を明確に示すことを目指す。

¹² 『質的心理学研究』（日本質的心理学会）第16号[質的研究における映像の可能性]として2015年10月に特集原稿を募集した。

第5節 本論文の構成

本論は、以上のような問題意識と分析枠組みのもと、以下のような章立てによって構成される。

第1章の「序論」の第1節では、研究背景と問題の所在を明らかにして、なぜ継承を考える上でライフストーリーに注目したのか、また対象地域である浪江町の現状を紹介し、本論文の目的を明確化する。第2節では、先行研究として、①生成継承性に関する先行研究、②ライフストーリー抽出法に関する研究と③実践研究に関する先行研究について取り上げ、そこから本論文の位置づけを明らかにする。第3節では、研究の目的と方法論として用いる協働の概要と、この方法論を用いる根拠について述べる。さらに理論的枠組みとして用いる生成継承性に関する理論を概観し、本論文における生成継承性の定義付けを示す。第4節では、本研究の意義を明確化し、第5章に、本論文の構成を示す。

第2章の「メディア表象と語られない物語：福島県浪江町の事例から」では、第1節にテレビ報道における福島の表象とその現実についてアンケート結果を開示し、伝えられていない福島の表象の3事例を紹介し、絶望的な福島表象を考察する。さらに第2節において、メディアによる福島表象、とりわけ視覚表象に関する記号化について概観する。第3節では、浪江町避難者たちの実態として、語られないライフストーリーの存在とその諸問題を明らかにする。これらの側面から忘却を促進させてしまうメカニズムの解明を行う。

第3章の「協働の場の設計」では、ライフストーリーの生成継承性を促すための方法論として、2つの協働の実践について、その意図と設定を説明する。実践①では、ライフストーリー・インタビュー (FTF) の設計について説明する。実践②では、memorytalk アプリ (CMC) の開発内容と、memorytalk を用いた動画制作を行うワークショップについて説明する。

第4章の「ライフストーリーのテキスト分析：実践①から」では、第1節で実践①の設計でおこなったインタビューをもとに、協働の場における語り直しにあたるストーリー領域表出率を計算する。次に、既存のデジタルアーカイブにおけるインタビューとストーリー領域を比較する。

第2、3節では、ライフストーリーにおける3つの語り直しパターンを「対比」、「ユーマア」、「カタルシス」の語りに分け、特徴を明確にし、語り直されたライフストーリーと生成継承性についての関係性を明らかにする。

第5章の「協働の場における多元的な役割距離：実践①から」では、第1節でドラマ

ツルギーに着目するゴフマンの相互行為理解に基づく役割距離概念を紹介し、岩田論文が強調する「多元的役割演技者」を分析指標として実践①で得られたライフストーリーを考察する。第2節では、役割距離とコミュニケーションの視点から、実践①の考察を行う。第3節では、舞台設定の一部であったカメラをとりあげ、その役割について考察する。第4節では、まとめとして協働の場に働いた多元的なライフストーリーの表出を促したメカニズムを明らかにする。

第6章の「memorytalk において制作された動画分析：実践②から」では、まずmemorytalkを使用したワークショップの行程を紹介し、制作された作品の概要をまとめる。第2節では、第4章同様に、作品をユーモアの演出とカタルシスの語りの特徴から分析する。さらに第3節では、写真による記憶想起について分析する。第4節では、これらの作品の特徴を明確にし、「解き放つ」生成継承性との関係性を明らかにする。

第7章の「協働の場における高次なコミュニケーション：実践②から」では、第1節では、memorytalk がバーチャルな協働の場として、動画作品を生み出した過程について3つの次元（副次的関与、ロールプレイング、公開への手助け）に着目し考察を行う。第2節では、みんなが集まることで新たな意味が生まれる集合知の概念と生成継承性の関係性を明らかにする。

終章では、まず第1章から第7章において明らかになった点を整理し、そこから見えてきた考察を踏まえ、今後の継承活動にむけての3つの生成継承性の在り方を提案する。最後に今後の課題と展望を述べる。

第2章

メディア表象と語られない記憶：福島県浪江町の事例から

第1節 テレビ報道における福島の表象とその現実

第2節 表象が促すスティグマとライフストーリーの埋没

第3節 福島表象に隠れる避難者たちの思い

第1節 テレビ報道における福島表象とその現実

本章では、浪江町避難者たちがおかれているライフストーリーの実態を、メディアによる福島表象の分析とフィールドワークに基づいたアンケート・聞き取り調査を用いて明らかにする。

1-1. 届かない浪江の声

① メディア報道と忘却

東日本大震災から月日が経ち、以前に比べ、テレビが扱わなくなった被災地。首都直下型地震の危険性や様々な自然災害による報道が続く一方で、震災への忘却は確実に進んでいる。調査対象である福島県浪江町の場合、例えば2011年3月～6月までの3ヶ月間、「故郷はどうなるのか？」(NHK「クローズアップ現代」)など、浪江町民たちのふるさとをめぐる葛藤が描かれた特別番組は、全国放送で5本組まれた¹³。帰還を待ち望むもの、移住を決意する家族など多様な側面を紹介した番組構成であった。しかし、2年目以降になると、「浪江町」の日別単語使用回数では、特集番組放送日や節目の3月11日などで顕著に回数が増えるものの、浪江町は特番やニュースで取り上げられることはほとんどなくなった。第1章でも述べた通り、テレビ局も震災関連の番組を放送するのが難しくなっている。ローカル局・キー局によって異なる番組構成や優先順位、風評被害を懸念してカットされる一部の内容など、被災地の声はさらに届きにくくなっているのが現状である。

本章では、実態調査をもとに、メディア、とりわけテレビが表象する福島は何であるのか、さらに視覚表象が導く現状や当事者たちが抱く違和感について検証し、直面する忘却のメカニズムを明らかにする。

② 浪江町の現状

2011年3月11日の原発事故発生から数日間、浪江町には事故については何も情報が入らなかった。町単位での避難警告の発令が遅かったために、避難が3月15日になったということが、聞き取り調査からも明らかになっている¹⁴。しかも多くの避難者が、線量が高い津島方面へと逃げ続けた話は、朝日新聞「プロメテウスの罠1」でも紹介された(朝日新聞特別報道部, 2012)。たとえ地元への経済的恩恵はあったにしても、この代償はあまりにも酷である。東京電力を非難すると、「でも東電から恩恵があったの

¹³番組表については Appendix A を参照。

¹⁴聞き取り、60代女性、2013年9月18日。

でしょう」と言われることさえあり、声高にいけない複雑な事情が調査から掘り起こされてくる。

放射能は目に見えない。そのことで福島県民のみならず隣県の住民まで不安を募らせることになる。しかし、福島市の仮設住宅で避難生活を送る浪江町の人々への聞き取りを2年間にわたって続けた結果、避難者たちが葛藤を感じているのは、放射能や汚染水問題だけでなく、日々選択を迫られる不安定な日常生活そのものや将来への不安感であることがわかった。例えば、風評による福島差別への懸念。年頃の娘を持つ親は、福島出身ということで娘が将来結婚できるのか、この先直面するであろう差別に不安を抱いている。政府から避難等対象区域と避難等の指示があった住民たちは、東電からの賠償金（1人当たり月10万円）を受け、避難者手当¹⁵として医療費や公共料金が税金でまかなわれていることから、ねたみを受けることがある。これらを避けるために、避難者たちは身を寄せ合い、世間から隠れるように生活する。そのほか、沿岸部と山間部、家が残っている世帯と流された世帯とでの財物保証の有無といった被災境遇の違いも孤立や差別を招く一因となる。世間での原発事故への忘却が進む中、長引く仮設住宅、借り上げ住宅での避難生活を余儀なくされた避難者たちの募る将来への不安は計り知れない。

これらの背景から、メディア、特にテレビへの対応が決まってくる。メディアに顔や名前を出すことにより人物が特定され、境遇が違う者との間には考え方の差異が表面化し、近所付き合い、交友関係に響くことを恐れる。個人情報の特定を避けるため、自分の将来を守るために、公共の場に出ることは回避され、ますますメディアの取材を受ける人は少なくなっていく。仮設住宅という住み慣れない、それでいながら強固なコミュニティの中で円滑に過ごすために気を配っているのが現状なのである。

③ 調査方法

本章の考察は、アンケート¹⁶と聞き取り調査にもとづいている。福島市の仮設住宅で避難生活をおくる浪江町民を対象に、東日本大震災のテレビ報道に関するアンケートを行った。福島市に併設する浪江町仮設住居（笹谷仮設、北幹線仮設）で、無記名調査方法による。各世帯一部配布（自治会長より各世帯配布）し、仮設住宅集会所設置の回収ボックスにて一括回収を行った。その結果、300世帯中、47世帯から回答を得た（50～80代の男女）。回収率は低かったが、別途聞き取り調査が可能な方5人に、追加の聞き

¹⁵精神的損害による賠償金（東京電力）、国民健康保険、後期高齢者医療制度および全国健康保険協会に加入している福島県避難民を対象とした医療費の免除制度（厚生労働省）。

¹⁶ アンケート内容については Appendix A を参照。

取りをほぼ1年間にわたり実施した。得られた回答例は少ないが、聞き取りを重ね、観察を踏まえて分析を行った。現地に身を置き、避難者たちの日々の生活に入ること、テレビ報道では知ることができない貴重な意見や複雑で多様な心境を伺うことができた。これらの意見を元に、送り手であるテレビ関係者へのインタビューを行い、補足を試みた。

④ アンケート調査から

次に、浪江町避難者たちへのテレビ報道に関するアンケート調査結果を紹介する。以下、原発事故当時における震災/原発に関するテレビ報道（全般）について、どう感じたか、震災当時から今現在の心境についての結果である。震災当時違和感やいらだちが強く、現在ではそれらの感情は弱まってはいるが、不信感は今もって存在している（図1）。

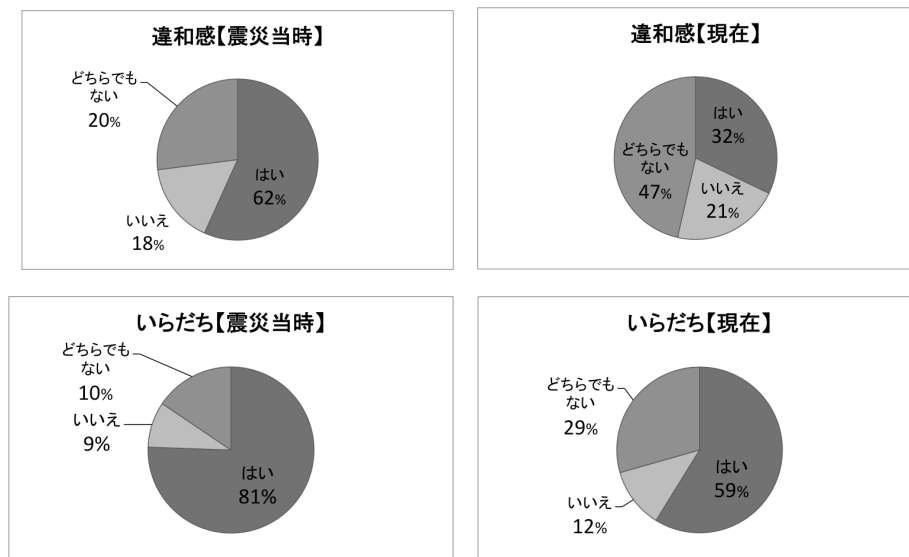


図1 いらだち・違和感の変化（震災当時から現在）

自由記述欄には、「宮城、岩手の津波の放送ばかりで違和感を覚えた」と情報の欠落や偏りからくる不安や「テレビから排除された浪江町の情報は、国家も県も自分の立場のみで、この国はどうなってしまうのかという不信感やいらだちのみが残された」、「福島中心の報道が少ない。東北地区は仙台NHKが企画しているのか?」、「マスコミは浪江町は除染して帰る話ばかり。無駄なものにお金を使ってほしくない。テレビも帰りたい人たちの映像ばかり映している気がする。」「同じ質問をするなど言いたい」などが述べられた。その反面、「浪江町から、津島への避難、津島から二本松への避難は他なら

ぬテレビによってのものであった。」とテレビが重要な機能を果たしたことについても記述があった。

1-2. 伝えられてない福島の実情

アンケート調査の回答者 70%が浪江町の本当の姿が伝えられていないと答えた理由は次のようなものだった。「放射能のことが伝えられていない」、「捜索活動になぜ1ヶ月以上あけたのか、線量が低かったにも関わらず、現地に入ることができたのに、マスコミではとりあげられない。本当のことを報道してほしい」、「避難者の苦しみ、風化されてきた。わすれないでくれ」、「除染して帰る人ばかりとりあげないで、危険なことも知らせて、自分たちのことを忘れないでくれ」。これらの意見から、メディアが自分たちの現状を発信し、避難生活の困難さを全国に伝えてもらうことで、現状改善へのインシアティブをとることに期待をかけてきたことがわかる。しかし、発信されたテレビ報道の福島表象からでは、避難者たちのおかれる現状は、伝わりづらく、見えづらい。責任回避する東電や政府への怒りが増す一方で、多くの避難者はメディアに対しては、その福島表象に違和感をもつようになり、それはやがて諦めへとシフトしてしまった。

ニュースとして紹介されることを期待したコメントは数秒に編集され、断片的にしか伝達されないのが現状である。本聞き取り調査から、テレビには繰り返し問われてきた3つの問題があることがわかる。1つは報道されずに終わった出来事、2つ目は全国との温度差が大きかった出来事、3つ目は美談として表象された出来事である。以下、これら3つの事例を紹介し、避難者の繊細で複雑な訴えが抜け落ちている現状と彼らが感じている違和感をまとめた。

① 放置された請戸-空白の1ヶ月間

図1から、いらだちと違和感がいずれも震災当時は多く、現在に至っても、違和感を抱き続けていることが明らかである。テレビによる報道に対し、安心感や信頼感といった感情は低いことがわかる。

福島第一原発から10キロ圏内に位置する沿岸部の浪江町請戸地区は震災後の原発事故による放射能汚染により、2011年3月12日から立ち入り禁止区域となり、津波に呑み込まれた地域にもかかわらず、救助・捜索活動も十分に行われなかった。そこには最悪の事態を逃れ、助かった命がたくさんあったに違いない。爆発後、それほど放射線量が上昇していなかったのに、捜索出来なかった悔しさ。翌朝捜索に行っていれば、両親が無事だったのではと悔やんでも悔やみきれない念をこらえながら日々を過ごす方がいた。この60代男性の両親の遺体が見つかったのはDNA鑑定結果からであった。多

くの遺体は放置された。震災から約1ヶ月後の4月14日に放射線量が低下したとして、原発より半径10キロ圏内の一部で福島県警による行方不明者の大規模捜索がはじまり、その捜索によるものである。救援ができなかった事実と実は線量がそれほど高くなかったことの因果関係は未だ検証されないままである。「生存していたかもしれない親族が見捨てられた身内の気持ちを考えてほしい」と捜索を中止させた行政への抗議の声はニュースに取り上げられず、命の尊厳、亡くなった方への追悼はかえりみられなかったという¹⁷。空白の1ヶ月間は報道陣が取材に入ることもなく、その惨状の記録すら残っていない。

さらに、聞き取り調査を進めると、この地域には過去津波が到来した歴史がなく、避難についての教訓も伝えられてこなかった。そのため、逃げ遅れた方々の犠牲が増えたというのだ。請戸地区で代々漁師を営んでいた80代男性は、「そもそも津波が請戸地区に来た歴史がなかったので、避難をするという概念が無かったし、来ても床下浸水くらいだと思っていた。震災の教訓を教育の場でも導入するべき。安全神話を信じきっていた」と述べた。

妻や家族を失った人々が声を上げ、取材に応じるのは、被災地浪江町が忘却の危機にあるのを強く意識し、後世に伝承していくという意志からのものである。だからこそ根気よく取材陣の取材に応じ、請戸での実体話を話してきた。しかしその内容はなかなか報道されなかった。放射能汚染により、カメラすら入らなかった土地に住む住民たちの思いや記録は保存されなかった。町の歴史を残して行く上での重要な記録は他の被災地に比べてきわめて少ない。本来、津浪被害の証言や記録の保存は非常に重要となったはずである。

② オリンピック招致—歓喜に沸く日本との温度差

2013年9月、2020年開催オリンピックの東京招致が決まった。テレビは祝賀ムードにあった国民の反応を伝えた。仮設住宅にも報道陣が取材に入ってきた。2013年9月8日NHK9時のニュースでは仮設からの声として「福島のことを忘れないでほしい」と伝えた。実際の避難者たちの胸の内は次のようなものであった。

「福島県以外は喜んでいるが、メディアには言えないし、憎まれたくない。6年先のオリンピックが楽しみなのか、と聞かれても先行きが見えない今の状態ではそうは思えない。何もうれしくはない。オリンピック招致を喜んでいる人はいないといったが、カッ

¹⁷聞き取り、60代男性無職。2013年9月22日。

トされている」¹⁸。「だってみんなが喜んでいるときに、悲観的なことはいえないでしょ。本当はうれしくなかったのだから」と正直な気持ちを漏らす人も多かった。考えの違いや境遇の違いなどに対して、仮設住人は互いに気を使いながら生活を続ける中で、声高に言えないところに現実があるという。このように、気を使うという行為には避難者という立場上、自らの意見を抑制するという複雑な構造が潜んでいる。この複雑な構造については、次節で負い目やスティグマとして論じる。

宮城県、岩手県などの津波で被災した人々とは違い、原発事故を受け、避難区域により認定された避難者たちは東京電力からの心理的賠償金を糧に生活する。そのことで、周囲に遠慮しながら控えめに生活しているのが現状である。負い目を感じ、反感を買うような言動はおさえ、避難者というイメージを保つために本音は押し殺される。特にこのオリンピック報道で沸く日本国民と避難者たちの間に温度差が生じた。個人差、温度差、地域差が共存する仮設住宅で円満に生活するには、本音と建前は分けて発言することが現実となっている。

③ 帰還という表象—除染と事業再開 掲げる復興のイメージと現実

未だ放射線量の高い浪江町にとって、帰還という選択は複雑である。帰りたくても帰れないのが現状であり、一筋縄にはいかない。浪江町が実施した平成26年度の意識調査によれば、浪江町への帰還意向について「戻りたいと考えている」が17.6%、「まだ判断がつかない」24.6%「戻らないと決めている」48.4%となっており、過去2年（平成25年度の意識調査：戻る18.8、判断つかない37.5%、戻らない37.5%、平成24年度の意識調査：戻る24%、判断つかない34%、戻らない42%、）から比べても戻りたいという意志は薄らいでいることが分かる¹⁹。その反面、2014年4月から避難指示区域解除となった田村市都路地区を皮切りに、線量の低い市町村への帰還ニュースは、帰宅困難区域の避難者たちにとっては必ずしも明るい話題ではない。避難者たちの多くは帰還を望まないという意見が多い中、国から「帰還は無理」と言ってもらった方が、見切りを付けて、前に進めるという意見も多数寄せられた。

そのような中で「故郷に戻りたい」を強調した番組編集や除染の進行具合を報道したものは、あたかも帰還への準備が進行しているかのようで、避難者たちの多くに不快感を与えていたことがアンケートや聞き取り調査から明らかになった。ある60代女性は、「男性は帰村したいが、女性は全くそうではない。浪江に戻りたいというメッセージの

¹⁸聞き取り、60代男性無職、2013年10月9日。

¹⁹浪江町ホームページ <http://www.town.namie.fukushima.jp> 2015年10月12日閲覧。

み残す番組構成は現実とは違うものだ。原発問題はカットされ、助け合いなどの美談のみ残し、困っていることはカットされている」とテレビ報道への違和感を訴えた²⁰。除染が進み、前向きで復興の兆しが伺える帰還のニュースとそれを待ち望む避難者の声は報道で取り上げられやすい。ある男性は浪江町民が震災後初めて事業を再開したニュースで、わざわざ給料をあげているシーンが使われたことに違和感を覚えたという。なぜなら、「観ている人はもう（事業を）やっているのだと思うじゃない」と先走る復興・帰還に向けた兆しが伺える表象に矛盾を感じている。実際はまだ事業が再開しておらず、補助金で給与を支給していることを承知しているからであった²¹。震災当初は、一刻も早い帰還を願う避難者像と避難生活の過酷さが多数あった。しかしこの4年間で進行した家の老朽化や非現実的なインフラ整備、進まぬ除染の課題は宙に浮いたままである。「放射能という壁があって、自分の努力では生活再建できない。これが一番歯がゆい思いです。温度差があるのは賠償金の差。（水爆実験場に近かった）マーシャルアイランド²²では帰村を命じたが、その後流産などの健康被害が絶えなかった。この事実をもって、帰還という案は将来どう責任を取って行くのか。目に見えないことで、手探りの状態」と、不安を漏らした方もいる²³。

2012年10月に浪江町は「5年間帰町しない」と明記した復興計画を国の原子力災害現地対策本部に提出した。早期帰還を望みつつも、「今は帰らないと言わざるを得ない」という事情があった。それが、「一律賠償の実現」である。政府が公表した不動産の賠償基準では5年間帰還できない帰還困難区域とされた地域は、事故前の価値の全額を賠償するとした。そのほかに、居住制限地域、避難指示解除準備区域が編成される浪江町は、住民の不公平感を考慮し、3区間の賠償金の隔たりを一律に近づけるための宣言となる。町と国のすれ違いは震災後から深刻化している²⁴。

そして政府は、2013年12月には帰還者だけでなく他県などに移住する避難者、両方への支援を進める方針に転換した。それに沿って、「NHKスペシャル 故郷か移住か原発避難者たちの決断」などのテレビ番組内容も避難者の選択を紹介したものへシフトした²⁵。それにもかかわらず、テレビから発信された番組の多くは、復興へ前進する美談

²⁰聞き取り、60代女性無職、2013年12月12日。

²¹聞き取り、40代男性、2013年12月18日。

²²1946年から1958年にかけてビキニ環礁とエニウェトク環礁で米国により67回行われた。一連の核実験により大量の放射性降下物が島々に降り注ぎ、深刻な環境汚染をもたらした。国際人権ひろば No.79 (2008年5月発行号)。

²³聞き取り、50代男性、2013年9月8日。

²⁴「日本経済新聞」、2012年3月6日朝刊。

²⁵番組表についてはAppendix Aを参照。

化されたストーリーや帰還が進むべき復興を表象したものとして、当事者である彼らに伝わり、結果として避難者たちに違和感を与えてしまっている。

1-3. 残像としての「絶望的」な福島

そもそも震災をはじめとする、カタストロフィにおいて、当事者の言葉に出来ない悲痛な思いをあえて言葉で語ろうとすると、強引さや無理があることから違和感が生じる。メディア環境における表象においては、このような悲痛な体験の感情を安易な言葉で語ることそれ自体が失効していることは議論されてきた（小林, 2010）。当事者たちが抱いた違和感や不信感はメディア表象がもつ「語るに語り得ない」という原理的な問いを無視して、本音を押し殺したまま取材を受け、語り、表現されているという場面が成立していることが原因となっている。語りづらい胸の内を抱えた避難者たちが取材に応じる際、メディアとの関係を保持すること自体が難しい。

しかし、メディアでは、その語りづらい胸の内を伝える代わりに、インパクトのある原発の水素爆発の瞬間を捉えた映像や子供たちがマスクをしたままの運動会などの視覚表象が繰り返し報道されてきた。特に、福島中央テレビのカメラが撮った爆発の映像は海外でも広く報道に取りあげられてきた。「あの映像は全世界に福島を『絶望』のイメージとして伝えてしまった。『福島はもうダメだ』と多くの人に思わせてしまった。私たちは、自分たちが伝えた絶望のイメージを何十年かかっても払拭して行かなければならない」と、福島中央テレビ報道制作局長佐藤崇(2014)は記者からの話を紹介した。このように福島の絶望的なイメージが残り続ける限り、福島の復興にはつながっていかないと佐藤は述べる。

また、マスクをした子供たちが運動会の玉入れ競技に励む光景は危機感を伝えるための絶好の表現となったのだろう。テレビユー福島報道局長大森真は2年ぶりの屋外での運動会取材の際、運動会を取材した映像をキー局でも欲しいということで、昼のニュースに全国に差し出したところ、その日のキー局のデスクが「なんでマスクしているところが映ってないのですか。マスクしながらやっている、その異常さがニュースなのですから」と言われて、激怒したことを語った²⁶。いずれにせよ、福島の現状はメディアの絶望的で危険な福島表象によって福島内外と温度差やズレが生じていることは明らかである。放射能という見えない危険を表すセンセーショナルな映像は、単純化された福島の表象であり、本来の姿や複雑な避難者たちの心境は軽視されている。2014年5月に刊行された漫画『美味しんぼ』では放射能汚染による鼻血の場面が描かれた。この描

²⁶ テレビユー福島報道局長大森真 2014年2月25日インタビュー。

写が不適切な表現であると、福島県双葉町が発行元の小学館に抗議する騒動に発展した。

大地震、津波などがれきを撮った視覚表象とは異なり、見えない惨事の表象は爆発、マスク、鼻血といった終末論を彷彿させる記号を駆使し、福島の危機性を強調するばかりで、惨事のコアからは遠ざける。テレビの視聴者はただその記号を消費し、問題を理解しているという錯覚を与える可能性を孕んでいる。これらの視覚表象は、福島の非日常的イメージを与える働きがあるため、風評被害を招き経済的復興は遅れてしまう。

受け手は当事者と非当事者がいるという事実を考えなければならない。ここでは送り手であるメディアは非当事者へ向けた報道内容として、発信しているのではないだろうか。やはり見落とされているのは、当事者目線で捉えた福島の日常からの声である。

第2節 表象が促すスティグマとライフストーリーの埋没

メディアが描いた特徴的な福島表象の1つに、放射能と共に生きていかなければならない福島の絶望的視覚表象の存在があることは紹介してきた通りである。このような恐怖をあおる絶望的な福島像が作り上げられたことで、避難者たちの生活にも影響を及ぼしている。

第1章でも述べたように、避難者たちは、この先直面するであろう差別への不安を抱き、賠償金受給による周囲からの非難やねたみは、その連鎖から、差別を生み、避難者たちは社会によって不本意なスティグマが刻印されることになる。

ある自営業の女性は「私は避難者としてではなく、普通の人に見られたい。テレビでは帰還したい避難民のイメージで、早く普通の生活、以前のように暮らしたい。いつまでもお世話になっているようじゃだめだ。」と答えた²⁷。その声の裏には、傷ついた自らを奮い立たせる渾身の思いを感じさせる。なぜ当事者である避難者が非被災者として扱われたいと思うのか。皮肉なことに、メディアによる福島表象は、当事者たちに社会からのさらなる負い目をつくりあげ、風評被害や人目を気にする気持ちを引き起こしている。そして被災者は自らの声を抑制するようになるという服従関係におちいる。特に、新聞やラジオなどとは違い、テレビは映像媒体により配信されるため、人物が特定されやすいため、取材を避ける傾向にある。この一連の連鎖は、避難者という弱者に働く見えない暴力ともいえる。さらに、長い歴史や文化の中で育まれてきた農村におけるスティグマは消滅したわけではなく、むしろ今回の大規模自然災害により、社会の表面に、

²⁷聞き取り、40代女性自営業、2013年12月18日。

より顕著な形で現れてしまった事実を確認することができた²⁸。

本アンケート調査の最終項目、「今後報道機関の取材を受けますか？」という質問では、「はい」と答えたのは28%のみだった。先が見えない将来への不安や国や東京電力への不信感が募る中、メディアの表象にも失望して取材を受けることへの意欲は低い。

自然災害は家族やコミュニティーを否応なく崩壊させ、被災した弱者たちがそのしわ寄せを受ける。坂田（2013）は震災以降、被災地では自らを語ることの出来ないサバルタンの人々が生じている理由として、サバルタン²⁹の声を社会に届けるための社会的機能を果たすメディアによる「表象／代弁」の問題が大きな影響を与えていると述べている。メディア向けの言説だけが汲みあげられ、被災当事者たちは他者化される。このようなメディア環境化では、人物が特定されることで、中傷されることを恐れ、テレビメディアから距離をおくことは自然な自己防衛である。もはやメディアとの関係を絶ち、震災は過去の出来事として、一刻も早く通常の生活に戻ることが前進している証しと考えるのである。

第3節 福島表象に隠れる避難者たちの思い

3-1. 福島表象の限界

マスメディアによる福島表象が、避難者たちの違和感を促す要因として、センセーショナルな視覚表象（爆発や鼻血）が人々の印象に残り、災害全体を表象してしまうのである。その惨事を体験していない人々は記号を消費し、核心にふれたかのような幻視³⁰に出会う原理が潜んでいるからである。このように、メディアによる表象には限界がある。この場合、やはり見落とされているのは、当事者目線で捉えた福島の日常からの声である。

さらに、避難者自身もスティグマから口を閉ざしてしまうことで、思いやその土地の記憶は保存されず、埋没してしまう。現に、あの日以後、浪江町人の中で語られる内容は、震災後の浪江であり、それまでの浪江の記憶はそこで停まり、埋もれてしまったようにも思える。

新聞記者の取材を受けることはあっても、個人が特定しやすいテレビ局の取材は拒絶

²⁸ 著者らは宮城県と福島県の仮設住宅で避難生活をおくる社会的弱者として、スティグマを抱える高齢の避難者がさらされている、「自らの声を抑制させてしまう」という自発的服従的行動が見えない暴力に結びつくことについて報告した（Sasaki and Sakurai, 2015）。

²⁹ サバルタンとは社会のなかで従属的な立場にある集団や人々のことを指し、一般的には、移民や女性、障害者といった社会的マイノリティを指す（坂田, 2013）。

³⁰ ボードリヤールは『消費社会の神話と構造』において、真実よりも真実らしいこととして、その場になくともそこにいる感覚を幻視と表現している（Baudrillard, 1979=1995:25）。

する傾向にあることは、70代無職男性によって語られている³¹。このような社会からの負い目は、避難者たちの声を閉ざし、やがて避難者自身も自らの震災の記憶や苦しい記憶を封印することで、当事者の語りはそこで途絶えてしまうという負のスパイラルが存在する。

避難者たちがメディアとの関係性を断つことで、生の声が報道されていない状態を考慮すると福島についての表象はさらに困難な状況におちいつている。この語られなくなった福島の現状には、風化を益々加速させてしまうという危険性がはらんでいる。「忘れられるときが最大の危機」とラファエル (Raphael, 1986=1995 : 21)が述べているように声にならない悲痛な思いを、抑制し、風化をさらに促進させている。避難者自らが導く、「カタストロフィが語り尽くせていない現状」は、当事者たちが語らないこととメディアの支配的な表象の問題、二重の負い目から後世に出来事を伝える記録としての素材がないという、継承にとっても危機的状況にあるといえる。

メディア表象の限界を理解しながら、そこから抜け落ちた当事者たちの声に対し、私たちは何をすべきなのだろうか。

3-2. 表象不可能性を超えて

未だ安住の地が見えない避難者たちにとって、これからの人生を築くために、家族や自分を守るために、メディアを排除することは当然の行為である。ただ、このことは、忘却というもう一つの危険を招きかねない。ここで考えなくてはいけない、「忘却の危機」とは、私たち、非当事者へ向けられた課題だということである。忘却の責任を当事者に帰すのは二重の重荷を負わせることなのだ。この「口を閉ざすこと」を余儀なくさせられている避難者と社会が抱える忘却の危機という課題を社会全体への問いとして、両者を把握し、現状の改善を目指すべきなのである。

本調査では、マスメディアによる表象の限界が明らかになった。しかし、本来、テレビなどマスメディアは、被災地の状況を伝えるのに有効な手段のはずである。また避難者が期待するのは、メディアについてしばしば語られてきた「権力のチェック機能」であり、「弱者の味方」としての立場である。その信頼を維持するために、送り手であるマスメディアは表象の困難な事象を安易に表象してしまうことに、慎重になるべきであり、当事者たちの声に聞く耳を持つ必要がある。

複雑な被災地の実体を考察する上で、福島をどう捉えるか、見えない声や抜け落ちていく声をどう表現し発信するか差し迫った課題である。

³¹聞き取り、70代男性無職、2013年8月21日。

福島県浪江町民への聞き取りを重ねていくと、原発事故やメディアについて語ることもよりも、ふるさと浪江を思う強い気持ちやコミュニティーが与えてくれる安心感、そして失った浪江を深く意味付けする物語の存在を強く感じる。そこには、故郷喪失の中、“孫の代まで浪江の記憶を届けたい”と願い、今まで彼らが語ってこなかった、浪江町の出来事や思い出、苦悩や喜び、浪江という土地が奏でた多角的な浪江の記憶がある。避難した小高い丘は、ただの名も無い丘ではなく、四季折々で人々が集う憩いの場であった。

震災後、浪江町民の間で語られる多くの語りは、避難生活に関するものばかりである。震災前の浪江についてはめっきり語られなくなっている現状がある。全国で避難生活を送る町民たちは、新たな生活を築いたため、町民たちの間でも浪江時代の記憶は確実に薄らいでいる³²。

しかし震災から月日がたった現在、テレビの福島報道で多く見られるのは、行き場をなくした無数の黒いポリ袋の姿である。袋の中身が一体何であるのか想像し、このポリ袋の意味を考えてみる必要がある。ふるさとの土はえぐられ、汚染物として、または事故の象徴となり、私たちの脳裏に原子力の姿を映し出している。その土地に住んでいた、彼らの生きてきた意味、ふるさとの記憶は全て黒のポリ袋としてすり替わり、汚染物が次にいく先が問題にあがるのみとなった。

このように記号化された表象により抜け落ちた声を救うために、マスメディアの力に頼らず、当事者自らが発信する主体性をもった柔軟なメディアを駆使し、テレビ報道では伝えることができなかった内容を保存していくことは可能なのではないだろうか。

以上の浪江町避難者たちへの調査から、福島表象における忘却のメカニズムと彼らのライフストーリーが語られていないことが明らかになった。次世代へ記憶をつなぐためにも、当事者たちの日常の物語や思いが記録・保存されないことは危機的状況である。抜け落ちている声をどう引き出し、次世代へ継承するかは喫緊の課題である。

³²聞き取り、50代女性教師、2015年10月1日。

第 3 章

協働の場の設計

第 1 節 協働の着想

第 2 節 2つの協働の場の設計

第1節 協働の着想

1-1. 協働の定義

抜け落ちている声をどう引き出し、次世代へ継承するかという課題に対して、多声性のあるライフストーリーが継承性につながるという論証（やまだ, 2000b:259）に依拠しつつ、本章では、自己の新たなバージョンを生み出すための「協働の場」を用いた実践手法について述べる。

協働とは、英語「collaboration」の和訳である「ともに働く」という意味である。この用語は、研究者などによる「共同制作」や「共同作業」を意味する用語としても使用される。坂本（2008: 52）は、協働の定義として「自らが属する組織や文化の異なる他者と一つの目標に向けて互いにパートナーとしてともに働くこと」と述べ、協働で一つの目標を実現するためには困難や葛藤を乗り越える強い意志、他者との違いを乗り越えるための柔軟性やコミュニケーション能力が不可欠であるとしている。多元的なライフストーリーの促進のためにも、この協働の概念が有効であると考えられる。

本研究では、協働を他者と出会い、自発的に双方のために他者と連携し、その目的のために取組むことであると定義する。そして、協働の場とは、他者と出会い、自発的に双方のために他者と連携しやすくした場であるとし、協働のプロセスにより新しい物語が生み出される場とする。

本研究では、協働が多元的なライフストーリーの促進にどの程度寄与するのか調査する。調査方法としては、浪江町避難者たちの多元的なライフストーリーの生成を可能にするために、まず、実践①では参加者たちが自由にライフストーリーを語り直すための環境をつくることを考慮した。語り手、聞き手、質問者の垣根をなくし、主体性をもたせるためにギャラリー席を設けた。相互行為を促すために、親密者同士／複数の登壇を可能にした「同空間での対面行為（FTF）」を設定した。実践②では、実践①で得られた理論を現実世界に応用することを考えた。浪江での場合をあげても、全国に散り散りになっている現状から、実際に FTF を設定することは容易ではない。したがって、実践②ではインターネットにおける汎用の共同構築型ソーシャルメディアサイト（動画共有サイトや wiki サイト）に注目した。しかし、これらのサイトはつながることが出来ても親密性や主体性を維持することは難しい。よって、実践②では memorytalk という共同構築型のアーカイブ・アプリケーション開発からスタートした。memorytalk には、メンバー自らコンテンツをアップロードできる機能や、ならびにコメントを書き込める機能を追加し、新しいコミュニティ創生を継続的に行うことが可能な場を設計した。そして、実践①で得られた知見を構築するために、ライフストーリーを動画作品として

作成できる新規機能を構築した。memorytalk 機能についての詳細は、同章の 2-2.にて記述する。

1-2. 協働についての先行研究

これまで協働の概念は様々な研究分野に援用されてきている。例えば、まちづくりのためのコミュニケーション的都市計画概念 (Collaborative planning) の協働実践 (Healey, 2006:203)や安藤(2013)による単身高齢者に向けた協働参画ソーシャルワーク型実践の取り組みや、やまだによる学習法に導入した協働の学びを活かした語り法など多分野に活用されてきている³³。他には、物語が語られるための方法論の研究がある。心理学や社会学の領域では、セルフヘルプグループ、フォーカスグループインタビューやアクティブインタビューといった方法論が実践されている(桜井・小林, 2005:186)。しかし、生成継承性のためのライフストーリーを引き出す手法は、これまで考慮されてきていない。継承のためには、語りを生成するだけでなく、その語りの継承を同時に考慮することが必要である。したがって、本研究で提案する 1 つ目の協働の場 (実践①) は、まさに、セルフヘルプグループ、フォーカスグループインタビュー、アクティブインタビューの 3 つの方法を兼ね備えた「語り直し環境」としての対面的 Face to face (FTF) コミュニケーションの場である。

ネットワーク技術に支えられた高度情報社会にある現代は、双方向コミュニケーションの場として、wikipedia やソーシャルネットワークサービスを利用した参加型・協働型の試みがみられる。これらは、自由に追加・編集できる特性から、項目の内容の信頼性に批判の目が向けられることが多いが、気づいた人が修正・加筆していくという前提のもとユーザーへの信頼により成り立っている³⁴。また、芳賀 (2008) は、美術教育に wiki³⁵を利用して作成した Web サイト「造形教育 Wiki」を使用した。これは情報の共有と共同構築の場としての以下の 3 つの利点を備えている。(1) 情報共有の場により、更新がくりかえされることによって、情報が正確さを増し、その正確さを求めて来たユーザーを巻き込み、好循環がうまれる。(2) ユーザーはそのサイトの目的を他のユーザーと共有し、競い合っってより良いコンテンツを作り出す雰囲気をつくり、共同作業の場として活用できる。(3) 誰もが参加し、ともに制作することでコミュニケーションがうま

³³ やまだ (2007b) は同じ釜の飯を食べる、寝食をともにする、ファシリテーターを置く合宿という協働を設定し、語りの誘発にとりくんだ。合宿という協働の場から多様な解釈や見方が発現することで生成の連鎖が生み出されることを観察している。

³⁴ 芳賀 (2008) によると、wikipedia 管理について、執筆者同士の意見の相違から、問題が生じ、運営スタッフが仲裁に入ることもあるとしている。基本的には解決策により最適な方向へ進むとされている。

³⁵ wiki とは Ward Cunningham によって考案されたフリーソフトである。Web ブラウザから Web ページの作成・編集が誰でもできる。最も認知されているのが、ユーザー参加型百科事典の wikipedia である。

れる。

これらの利点を参考にすると、2つ目の実践として、インターネット上での協働が可能であるComputer mediated communication (CMC)におけるバーチャルな協働の場が必要である。本研究では、「末永く語り継ぐ環境」の設定として、memorytalkを開発した。実践②ではこのmemorytalkを用いたワークショップを行う。このmemorytalkを用いることで、全国で避難生活を送る浪江町の人々が、いつでもmemorytalk上で協働を形成することができるかと仮定して、実践②として用いる。以下、2つの実践について詳しく説明する。

第2節 2つの協働の場の設計

実践①、②の設計において安心して語るための空間の確保と聞き手の配置を考慮した。

2-1. 協働の場の実践①：ライフストーリー・インタビュー

実践①では、多重な相互行為を生み出す協働の場におけるライフストーリー・インタビューを用いる。語り手が安心感をもって語るができるために、同級生、お隣仲間、親戚などの親密性を持った者同士が相互行為を行える場の設定を行った。また、安心して語るための空間を確保するために「ギャラリー席を設ける」こととした。このようなオープンな場を設計することによって、順番を待つ語り手が、他のインタビューを聞くことで何を語っているのか情報の共有が可能である。ふるさとを奪われ避難生活をおくる浪江の人々にとって、質問者と1対1で対話をするよりも、開かれた空間の中で、既に確立されたコミュニティー間で自由に語ることで、ストレスは軽減する。さらに、実践①は通常1対1で行われるインタビュー形式とは異なり、語り手が複数登壇できる自由さと複数の語り手による掛け合いを可能にしている。情報の共有と複数による登壇者を可能にすることで、気兼ねなく安心して語れる空間を確保した。

次に、聞き手の配置として、気心の知れた仲間と井戸端会議のような対話形式を採用した。ここでは、ご近所付き合いのある隣人や親戚が聞き手として介在する。実践①では、著者が質問者と聞き手役を担うとともに、ギャラリー席で観覧するオーディエンスも聞き手として参加する。実践①では、順繰りの語りにより、次の順番を待つ聞き手が次の語り手になる。

本研究では、協働をつくりだすために、事前に「第三者による語り継ぎではなく、私たちがつなげる浪江」と参加者たちには実践の趣旨を説明した。なぜなら実践する中で協働が形成され、「みんなで一緒におこなう」と掲げ、参加者内の相互行為を促すため

である。

実際に行った協働の場を図2に示す。この場を使用し、浪江町避難者たちにインタビュー収録を依頼した。

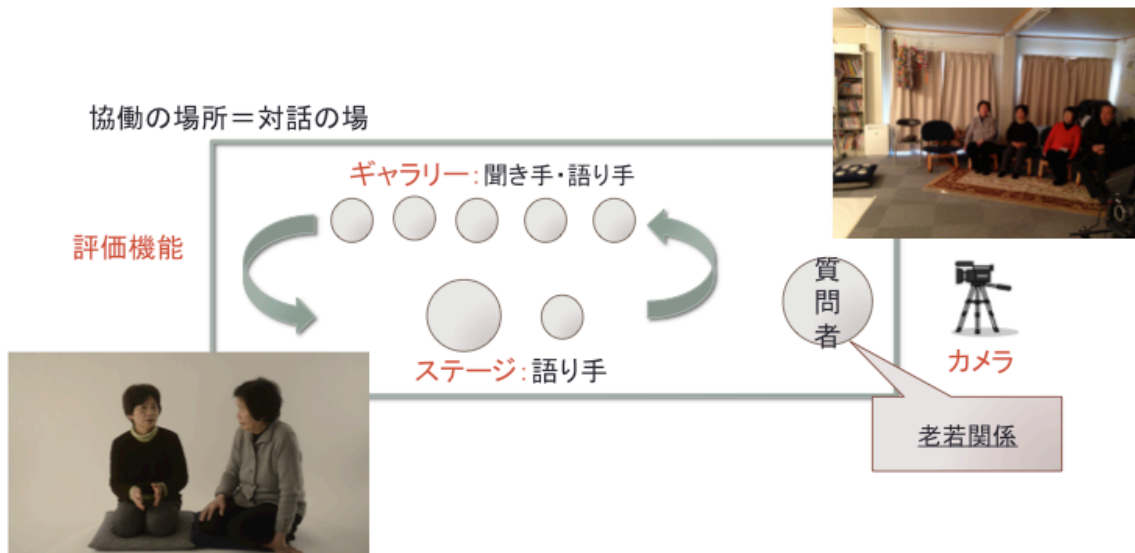


図2 協働の場の設計

福島市笹谷東部仮設住宅に張り紙を出し、2014年3月19日～21日の収録日程をポスターにし、参加者を募った。集会所を会場に、白の背景紙をたらし、2灯のライトとデフューザーを両脇にたて、簡易スタジオを設営し（ステージ）、ビデオカメラと音声の同時録音を行った。聞き手の干渉を最小限にとどめ語りやすい環境を考慮した。安心感、連帯感を生む場としてスタジオを囲むギャラリー席（オーディエンス）を設け、順番を待つ語り手者たちがそのままインタビュー収録を観覧できるオープンなスペースを確保した。

そして、「孫の代まで浪江の記憶を届けよう」（DVDにまとめ図書館に寄贈する）と事前に広報し、後世に伝えたい個人ライフストーリーを収録した。語り手は1人または2人、自由な形式でインタビューを受けた。時として、ギャラリーからうなずき、あいづち、拍手、ため息、笑いなどの非言語的反応が行き来した。1セッション約30～40分の収録を行った。

質問者である著者は、「浪江での忘れられない思い出」、「嫁入り、結婚などの人生の節目の話」そして「震災の話」といった質問を話の流れで投げかけ、震災前の浪江町の思い出と震災後について質問した。

中川（2009）は、ルバルスキー(Lubarsky,1997: 143)による老若の組み合わせの Intergenerational Interview（世代間インタビュー）がライフストーリーの生成性を効果的に促していることから、本収録では著者（30代）と語り手（65歳以上）の関係性で進行した。例えば、現在では稀だが、親に決められた結婚はどういうものだったのか？未婚である著者の好奇心や不安に対して人生の大先輩である語り手の人生観がどう反映されるのか？これらは質問者、語り手、聞き手（ギャラリー席）の多重な相互行為から見えてきたライフストーリーである。

語り手と聞き手の相互行為により語り形成されるため、質問者が何者であるかという点も少なからずこの相互行為に影響を及ぼす。質問者である著者の父親は浪江町出身であり、幼少時代から浪江の祖父母の家で夏休みを過ごし、著者にとっても浪江は思い出深い土地である。震災後から仮設住宅に通い、聞き取り調査を重ねてきており、仮設住宅の避難者たちにも「〇〇さんの姪っ子」としての関係性を築いている。本インタビューでは、事前に企画者（著者）が何者であるかについて触れた上でインタビューを実施している。

2-2. 協働の場の実践②：memorytalk アプリケーション開発

2つ目の協働の場として、シナリオを入力し、背景を設定するだけで動画が制作できる機能を備えた参加型・協働型のデジタルアーカイブ・アプリケーションmemorytalk³⁶を開発した（図3）。memorytalkは、地域の記憶を共同構築するコンセプトのもと開発された参加型・協働型のアーカイブアプリである。従来のデジタルアーカイブでは、作業員が保存するデータにメタデータ付与を行うことから、時間と資金がかかることが懸念されていた。しかし、この参加型であるmemorytalkでは参加者自らが物語を語り、保存し、さらに物語への評価（コメント挿入）によって物語が変化し、多元的な物語が連鎖的に創造される仕組みが組み込まれている。memorytalkアプリは全国に離散した避難者たちがアプリを通じて浪江と繋がり、後続世代に浪江の記憶が継承するというコンセプトのもと、継続的なアクセスを誘発するコンテンツデザインが反映されている。

³⁶ memorytalk アプリケーションは、<http://memorytalk.is.tohoku.ac.jp/> からアクセス可能である。



図3 memorytalk トップページ

このアプリ構築のために、東北大学大学院情報科学研究科コンテンツ学研究室・青木輝勝准教授によって開発されたソフト「Digital Movie Director (以下DMD)」と連携し、同大学院情報科学研究科システム情報科学専攻情報ソフトウェア構成論とコンテンツ学研究室の学生からなるプロジェクトチームをつくり、memorytalkの開発を始めた。開発作業の1つとして、DMDサーバーをmemorytalkのサーバーに接続するために、カスタマイズした³⁷。

memorytalk は、地域の記憶をアーカイブする目的で開発され、市町村名や年代別に検索し、投稿された内容を観覧する。アカウント保持者は、自由に写真や動画とそれに付随するテキストを添えて投稿し、さらに他者が投稿したデータに対してコメントすることができる。これらの機能以外に、memorytalk は、シナリオにした物語をアニメーション動画として制作できる。ここで制作された動画作品も memorytalk に投稿することができる。近年、歴史上の人物をキャラクター化し、動画にした教育教材は、エピソード記憶として記憶に留まりやすいという成果も発表されており（徳生ら, 2011）、地域の記憶継承法の新たな手法として memorytalk にも導入された。memorytalk は、ユーザー自身がアーカイブ構築に貢献することで、当事者、制作者、聞き手間の垣根を低くし、継続的な物語の語り継ぎができることを目的としている。

³⁷ なお、memorytalk サーバーは東北大学情報ソフトウェア構成論研究室で開発した C との直接連携を通じたネイティブスレッドやシームレスな SQL 統合を実現している関数言語 SML# によって、プログラミングを行った。本研究で使用した memorytalk (version 1) ではこれら 2 つサーバーは独立したままである。社会実装における一般ユーザーの利用を想定しているため、システムのセキュアな環境を考慮し、東北大学情報教育用電子計算システムで提供されているホスティングサービスを使用した。

ここで、簡単に memorytalk における物語の動画制作の手順を説明する。まず、背景となる写真又は背景シーンを選ぶ。次に、84 種類のキャラクターから物語の登場人物（語り手）を選ぶ。そして、選択したキャラクターのジェスチャー（106 種）を選び、セリフを記述する。この要領で、第 2、3 の登場人物を自由に増やし、セリフを付与することで簡単に物語を制作することができる。制作した動画には BGM リストから曲を選び音楽をつけることができる。最後に再生ボタンを押すことで、記述したセリフは機械読み音声ではあるが、映像作品として制作される。制作された作品は、登録したアカウントから memorytalk に投稿することができ、アカウント保持者は他の作品にコメントも挿入できる³⁸。

実践②において協働を形成するため memorytalk に着眼した理由として、参加者は匿名としてユーザー登録できるので自分の名前と memorytalk ID の 2 つの名前を持つことができる。さらに動画制作の際は、自らの分身となるアバターを配置しながら、物語を制作することができる。通常 CMC では、視覚的に匿名の状況が保証されていることから (Joinson, 2003)、memorytalk においても選んだ登場人物キャラクターがアバターとして機能することで、参加者自身の顔が公表されないことや疑似人物でいられるという気軽さと安心感を得ることができる。

聞き手の配置として、memorytalk ではアバターを通して登壇者を自由に増やせる。シナリオにそって複数の登場人物を聞き手として配置することができる。そのことから対話を自由に形成することができる。さらに memorytalk の聞き手は、memorytalk ユーザー全てであり、インターネットに投稿することで無限の聞き手がそこには待っている。

2-3. 協働の場の実践②：memorytalk を用いたワークショップ

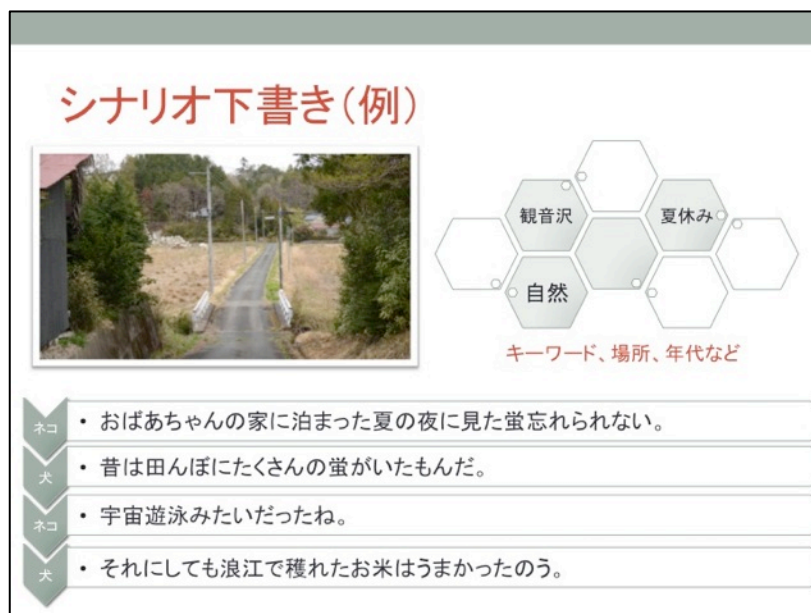
実践②ではこの memorytalk を用い、「私たちがつなげる浪江の記憶」と題し、福島県立浪江高校全生徒とその教員を対象にワークショップを開き、浪江時代の思い出を元に動画の制作を依頼した。

プレイベントとしてワークショップの 2 日前に高校を訪問し、ワークショップの趣旨と memorytalk の機能を紹介する機会を設けた。3 つのサンプル動画作品（震災時の体験談、嫁入りの話、浪江の自然に関連した思い出）を紹介し、memorytalk に投稿したい写真も同時に募った。そして、宿題としてワークショップ当日制作する動画作品の構成やセリフなどの考案をお願いした。配布資料には、シナリオ作成例として著者自らの体験

³⁸ memorytalk によるユーザー挙動の概要は、Appendix C を参照。

を元にしたシナリオを取り上げている（図4）³⁹。

シナリオ下書き(例)



観音沢 夏休み 自然

キーワード、場所、年代など

ネコ
犬
ネコ
犬

- おばあちゃんの家泊まった夏の夜に見た蛍忘れられない。
- 昔は田んぼにたくさんの蛍がいたもんだ。
- 宇宙遊泳みたいだったね。
- それにしても浪江で穫れたお米はうまかったの。

図4 サンプルシナリオ

2015年10月1日、福島県立浪江高校（福島県立本宮高校敷地内）プレハブ校舎にて、5・6時間目の授業時間のうち、2時間（休憩10分）を使い、ワークショップを実施した。全生徒27名と教師9名が参加した。パソコンは1人1台使用で、6名で構成されるブースを6つ設け、作業をおこなった。各ブースにつき最低1名の教員が加わり、生徒同様に制作を行った。なお、テクニカルスタッフとして、各ブース1名ずつ開発チームメンバーが常駐した。

この実践の目的は、各自アカウントを作成し、memorytalkを用いて浪江の思い出を動画にすることである。事前に、36台全てのパソコンに背景写真として、使用する浪江の風景30点をインストールした。そして、アーカイブとして検索・閲覧を可能にするために、浪江町に関する写真や映像（実践①におけるインタビュー動画）、サンプルのアニメーション動画作品を揃え、それぞれのメタデータを準備した。現時点で写真15点、動画4点、アニメ動画12点がサンプルとしてアーカイブされている（図5、6）。

³⁹ ワークショップ関連資料はAppendix Cを参照。



図5 動画作品サンプル（音声有り）

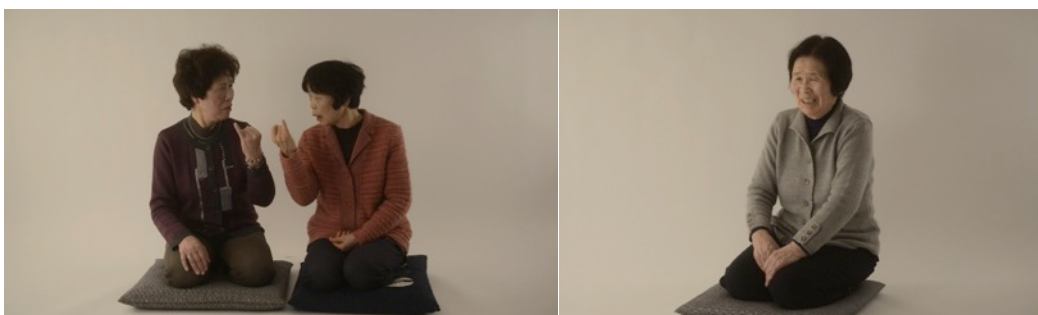


図6 動画サンプル（実践①インタビュー収録動画から）

これら2つの実践を比較すると以下のようなになる。

	実践①	実践②
分析媒体	ライフストーリー	動画作品
親密性（安心感）	ギャラリー席	メンバー制とアバター（匿名性）
主体性（相互行為増）	2人での登壇	匿名性による投稿・動画制作
聞き手（オーディエンス）	ギャラリー席	他のユーザー
語り手（パフォーマー）	語り手（ステージ）	ユーザーとアバター

次章では、これら2つの協働の場が、生成されるライフストーリーの多元性にどのように作用するのか分析・考察する。また、協働の場でくり広げられる語り手と聞き手やmemorytalkにおける制作者と鑑賞者の双方向性についても考察する。第4、5章では実践①の分析と理論的考察を、第6、7章では実践②における分析と理論的考察を行う。

第 4 章

ライフストーリーのテキスト分析：実践①から

第 1 節 ストーリー領域表出率からみる「語り直し」

第 2 節 「語り直し」のパターンとその分析

第 3 節 小結：「語り直し」の生成継承性

第1節 ストーリー領域表出率からみる「語り直し」

1-1. 分析方法：ストーリー領域における評価機能

実際に語られづらいままに放置されているライフストーリーを生成させるために、ギャラリー席を設け、他者のインタビューを観覧できるオープンな空間である協働の場を設定した。この協働の場の設定を用いて、福島県福島市で避難生活を送る浪江町避難者たちにライフストーリー・インタビューを行った。

ライフストーリーについては、桜井（2012）同様、語り手による心のうちの表出は聞き手との相互行為によって作り出されるものと捉え、語り手と聞き手の2つの意図を合わせた全体がライフストーリーである。さらに、ライフストーリーにおいては、語り手と聞き手の相互関係の中で、過去は現在と照合され、再編成され、変容するとし、いかに人生が構成され（語られ）、語り直されるのか、個々の出来事よりもそれらの解釈や意味づけが重要視される（やまだ, 2000a）。

したがって、本研究で注目するライフストーリーとは、質問者、語り手、聞き手（ギャラリー席）の相互行為による「語り直し」から自己についての新たなバージョンが作り出され、意味づけされたストーリーである。多様に意味付けされたライフストーリーは、負の感情を乗り越える語りとしてではなく、支配的な語りや表象に回収されない多元的に存在しうるオリジナルストーリーとして、本研究では生成継承性につながる語りとして重要である。本章では語り手が聞き手との相互行為によって自らの経験に意味づけすることを「語り直し」と定義し、協働の場で得られた語り直しのライフストーリーについて分析する。

<ストーリー領域分析（桜井モデル）>

語りの分析・解釈に標準的な方法があるわけではない。ナラティブ分析では、これまで主に、喜劇やロマンスといったように、プロットを読み解くことに関心が注がれてきた。これに対し、ラボフ(Labov,1972:366) は、評価を語りの分析対象とする論証をたて、語り手が過去の出来事や体験に意味づけや価値づけを与えることを評価の対象とした。この論証に着目した桜井（2012）は、インタビューを、挨拶などの<会話>から始まり、<ストーリー領域><物語世界>という異なる位相を渡りながら進行すると仮定している（図 7）。語られたストーリーの内容を<物語世界>とし、インタビューの語り手と聞き手との相互行為から構築される内容を<ストーリー領域>としライフストーリー・インタビューにおける構造モデルを確立した（桜井, 2012:70-74）。

これらの用語は、ヤング（Young, 1987）の Taleworlds<物語世界>と Storyrealms に

做ったもので、後者 Storyrealms<ストーリー領域>は「語り手と聞き手の相互行為と語りの社会的コンテクストなどのメタ・コミュニケーション次元」を表し、ストーリーが生成する領域とした。つまり、語り手の感情や態度が現れている文節であるストーリー領域は、聞き手にその体験がどのような意味を持っていたのかが表われる領域である。また、桜井（2012:70-74）は、ライフストーリーが生み出される相互行為の場で重要な機能のひとつとして、評価的機能をあげている。

したがって、本研究では、桜井モデルを用い、語りの評価機能について分析することで、実践①で得られたライフストーリーの語り直しの生成量について検証する。



図7 語りの基本的な構造過程（桜井, 2012）

まず、ストーリー領域を3つの<評価>類型である①<外的評価>、②<埋め込まれた評価>と③<評価的行為>別に抽出する。①<外部評価>は<ストーリー領域>の評価、<物語世界>の外からストーリー全体の意義を聞き手に語るものである。②<埋め込まれた評価>とは、<物語世界>内の登場人物である語り手が当時どのように感じたか示すものである。行為か評価か判断がわかるのは③<評価的行為>とし、<物語世界>内で感情をあらわにする行為のことである。図8のように抽出したストーリー領域の3つの類型は下線の違いによって以下のように区別する。

①<外的評価>太線

②<埋め込まれた評価>二重線

③<評価的行為>一重線

ギャ=ギャラリーの反応

* =質問者

E: 学校からの帰宅後仏壇に立派な化粧箱にはいった嫁支度の為の帯と履物、水引かかった封があげられてたので、母親に今日何かあったのかを聞くと、今日は E の返事があったんだというんで（結納）だったと言われた。②なんだか悔しくて涙がこぼれてきたよ。自分の結納にも立ち会えなくてね、なんと言っていいやら（笑：こみ上げる笑いをこらえる）。

E: ①一言でいいからね、こんなことあるんだとせめて知らせてもらいたかった。気持ちも整理つかないでしょ、一生のことだものね。そんなんで、両家の親同士で決めちゃって、本人ほったらかしにして、そういう時代だったの。その相手のことも、③顔なんて想像できなかったよ。一ヶ月後に、結婚式が決まったから何月何日に行くんだよと父親に言われた。

ギャ：えー

図 8 ストーリー領域下線部表記の例

1-2. 協働の場によるストーリー領域表出率

以下、21名の語りから上記3種類のストーリー領域を抽出し、各ストーリー領域のフレーズ合計とそれらストーリー領域の文字数をカウントし、合計を求めた。次に、対象となる全ライフストーリーの文字数からストーリー領域表出率（割合）を計算した。計算式は「 $\text{ストーリー領域文字数} \div \text{全文字数} = \text{ストーリー領域表出率}$ 」である。表1に語り手ごとにストーリー領域表出率を示す。

表 1：協働の場におけるストーリー領域表出率

開催	セッション	語り手	ギャラリー	外的評価	埋め込まれた評価	評価的行為	計(フレーズ)	計(文字数)	分析対象文字数	ストーリー領域表出率
1 日目	①	A		0	2	1	3	49	892	5.5%
	②	B		2	5	1	8	122	555	22.0%
	③	C	D,E,B	29	16	9	54	1829	6696	27.3%
	④	D	C,E,G,	15	13	2	30	757	1996	37.9%
	⑤	CxD	E, J,K,	20	8	0	28	565	1245	45.4%
	⑥	E	D,C,J,K,F	23	6	2	31	822	2829	29.1%
	⑦	FXD	E,G,	34	32	7	73	1268	3616	35.1%
	⑧	G	E,D,H	15	23	3	41	817	2500	32.7%
	⑨	HxE	D,J,K,I	35	7	4	46	1717	4459	38.5%
	⑩	I	H,D,E	26	14	0	40	1058	2375	44.5%
2 日目	⑪	J	K,E,D,	2	3	1	6	184	964	19.1%
	⑫	K	E,D,J,L	7	5	0	12	348	2240	15.5%
	⑬	JxK	L,E,D,	2	4	0	6	159	677	23.5%
	⑭	L	E,D,J,K,A	4	6	0	10	205	578	35.5%
	⑮	A(2)	E,D, J, K	12	8	2	22	633	2018	31.4%
	⑯	M	L,N, D, E	5	5	1	11	258	1017	25.4%
	⑰	N	M,O,PE,D	3	5	0	8	190	1586	12.0%
	⑱	P	O,Q,E,D	4	3	1	8	204	402	50.7%
	⑲	O	N,P,Q,R,D	4	8	2	14	370	1683	22.0%
3 日目	⑳	P(2)	E,D,Q,R	4	3	1	8	189	1295	14.6%
	㉑	Q	R,E D,T,P	8	3	0	11	230	1372	16.8%
	㉒	R	Q,E,D,S,T	5	4	0	9	330	1207	27.3%
	㉓	S	R,U,E,D,T	13	5	2	20	768	1830	42.0%
	㉔	T	S,R,E,D,U,	15	3	0	18	695	2987	23.3%
	㉕	U	T,E,D,S,P	13	5	0	18	427	2761	15.5%

ギャラリー有り平均 28.9%

協働の場の設定により、パターン 1：語り手と聞き手 1 対 1 の語り、パターン 2：語り手、聞き手に対し、ギャラリーを含む語り、パターン 3：語り手が兄弟、同級生など強い関係性を持ったもの同士（複数）の語りに対し、ギャラリーを含む 3 パターンの語りが確認できた。以下、3 パターンの事例とギャラリー席における特徴の概要である。

パターン1：語り手と聞き手が1対1。

○A x 聞き手：拍手や笑いほぼ無い。

パターン2：語り手と聞き手に対し、ギャラリー有り。

○D x ギャラリー(A, C, G) x 聞き手：拍手と笑い

○A x ギャラリー (C, B, D, E) x 聞き手：拍手や笑い有り

パターン3：兄弟、同級生など親密性を持った語り手同士に対し、ギャラリー有り。

○C/D (同級生) x ギャラリー(A, D, J, K) 拍手や笑い

○J/K(ご近所) x ギャラリー (A, D, C) 拍手や笑い

○E/H(友達) x ギャラリー (D, C, J, K) 拍手や涙

それぞれのストーリー領域表出率の平均値は、パターン1：13.3%、パターン2：32.2%、パターン3：35.9%であり、パターン3の語り手が最もストーリー領域が活発であることが確認できる。例えば、Aさんは第1日目の朝一番に会場入りし、インタビューを受けた。しかし、ギャラリーでのオーディエンス、及び、順番を待つ語り手は誰もいなかった。この場合、語り手と聞き手のパターン1の語りである。その翌日、再度会場を訪れたAさんはギャラリーに4名のオーディエンスを迎え、インタビューを遂行した（パターン2）結果、ストーリー領域表出率が上昇した。そして、語り手が2人以上であるパターン3の場合ではさらに表出率が高くなることがわかった。例えば、Cさんが1人で語ったときの表出率は27.3%、Dさんと2人で語ったときの表出率は45.4%であった。2人で語ったセッションがより高いストーリー領域表出率が得られた。ギャラリー有り（パターン2、3）の場合のストーリー領域表出率の平均値は28.9%である。

協働の場でのギャラリー席にオーディエンスがいた場合のストーリー領域表出率が高いことが以上の比較からも明らかになった。このことはギャラリーのオーディエンスによって、インタビューを観覧することで、インタビューがオープンになり、語り手とギャラリーの間での非言語的フォロー（うなずき、笑いや拍手）の相互行為が発生した。ギャラリーとの相互行為については、次章で詳しく考察する。そして、ギャラリー席で順番を待つ次の語り手が他の語り手のストーリーを聞くことで、情報が共有されることで「さっきもいったように・・・」「私の場合はそんなことなかったけど・・・」など、これまでの語りと関連づけた語りも発現した。他者のストーリーを聞くことで感化され、それに伴い自己のストーリーを語ることができた。

1-3. NHK 震災デジタルアーカイブストーリー領域表出率との比較

協働の場と比較し、既存の震災デジタルアーカイブに収められている証言録のストーリー領域の表出はどの程度なのか、同様の分析を行った。平成 25 年 3 月から国立国会図書館と総務省が公開している、東日本大震災に関するデジタルデータを一元的に検索・活用できるポータルサイト「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ」（愛称：ひなぎく）による「浪江町」のキーワード検索からヒットした 6 つの映像証言を比較分析対象とした（NHK 証言 Web ドキュメント東日本大震災アーカイブスより（図 9））。表 2 に各証言のストーリー領域表出率を示す⁴⁰。

表 2：NHK 東日本大震災アーカイブスにおけるストーリー領域表出率

ケース	語り手	外的評価	埋め込まれた評価	評価的行為	計（フレーズ）	計（文字数）	分析対象文字数	ストーリー領域表出率
①	金井	3	2	0	5	233	1426	16.3%
②	渡部	3	4	1	8	214	1291	16.6%
③	山崎・吉田	5	6	1	12	582	2715	21.4%
④	泉田	1	3	2	6	172	1272	13.5%
⑤	関根	4	6	1	11	449	3366	13.3%
⑥	今野	8	7	0	15	577	3897	14.4%
平均								15.9%



⁴⁰各ケースの逐語録とストーリー領域の抽出記述は Appendix B を参照。



図9 NHK 東日本大震災アーカイブスウェブページ

NHK による証言録は、インタビューを受ける語り手の動画映像と震災当時の経緯や詳細がナレーションや地図などのビジュアルエイドによって5分から最長15分に編集されている⁴¹。ストーリー領域表出率は、協働の場と比べると、13%から20%前後と低いことが確認できる。

例えば、ケース⑤関根は、淡々と震災当時の状況を語る、物語世界に特化した語りである。評価を示すストーリー領域は協働の場と比べると少なかった。

しかし、ケース③の2人による語りは、協働の場にも見られた2人による登壇の場合と同様にストーリー領域放出率は21.4%と他の語り手1人の場合に比べると高いことがわかる。このことから、協働の場同様に、複数による語り手同士の場合、語り直しが活発に行われることが明らかである。

第2節 「語り直し」のパターンとその分析

2-1. ライフストーリー分析概要

次に、実際どのような語り直しが行われたのかライフストーリー分析を行った。表3は、参加者21名の物語世界とストーリー領域を抽出した概要である。協働の場によって、どのような語り生成され、過去の体験をいかに意味づけし、それらをどうつなぎ生きる上での主体性を獲得してきたのか、について第1節で抽出した体験の意味付け機能である<ストーリー領域>に着目し、語り直されたライフストーリーの分析を行う。

⁴¹ 協働の場の語りとNHK証言録を比較するにあたり、NHKで提示されている証言録は編集済みの映像であり、あくまでも公開されている証言に対する比較である。本来の収録の全体像を把握することは難しいことから、ストーリー領域表出率は一概にいえないことが言える。しかし、語り手2人である場合を比べた場合は、語り手1人の場合に比べ、ストーリー表出率は高いことが言える。

本分析では、転機や回復などの転換のストーリーが生成継承性の現れであるとする。例えば、高い生成継承性を持つとされる人は、「救済シーケンス」と呼ばれる語り直しを行い、困難な状況でも一筋の光を見だし、前向きな姿勢が取ることができる (McAdams et al., 2001)。

このようなストーリーの転換が表出したストーリー領域から、3つのパターンが確認できた。表4は、ストーリー領域を3つのパターン (対比、ユーモア、カタルシス⁴²の語り) にまとめたものである。

転機や回復がみられた対比の語りとは、困難な状況ではあるが、子供の存在によって救われていることや、現在と過去を比べ、今は恵まれているなど、対比による物語の転換を試みる内容である。ユーモアの語りは、困難な出来事もユーモアを交えた語りによって、負をポジティブな経験として捉えるマクアダムスによる救済シーケンスの特徴に一致する。カタルシスの語りについては、ライフストーリー・インタビューの分析方法において、カタルシスの表出に着目する必要がある (圓田, 2001)。その理由として、カタルシスは、過去や現在の自己を回顧して、再編し、新しいパースペクティブや知を創出することができるからである。特に、スティグマを負っている人にとって、インタビュー調査などでは「情報の操作」を解除することであり、カタルシスの表出を通して、豊かな内容の語りが生産される⁴³。よって、カタルシスの表出も多元的な語りの現れとして、3つ目の観点に含める。以上から、これら3つのパターンを転換的語り直しととらえ、生成継承性の現れとする。

以上の分析枠組みから、福島市東部笹谷仮設にて避難生活を送っている浪江町民を対象に行った3日間のインタビューで得られたライフストーリーを3つの語り直しパターン、①対比の語り、②ユーモアの語り、③カタルシスの語りに分け、分析 (第4章) と考察 (第5章) を行った。

⁴²感情浄化、抑圧からの解放。

⁴³ 何らかのスティグマを負っているひとにおいて、日常経験では抑圧といった負の影響を帯びている。ゴフマンは秘密にしていることを「暴露されれば」信頼を失うことになる自己についての取り計らい「情報の操作」を常に行わなければならないとする (Goffman, 1963=1980:75)。

表3 物語世界概要

語り手	年齢	性別	地区	物語世界(浪江時代)概要	物語世界(震災当時)概要
A	83	男	立野	造園業を手伝っていた。俳句を読むのが趣味。初めての俳句が入選し、石碑になった。「満月会」俳句会を自宅で開催。間汁を行う。幼少の思い出、父は支那に派遣されたが、赤痢になり、帰国。	将棋中に被災。3日避難せず。情報がなかった。防具服を着た人とすれ違った。
B	81	男	請戸	安波祭。漁師としての辛さあったが、楽しいことしか覚えていない。歩いてお祭り行った。ガキ大将制で小さい子を見ていた。22歳お見合い結婚。映画デート(別々に帰る)ひとめぼれ。陸上の勤務をしたかった。水産高校。遠洋漁業の全盛期から自然の流れ。	この世の終わりと思う揺れ。黒い壁が迫った。山を登つ照る途中、奥さん共々流され自らは骨折。人間ももうやって死ぬんだと思った。奥さん亡くなる。爆発時、強制退院
C	77	女	請戸	終戦、母親早くに亡くす、祖父母と暮らす。海で泳ぐ、思い出の海。昔は危険を惜しんで遊んだ。捨てきれないふるさとへの思い、とても悲しい(涙)	お通夜に行く前の出来事、避難経緯、炊き出しに走り、その後名古屋へ避難。情報が入ってこなくて、NHKに問い合わせる。
D	77	女	狩野	田植え時、赤飯を配る。お駄賃稼ぎで。あの頃はよかったね。おとなしくてよい子だった。兄弟のお世話。見合い結婚。結納にも行かず、親に口説かれ、結婚。農家がいやでサラリーマンになりたかった。子供との時間すらなかった。姑が男勝りで苦勞した。	瓦が落ちて、怖かった。校庭も地割れ。
E	83	女	立野	大兄弟としてお手伝い。兄弟仲良し、親に決められた結婚に愕然。嫁入り、農家の苦勞。幼少期の富山の葉売り。ミンを買ってもらい服を作った。将来は夢は無かったけど、洋裁はやりたかった。	ふきのとう摘みをした矢先の出来事、家族とあえなかった
F	77	女	武田	修学旅行が楽しかった(関西方面)、新聞記者と文通していた。百姓だけにはなりたくなかった。サラリーマンに憧れた。借金を抱えたアル中の旦那の借金返済で、仕事に明け暮れた。料理師免許取得。多忙な余り風呂の中でパン食べて。生計を立てた。	7カ所避難した。原発の事など知らなかった。
G	83	男	津島	入植時の食糧難、終戦時の開拓団として山林を切り開く困難生活。奥さんは震災被災者、婿養子。食料確保で苦勞した。炭を焼く収入源、収穫の喜び。ロビンソンクルーソーのよう。試行錯誤しながら、色々やってきた。勉強は後から必要に応じて取り組んだ。	山で遭遇、恐怖だった、ダム。
H	69	女	室原	旦那との出会い。大工さんと結婚。牛のいる農家に嫁ぐ。子供、牛、農家の生活周りの手助け借りながら。度々具合が悪くなった。突然の旦那の死と孤独。	避難点々と、知らない人にお金を借りたり、感謝で一杯。山ばかりで寂しかった。仮設での友達が支え。
I	69	男	権現堂	田んぼの区画整理する前から覚えている。魚とり、雀捕り食べる。会社が倒産、その後居酒屋ラーメン屋開業。	2年足らずの新築の家に襲った震災。これからだというとき、奥さんが亡くなった。
J	68	女	請戸	お見合い。結婚式3日後に旦那は北洋漁業に出てしまった。いない間、ドカタや田んぼ色々仕事してきた。夏の大川で水泳ぎ。小さい頃は機械仕事好きだった。	全て流された。請戸に帰れず、避難から2ヶ月後に旦那さん亡くなった。

表3 物語世界概要（続き）

語り手	年齢	性別	地区	物語世界(浪江時代)概要	物語世界(震災当時)概要
O	81	女	大隈→浪江	末っ子。めいと同じ年に生まれての双子の様。戦時中のしろかき、農作業の手伝い、空襲がきて実家が燃やされた、怖かった。	仙台に一年以上いたけど、慣れなかった。浪江、福島と聞いただけで、ほっとする。仮設にきて安心
P	92	女	双葉→浪江	お見合い。印象は無い。健康であって、普通なら良い。乳牛、タバコも作ってた。出荷、繁殖牛も。戦時中。10人兄弟の5番目。戦争から帰ってきてから結婚。新婚旅行として、山に登る	
Q	79	女	室原	嫁入り(しゃがんやさんとの出会い)、映画デー、十日市(歩いて、寒い、こずかいがない)、せみしぐれ、(もう二度と聞けないだろうな)かえるもかかかとなっていた、散歩しながら、今頃の咲く花を思う。	寒かった。目の前で爆発した。どこに逃げてよいか分からない
R	50	女	北海道→浪江	とんでもない田舎に来たと思った。蚕が苦手だった。鮭の時期は沢山届く。ふるさと浪江です。隣近所の人が恋しいです。	スーパーで勤めていた。北海道の家族も心配していた。
S	65	女	小高→安田	浪江の印象はあまり良くない。夫と別れたかった。飲んべえの夫にうんざり。川の魚なんでも好き。もどれるものなら戻りたい。	飯館に避難。寂しくて涙が出る。浪江に帰りたい。人が居る所が良い
T	66	男	観音沢→仙台	9人兄弟の末っ子。釣り具での悪さ。蜘蛛の巣散らす様に逃げた。井戸の近くにグミの実を食べる。井戸に向けて捨てる。養子に連れて行かれると思って、隠れていた。寝たきり祖母のホルマリンの臭いが苦手。	
U	53	男	小高→上野原	美容師、東京の寿司屋で修行。アルバイト(原発5、6で)おふくろが高齢で戻ってきた。開業する。居酒屋も営業。川つり。かにの珍味。どじょうなど。食べ物何でも食べた。	立ってられない揺れ。今では家はすめる状態。

表4 3つの語り直しパターン

語り手	年齢	性別	地区	対比の語り(救済シーケンス)	ユーモアの語り(救済シーケンス)	カタルシスの語り
A	83	男	立野		私は震災時、世の中のことわからなかった(カーラジオの存在知らず)知らぬが仏。	何となく結婚した。
B	81	男	請戸	本当は陸上で勤務したかったけど、人生を振り返るとこれで良かったんだと思う。		半年くらいは、よくも人間ここまで涙が出るんだと思うくらい涙がぼろぼろでた。あの思いは当事者でなければ分からないだろうな。悲しいより、悔しい。
C	77	女	請戸		息子にもいわれるのだから、佐賀原発まで行ってどうしたって。まあこんなになるとは思いませんでした。	生き延びてすまない念が抜けない。
D	77	女	狩野	兄弟9人は恥ずかしかったが、今は自慢。…終戦を経験しているから、それに比べれば、物が豊富。小学校のときは貧しかった。今はなんとか普通に育っています(涙)	二度あることは3度なければいい。終わったことはしようがないと思って、前向いて行かないと。	旦那の第一印象は並だったけど、心躍る訳でもない。親に口説かれ、結婚。
E	83	女	立野		現在の世の中にしたら、ちょっとはずれてる。浪江時代の絶頂期があるから、こういう時もある。私もがっかりしたっていうか、おかしかったよ。(笑)	浪江に居る時は何でも自分達で作って、あの時が一番幸せで最高だったんあと思って避難生活において、励まし合いながら、毎日感謝の気持ちで生活する。
F	77	女	武田	最悪の旦那でも、仕事をしていると評価され前に進めた。子は宝	ちゃんとやっていると、いつか良い事があるはず。	いつもニコニコしてたから、苦労してないと思われる。そうしなきゃお客さんには悪いイメージを与えるから。
G	83	男	津島		人間としては、ちょっと下の方の生活だった。今考えるとぼさぼさして美味しくない米だったけど、美味しかったね。	試行錯誤しながら、生きるがために色々やってきた。若いとき鍛えすぎたからこうしていきでいられるのかなとおもって。ありがたく思っています。
H	69	女	室原		また孤独な思いをしなきゃ行けないと思うと残念に思うが、皆さんに支えられた頑張ってる行こうと思う。	若い人と一緒に住む家を見つけて、これからの人生を過ごして行きたいと思う。
I	69	男	権現堂		今から家を建てるのは無理だから成り行きまかせの人生になる。	80過ぎて元気だったら、人生のおまけ。おまけが何年つか。そう思っている。自分の人生はそうでありたいなと思っている。
J	68	女	請戸		この人と一緒にならないともういないなあと、結婚。	色々苦労した。
K	68	女	請戸		貯金は海に流され、竜宮城にいらしたのか。小さい頃？ガキ大将、男あねだったんだね。(笑い)	良い旦那だったし、結婚生活も良かった。
L	87	女	田尻			今は、周囲の人達に良くしてもらって、助かります。昔の話をすると、涙はこぼれるけど、そういう事して、今も独りでご飯食べています。
M	83	女	小野田	浪江の風景は、私の宝です。		無我夢中でしたからね。今考えますと、最高の主人でした。この年なので、若い人について行くか難しいですね
N	80	女	清橋	機械化にもなったし、そんなに大変だと主思わなかった		今とちがって昔はそんな嚴重にしていなかった
O	81	女	大隈→浪江	農家にとついても、なんでも楽にやっていました。		浪江ってきただけでも、うれしくて、みなさんとお友達になって、うれしかった
P	92	女	双葉→浪江		記憶喪失したんだか、昔は何も言いませんでした	とりとめのない話でもうしわけないです。
Q	79	女	室原	みんな苦労したのはおんなじだからな。		気をつかったよね。良い姑さんだったから、嫁いじりとかはなかった。
R	50	女	北海道→浪江		今でもたまされたって旦那さんいいうんですけど。	それなりに東京だったら、一生アパートかなとか。家もたてられたしね。なんでもおどろきがたくさんありました
S	65	女	小高→安田	震災になったとき、人がきらいだとおもっていたけど、ひと好きなんだとおもって。浪江の印象は最初きらいでしたけど、変わりました。		私は好きなことしなきゃってことで、それから好きなことしかしていません。今自分は何をしようとしている
T	66	男	観音沢→仙台		なんていうのかな、映画で言えば、三丁目の夕日、あの時代のなんというかね、貧しい時代だけど、のびのびできた。ある意味で恵まれてたと思うんだね	今思うともっと優しくすれば良かったと思うんですけど
U	53	男	小高→上野原	今は、ころしてどうのこうのとかっていわれるけど、あの頃は普通に色々穫って食べてましたね	ないかって、ちょっとスケベ根性がでて、(笑い)昔はずつぽんぽんで、泳いでた。普通に泳いでた。それこそあまちゃんスタイルで	

2-2. 対比の語り

協働の場による語りの特徴として、著しく多く語られた内容の一つとして、農家の嫁として虐げられてきた生活の様子が確認できた。ベールに包まれていた農家への嫁入りの裏舞台や、結婚生活といったライフストーリーの詳細が明らかになった。なぜ女性たちは語りづらい胸の内を協働の場で語ることができたのか。以下の事例から、語り手たちは、質問者である著者に対し、同じ女性として、人生の先輩として、そして、次世代の代表として、助言する姿勢がみられた。女性たちはギャラリー席であいづちを打ち、「苦勞したのだ」と共感することで、共に歩んだ困難な経験をサポートした。

Dさんの語り（ギャラリー：C, E（姉）, G）

浪江町で生まれ育ち、双葉町の農家に嫁いだ D さん。3人の息子に恵まれ、辛い農作業も乗り越えられたという。

*：結婚はおいくつでしたか？

D: 22歳。2月に結納、4月に結婚。じいちゃんに毎晩口説かれていたけど、百姓はいやだつて言ってたから、結納にも行ってないから。姉は帯って言っていたけど、私の時の結納返しているのは、ぴらぴらっていう着物3枚でした。それ私1回も着ませんでした。がらが気に食わなかったから。

*：それで結婚式の日にあったんですか？

D: そう、その時は、デートも何も無かったからね。それでも結婚式当日は角隠しして、黒塗りの乗用車3台出してもらったの。今みたいに、結婚式場なんてないからね。敷居をはじめて跨いで前を見たら、傾いた家で、あやーって思った（笑） 三三九度の杯も家でやったの。

*：はじめてお相手にあった時の感想は？

D: まあ並だったから、けど心躍る訳じゃないよ。まあ、しょうがないかという感じ。とにかく親が百姓はいいよって攻めたから。うちの母親も嫁ぎ先の母を知っていたから。水回りがよかったからね。そういうことで、決まっちゃったんだね。昔は仲人っていう専門の人がいたの。私も高校終わったら花嫁修業。村にお世話する専門の人がいて、親と話に来たりしていたの。姑は戦争未亡人なの。息子3人大学にいられたから、まあ結婚したら、仕事仕事。百姓で大学は相当大変だったから。姑さんの口は八丁、私みたいなそのそとした人にとっては、大変でした。

*：実家に帰りたかったですか？

D: いや、帰りたかったわよ。こころに色々不満あるからね。だけど、そう頻繁に帰れなかったね。帰って母親に、色々口言っすっきりして帰ってきていた。1年に1回お祭りがあって、今日はうちに帰れて言われるのまっていたけど、盆と正月にしか帰れなかった。それで、行

ってこんなにいわれたら、朝ご飯も食べずにいっていた。

(省略)

* : やっぱり、嫁姑の関係は難しかったですか？

D: その姑さんが息子出稼ぎでいないし、戦争の未亡人だったから。色々きつい言葉かけられたね。言葉の暴力だね。いまだから言えるけど、仕事も辛かった。仕事もなれないのに、ついていくのに大変だった。稲刈りも5時起きしてやった。牛も、豚もいたからね、世話も大変だった。だから一度でいいから、朝仕事しないで、ご飯食べたなあって思っていた。その頃はご飯の火をつけて、草刈りにいっていたの。仕事仕事ばかりで、子供にも接する機会もなかった。もんぺだったんだけど、仕事終わって、お昼におっぱいやりながら寝ていたこともある。そして、そのばあちゃんは、私に仕事してもらいたいから、面倒みてもらったのはいいのだけど、ひもとって(赤ちゃんと)。私とすれば、子供という時間がほしかった訳。けど、今はなんとか素直に育ってます(涙)。まあばあちゃんがいたからだとおもうけど。

ギャ: ((拍手))

Lさんの語り (ギャラリー: E, D, J, K, A)

涙ながらに人生を振り返るLさんは、漁師の家に嫁いだ。対照的に父親との良い思い出が語られた。

L: 不漁だと灰皿をぶっつけられていたり嫁に当たり散らしていた。姑との仲も絶えられなくなり、自殺を考えたことが3度あった。請戸の岸壁に立ちつくしたこと2回。線路の横に立ち尽くしたこと1回。けど、電車にひかれた姿も世間には見られたくないし、岸壁なら死体も上がらないしと思ったりもしたことがあります。毎回、背中におぶっている娘が泣くので自殺をやめ、泣く泣く家に戻って、死ぬの嫌で泣いているのかなって思って。隣の人も、泣いているとうるさいから、泣き止ませて。おぶっている娘に冷たいみそ汁を飲ませ、寝静めたという。その娘も、30代半ば、卵巣がんが見つかり、摘出した卵巣も見させてもらって。若くして先立たれた。

昔の話をすると、涙はこぼれるけど、そういうことすごして、今も独りでご飯食べています。

Lさんの涙ながらに人生を振り返る文子さんの人生はなぜこんなにも辛くて、不平等なものなのか。

* : 田尻ではどうでしたか？

L: 楽しかった。桑積みをしていた。父親は優しく、請戸の海にもつれてもらった。父親にはかわいがられていた。

* : お見合い結婚でしたか？

L: そう、旦那の家も分からなかった。しゃべったことなかった。印象もなかった。あんまり優

しい人でもなくってね。アコーディオンを弾いていました。あの頃は、何でも嫁の仕事、夜は2、3時、朝ははやい。あの頃は、洗濯機もなかったから、手洗いでね。大変でした。(・・・)

F×D さんの語り (同級生同士) (ギャラリー : E, G, H)

耳が少し遠い F さんは、同級生 D さんと一緒に登壇したい、ということで緊張気味に始まった。浪江での思い出として、女学生時代の修学旅行をあげた F さんは、待ち望んでいた関西への旅行話を軽快に語った。

その後 D さんは、F さんの旦那さんとのなれそめを聞いた。親の決めた結婚で、D さん同様、農家に育ち重労働ばかりの百姓にだけは将来なりたくない、とサラリーマンになることを夢見ていた。しかし、両親が決めた結婚のもと、F さんが一緒になった夫は、一度も家に給料を入れたこともなく、毎晩飲み歩いていたという。授かった 2 人の息子を育てるために、夫の借金を抱え、必死に働いた。アル中であつた夫の最後は、凍える朝、野ざらしになって (雨風にさらされ) 墓地で倒れている所を発見された。「これホントの話、こういう男の人もいるのだよ」と会場に投げかけた。

* : 旦那さんとのなれそめを教えてください。

D: 馴れ初め教えてだつて。

F : うちの旦那は (嫌そうな顔) こんなこと言うと皆にあれだけ。私程旦那で苦労した人ない。役場に勤めていたんだけど。そのとき、婚約者がいたの。日本大学卒業した、東京の人と決まっていたの。文通もして、どこに新婚旅行いこうだの。お見合いもして。その返事の日、その彼のおじさんが、〇〇金貸しの 1 つ学年上の娘と結婚したら、家を建ててやるっていわれたから、もうその人と一緒になることになっちゃって。結婚破棄になったの。

D: え ?

F : で、その後、役場に勤めていた人との結婚を決められちゃつたの。両親が決めちゃつて。

D: 私も同じだつたけど。私たちに関係なくね。

F : そう関係なく。それで、一緒になったら、お酒が好きで、アル中みたいに、言って悪いけど、旦那の悪口言う訳じゃないけど、ホントの話。月給一回ももらったこと無い。毎日呑んで帰つてきて。子供は 2 人出来たけど。できるたんび、役場を博団で休んで、無断に休んで 18 日目だ。その時期、丁度目がぼやつてして。これ近眼になって。

D: お産のあたりだね。

F : そう、今度 2 番目できたの。その時は、1 年いないの。役場やめて。

D: 旦那が ?

F : そう、役場逃げて行って。私は毎晩赤ちゃん抱えて、いつ帰ってくるのか、廊下を行ったり来たりして毎晩待っていた。ホント良い思いしなかつたな、あの旦那と一緒に (涙) そ

れで、借金ばかりしてね。2,600万円の借金私払ってきたの。これホントのはなし。

D: ((ため息))

F: けど、勤め先の農協にいくと、仕事だけは負けないから。一生懸命やれよって、励まされていた。3ヶ月で本採用にしてもらって。東電ができて、お弁当も発注が増えて。残業も増えて。あの頃、女の人も取ってなかった、調理師免許も取ったの。弁当の献立たててね。だから、Eさんはよく利用してくれたの。お世話になりました。

E:こちらこそ。

F: うちでは、旦那には苦勞してたけど、仕事をやれば、皆認めてくれたから。よかった。

D: そうだね。

F: それだけ、仕事は負けなくて、マグロもさばいたり、男やる様なことやっていた。お惣菜造とか。寒かったからね、耳悪くしちゃって。今難儀している。

D: 頑張った人なんだ、結婚してからはね。

F: ((・・・)) 全くね、馬鹿だから。 ((うなづく))

D: いや、人それぞれあるんだ、ここまでくるには。

F: あの頃、新年の顔合わせあったでしょ、オードブルとか。50人前の注文があつてね。朝2時にいって。夜は9時、10時まで、残業して。私が作って、別の人が盛りつけ。普通なら、間に合わない。時間だから。電話なると、心臓がドキドキしていた。 気もむわよ。

D: ご苦勞様だったね。

F: ね。

E: あの時代思い出すとね、ホント苦勞したね。

* : 心の支えは?

D: 心の支えになったのは何? 職業?

F: そうだね。働くって言うのが、心の支え。姑もいたけど、その人たちをみなきやいけないから。普通の人なら、もうとっくに居ない。

D: 居ない居ない。

F: 言って悪いけど、私は大きな百姓の娘で、浪江町でも2番目に財産があると家で。だから、くよくよしないの。そして、親もみなきやいけないってことで、やったの。2人看取って。自分の家を建てて、移ったの。苦勞しか無い。けど、仕事をやっているとね、楽しいのね。それが支え。うちの旦那がそんなでも、仕事に行くと皆よくしてくれて。お客さんたちもいい人だし。これまで、やってきたの。くよくよしない。借金借金でも。毎回細則ばかり。何百万、何千だから。最後は、農協やめてから、パートになって、友達がモーテルやっているから、そこ手伝ってくれていうから、掛け持ち。6時に終って、そこに直送だ。6時半から、6個の部屋を全部掃除して、11時頃帰ってきて。それで、お風呂の中でパン食べて。

D:あら。

F:そうしていたの。

D:借金を返済して。

F:そう、自分でも家建てて。

D:体を粉にして、働いていたんだね。

F:ホント苦勞したんだ。それでも、こうやって、ニコニコしてるから、苦勞してると思えないって皆に言われるんだけど。

D:そこまでは私はFちゃんのこと知らなかった。

F:皆にニコニコしていたから、そう思ったでしょ？

D:うん。苦勞してるとは分からないね。

F:まさかお店ではぶすつとする訳に行かないでしょ。はい、いらっしゃいって、ニコニコしな
きゃ。お客さんはこないでしょ。暗い影出さないで。けど、お客さんにもしかられたことあつて、

トイレで泣いたりしていたな。

D: ということあるわな。

F:私が悪かった訳じゃないけど。高いとか安いとか注文して。こんな話でごめんね。

* :いやとんでもないです。大きな農家に生まれて、将来の夢はありましたか？

F:ないね。その頃は。百姓だけにはなりたくなかったけど、サラリーマンには憧れたね。

D:だよね！同じ気持ち。

F:でしょ。その旦那は税務課に 10 年勤めていたから、頭は良かった。けどアルコールでダメにした。

D:けどこれ（女）もった訳じゃなかったの？

F:いや、お酒が女。酒が彼女で、奥さんいらぬの。そういう人も居るの、世の中。もう最低の人。お金を一円も返すことできないの。一度、役場にお弁当とどけた時、その旦那が、部下にお酒のませている、ホントはダメなんだけど。それで、部下にどなって、命令したりして。そういうことの繰り返し。最後は、野ざらし。お墓後核の田んぼ。お酒呑んだんじゃないの？
焼酎でも。寒いとき、焼酎飲んで、それでなくなったの。

(・・・)

* :今だと別れるとかあるんですけど、当時はそういうこと無かったんですか？

D:昔は別れる解かなかったんだよね？

F:子供も居たしね。親たちも居たからね、そういう固い気持ちがあったんだね。

D:昔そういうの無かったんだよね、根性が強かったんだ、皆。責任感とか。

F:旦那なくなっても、葬儀は私が払った。

D:離婚してなかったからね。

F: 私は、離婚はしなかったのだけど、息子たちが協議離婚してくれて。息子らは見ているから。こう、高台や、岸壁にいて、殺したいって2人とも行ってくれた。母ちゃんのこと困らせているから。だけど、殺人にはなりたくないって、言っていた。それで、息子たちが離婚してくれたの。私じゃなくてね。まあ、ホントにこんな人居るのかって思う程。

D:人生色々だな。

F: そう、人生色々。

* : 女性は強いですね。

D:強いね。

F: ((うなづき))

D:そして、2人の見方いたんだもんね。子供ね。

F: そんな父親でも、子供は宝。やっぱり宝だね。私も我慢していたからね。東電の爆発も離れたところにあったから、まあ大丈夫だったけどね。いや、あの爆発したの分かった？

D:解らないわよ。ただ逃げろっていわれたから。

F: 犬散歩していたよ。4日で2キロやせた。

D:私たちの世代は苦勞しているんだな。(・・・)

<対比の語りについてのまとめ>

浪江町が位置する福島県浜通り地方の土地柄として、戦前まで日本の村社会の土台を形成してきた封建的な家父長制⁴⁴や、「村」という閉鎖的コミュニティの中での恥や村八分の文化、嫁の姑に対する絶対的忍従性の風習が存在していた。一見すると確実に一掃されてしまったかに見えるが、戦後以来、その名残としてその家の嫁に入ることは、「戸主に従い、姑に従う」という文化が続いてきた。農家に嫁に行くということは、全てのお世話、農作業をこなし、最後は旦那の両親の介護もするという習わしである。

しかし、その流れもつかぬ間、国の減反政策などによって、農家の作付け面積は削減され、農家は兼業農業へと転換した。安定した収入が無い農家では、次第に嫁も仕事に出るようになった。こうした過程から、女性の社会進出が活発になってきた背景がある。そうした中、以前まで姑が嫁を使用する立場であったが、嫁が外に出て収入を得ることにより発言力も強くなってきた。

そこに東日本大震災(2011)が起こり、家もろとも流され、それまで同居していた大家

⁴⁴ 1898年(明治31年)に制定された民法において規定された日本の家族制度で、親族関係を有する者のうち更に狭い範囲の者を、戸主(こしゅ)と家族として一つの家に属させ、戸主(長男)に家の統率権限を与えていた制度。1947年に廃止。

族体制も、散り散りになり、別居という新たな生活が仮設住宅で始まった。息子夫婦はやがて家を建て、嫁はこれを期に、さらに自由になった。その反面、姑は、権力も失い、負い目を感じ仮設住宅での一人暮らしを選んだ (Sasaki and Sakurai, 2015)。この度参加した語り手たちの多くは、このような背景をもっている。

農家に生まれ育ち農家に嫁いだ D、L、F さんたちは、暗黙の了解で、親に決められた結婚にしたがった。そして、姑との関係や暴力的な夫に苦悩した。これらの語りは、単なる夫の愚痴を並べているとは考えづらい。夫は幾重にも重なったストレスから、その矛先を妻へ向けた。これら女性たちの語りは、その最末端で起こったライフストーリーであり、そこには夫をアル中にさせた社会構造が眠っている。プライベートな問題でもなく、社会全体の問題として、これまで彼女たちが置かれた状況については、語るにも語れない構造や文化があった。ましてや身内を悪く言うことは近所付き合い、村文化で生きて行くためには、タブーとされる。

このような暴力的な生活の中で D さんと F さんが語ったのは、子供の成長を喜ぶ母親としての喜びであり、苦悩のストーリーとは対比的に語られた。「子は宝」とかけがえのない我が子を心の支えに、様々な困難を乗り越えてきた女性たちの姿があった。L さんは辛い経験とは対照的に父親との楽しい思い出を語ることで、前向きな転換のストーリーを語った。これらは負の経験を正の経験として語るができる、救済シーケンスの現れである。

このように、原発事故の避難者となり、さらなる苦難に直面した女性たちは、質問者と聞き手（ギャラリー席）が存在する公の場で、過去の困難な経験に一筋の光を見いだすことができた。同じ経験を重ねた者同士が、再び集い、共有する場として協働の場は、避難者たちにとって、人生を見つめ直し、新たに歩んで行くきっかけとなった。今後語り継がれる次世代は、これらの語りの背後に眠る権力構造を見過ごしてはならない。困難な中に見出したポジティブな側面を、対比的に語ることで、生成継承性の現れとして、ライフストーリーの転換が行われた。

2-3. ユーモアの語り

開拓時代、戦後、倒産、震災の語りにもかかわらず、語り手たちには、終止笑いや笑顔が見られた。G さんが乗り越えてきた終戦、開拓、食糧難の語りには、自信と誇りが感じられる。後世に一番伝えたかったライフストーリーとして、真っ先に津島地区が開拓地であり、人が住み着き、生活や歴史を形成した場所であることを、ユーモアを交え語り始めた。当時は、親が決めた不条理な結婚であったが、そのことも笑い飛ばす E さんの軽快な語りからも、夫婦円満で歩んできた人生がにじみでる。そして、原発事故

を受け、原発誘致当時の様子を振り返るも、だまされたのだと冗談をまじえながら回想する C と D さんの対話から、現在の避難生活をも乗り越えようとする強い心と柔軟性が確認できた。

G さん (ギャラリー：E, F, D)

現在、津島地区は高い放射線汚染により立ち入りすら禁じられている。静かに語られた第一声は、浪江町津島地区が戦後の緊急開拓事業の一環で食料確保のために何も無い険しい山を素手で開墾した生活の様子であった。次世代の聞き手たちは、その土地の歴史を知ること、失った土地の意味を確認することになる。開墾当時の入植者は約 4,000 人。ひもじい思いをしながらも、収穫可能な土壌に育て上げた過程が語られた。

*：開墾地だったことは知らなかったです。何が育つんですか？

G：高冷地の土壌を切り開くということは、まあ畑にしたことの無い、山の土だから、リン酸欠乏な土壌で、畑には相当な資材を入れないとちゃんとした土壌にはならないから、タンカルとか石灰とか色々資材をいれた。色々普通に収穫出来るまで 5、6 年はかかったね。田んぼもブルってのができてからは、簡単になったけど、それまでの水田も手作業で大変だった。

*：馬とか使っていたのですか？

G：そういう、馬とかも無かったのだ。全部手作業。苦労したんだ。

ギャ：手でやってたのだよ。

G：まあ、人間としてちょっと下の方の生活だったね。(笑)。

ギャ：(笑)

G：食料が足りなかったからね。

*：ご結婚はいつころでしたか？

G：結婚は 20 歳くらいだね。山の中だから、将来相手がいないのではと心配した。丁度、近くに居たもんだから。(笑)

ギャ：(笑)

G：もともとうちの家内も東京で震災になっているからね、そして入植したんですよ。実家は今の田沼ってところで、疎開して、津島に来た。うちの近くにならね。私は次男だったからね、もう私はそこの婿養子になったんだ (笑)

ギャ：(笑)

G：そして現在に至っているのですけど。

*：お知り合いだったのですね。

G：うん、そう。ずっと山に入ったときから見ていたから ((微笑みながら遠くを見る))

(.....)

*：二人の思い出は何でしょうか？

やっぱり食べ物がなくて、食べ物を確保するために、相当四方八方苦労したね、最初は。食料事情が悪かったから。炭窯をつくって、すみを焼いて、それが生活の資金になって、そういうことしながら、できやすい作物をつくって、やってきたんだね。一番始めは、自分で、水田でできやすいところに手作業で田んぼをつくって、下の旧農家に田植えしに行行って苗もらってきて、自分の田んぼに植えた時は非常に嬉しかったし、やっぱり秋口に米できて、それを食べた時にはまあほんといまならぼさぼさって美味しくない米だと思うんだけど、非常に美味しくてね、
凄く。ありがたいと思ったね。（・・・）

それまで色々編成があつてね。開拓だけでは生きて行けなかったから、子供も3人できたりしてね。出稼ぎにいたりして。私は自動車関係の仕事にいて、収入を得なきゃ生きていけないから。息子たちは結構年になって、孫も出来ているし。こうして、私が80までふうふうしていきでられるのは、不思議なんだね。若いとき鍛えすぎたからこうしていきでられるのかなとおもって。ありがたく思っています。

*：地震があつたときはどちらに居ました？

G：弟が入院していたので、原町からその帰りにダムの方でした。その時は、目の前に、大きな石が転んできて、つぶされるかと思ったけど、丁度目の前で止まって。電線も子供の縄跳びくらい、揺れていて。これは怖いと思って。惨憺たる状態だね。ダムのドハもずり落ちてくるのもわかつたし、いやこれダムの水落ちてくるんじゃないかとおもいましたね。家の中も、もうガラガラで、大変でした。外観は以外とそうでもなかつたけど、中は凄惨な状態でした。（・・・）

*：いまでもお家に戻りますか？

G：月に一回程、雪降る前はお墓参りで戻っていました。雪降ってからは、車では行けないから。

*：津島は雪つもるのですか？

G：昔は1メートルくらい降っていたの。浪江では全然。高冷地だから、600メートルくらい。そういう面では、寒さでは一番苦労しましたね。一番最初に入植した時は、ロビンソンクルーソーみたいなね。木を切って、親父は大工していたから。筵（ねどこ）をつくって。上にしく物は（屋根）、その辺で拾ってきたサクラの皮をしいて、兄貴と一緒にそこに住んで、乾燥しちゃつてね、さくらの皮が乾燥して、くりっくりっとなつて、星空が見えてくるんですよ。いよいよダメか何と思つて、また空いている隙間に、木の皮をうめて。

色々な試行錯誤しながら、炭焼きしながらきた訳です。生きるがために。

学校も何も行けなかつたから、終戦後だから。みんな散り散りばらばらで。あの頃は学校に何で来ないのだからなんて言う人もいなく、普通だったら、この子供はどこにいったなど大した騒ぎになるんだろうけど、私は最初、行方不明になっていたの。俺たちの時代では探もしなかつた。時代というものはそういうものなんだね。然程気にしなかつたんですかね。

私たちの生涯においては色々な編成がありました。牛も飼いましたし、乳も搾りましたし。山にいて、色々と学問が無くて、よそに就職するにしても、無学ではないと思って、私も通信教育とかとって、それなりに勉強をした。でなきゃ、日産自動車とかでは働けないからね。なので、冬期間だけ応募があったものだから、日産自動車ではたらいて、夏は山に戻って働く仕組みをしていました。

* : 一番好きな季節は？

G: やっぱり、山は冬が一番厳しいけど、農作業に従事している季節がいいですね、とくに春とか秋とか。いい季節がそれぞれありますから。

ギャ: ((同意のうなずき))。

G: 私の人生をさらけ出すようで私もはずかしいかぎりですけど、ちょっとお巡りさんについてやられる感じでしたけど。

* : 知らなかったです、津島が開拓地だったこと。

G: 津島は国有地で、五カ年計画で、緊急開拓事業でやったのですよ。満州引き上げや開拓団として、皆集まって、入植した。結局、警察官や、いろんなことしてた人が集まってきたから、盛況が凄かったね。集まると総会並みの。生きるがためにみんななんでもやったね。どんどんはいつてきたそういう土地なのだ。

(・・・)

E さんの語り (ギャラリー: D, C, J, K, F)

E さんは、親に決められた結婚についての詳細を語り出した。洋裁学校から帰ってきた、ある日のことだった。当時ショックを受けたが、時代が時代で、仕方がなかったと振り返る E さんの結婚は、結果的によかったことが伺える。現在、支えてくれる仮設のコミュニティーや支援に、日々感謝の気持ちを忘れずに生活する。

E: 学校からの帰宅後仏壇に立派な化粧箱にはいった嫁支度のための帯と履物、水引かっか封があげられていたので、母親に今日何かあったのかを聞くと、今日は E の返事があったんだというんで (結納) だったと言われた。なんだか悔しくて涙がこぼれてきたよ。自分の結納にも立ち会えなくてね、なんと言っていいやら (笑)。

E: 一言でいいからね、こんなことあるんだとせめて知らせてもらいたかった。気持ちも整理つかないでしょ、一生のことだものね。そんなんで、両家の親同士で決めちゃって、本人ほったらかしにして、そういう時代だったの。その相手のことも、顔なんて想像できなかったよ。一ヶ月後に、結婚式が決まったから何月何日に行くんだよと父親に言われた。隠居の祖父母もいうんだよな、昔からこの A 家のじいさんっていうのは、俺の友達だから、みることも、聞くことも、試すこともないんだからおまえ、今後何月何日に行くんだよって、じいちゃんにもいわ

れたの。

いや、私もがっかりしたっていうか、おかしかったよ。(笑) はっきり顔もわからないでね。

その一ヶ月の間も、今のとうちゃん(旦那)、映画見に行こうだの、何の誘いも無いんだよ。ま

あ、現在の世の中にしては、ちょっと外れてるよね(笑)

だから現在、私は時々話すの、「あの時どうして、ちょっと映画観にいこうだの、1回くらい誘っても良かったんじゃないの」っていうと、照れくさそうに、「こんな良い父ちゃんだものよ良かったべ」っていうんですよ。(笑い)

*：実際初めて会ったのはいつでしたか？

E：結婚式の日ですよ。(微笑み)

ギャ： えー((驚き))

*：第一印象は？

E：同級生だったからね、うすら覚えには想像できたけど、一度もお話もしたこと無かったからね、だから不安から色々ありました。おとなしそうな人だなあって思った。祖父には帰りたい時はいつでも帰ってきなさいといわれたけど、帰ったら帰ったで、心配するのね、だからあまり帰りませんでした。そして60年、色々ありました。

*：お嫁にいったの生活はどうでしたか？

E：やっぱり農家にはなれなくて、旦那に色々聞いてやってきました。

(省略)

*：季節ごとに野菜の収穫などあったんですか？浪江の想いでなど。

E：米作りから、今の季節だと、ジャガイモ植えてね、ごぼうだとかも。農家はやがて、機械化してきて、手があいてきたから、カラオケが始まったんです。毎日、友達が来てくれたんです。うちの屋敷は広いもんで、色々育ってました。栗から、ゆずから。

*：栗はどうするんですか？

E：栗は、むいてゆでて、冷凍しておくんです。おこわにしたり。ふき、タケノコ、なんでも作ってました。だから買うのは、魚、肉、こんにやくとかね。こんにやくでも昔は作ってたんだから。お茶も育ててたんだ。お茶っ葉の木が。1年分つくれるの。だから自給自足が出来たの。

*：小さい時は何になりたかったんですか？

E：いや、何になりたいて。洋裁学校終わったら、やっぱり、洋裁やってみたいって思っていました。小さい頃は、兄弟に色々作ったりした覚えがあります。父親は、終戦後、東京にミシンを買いにいったんですよ。娘もいるから。それで、姉と繕った覚えがあります。

*：どういってお父様でしたか？

E：いやどういってお父さんって、何かやりたいって言うと、じゃ、洋裁学校いきなさいって。ちゃんと理解がありました。うちで養蚕もしていたので、親マユをつかって、小高に機織りして

いるところがあって、そのマユを持って行って、絹の反物にしてもらって、それをリュックに
してもらったこともあるんです。10反くらい。それを姉とパンツ、下着の果てから、絹で
着せた覚えがあります。水色とか、黄色とか、一色だけど、ただ首をくりぬいた、ワンピース
とかだけど。

ギャ：すごいね。

E：だから、私も友達の家にいったりしたことはあまり覚えは無かったね。兄弟と過ごしたね。
大東亜戦争中は、学校にいても、近所の田んぼの除草の手伝いでした。男の人たちはみんな
戦争に行っていたから。

* 震災の時はどうしていましたか？

E：うちに居まして、実家の兄も来ていて、将棋をさしてました。私はふきのとうをとっていて、
ざる一杯にとってきたばかりで、今日はこれをどうしようと考えている所で、炊事場にもって
きたとたん、ガラガラガラって地震がきたの。だから、そのふきのとうが全部散らばって、茶
箆箆は走る、テレビはズレる。母屋の具志瓦も落ちてきて、それが凄い音なんだよ。兄たちも
驚いて、これは帰らなきゃとなったけど、少し居てもらって。いや、あの一瞬は何とも言えな
いね。そして、こんな津波とかね、全然知らないでね。避難する時も、予想できないで、13日
まで家に居たの。東電で爆発したのなんて、分かんなかったの、音も聞こえないし。妹がきて、
ここに居れないからって、何で？って思っ。どこに避難すれば良いのと思ったね。それで、
妹の所に避難させて頂きました。そこには10日くらい居たかな。息子が今度福島に迎えにきて
もらって、今度白川。いやほんとに、不安で色々気持ち混乱して、3年経ちました。夢みたい
な話だよ。

* :今でも浪江にいきますか？

E：二回程いきましたけど、見るに満たない。もう、豚とかいろいろ動物がきてね、かけていた
服を全部おろしてね、その上に座ってね、あれ何十頭も来たんでしょ。そして、あっちこっち
におみやげおいてきて。臭いがすごくて。隣で、牛かかっていて、その牛か分からないけど、
うちにもりもりってあるんだよ。ガラスも落ちて、鍵も地震でくるっちゃって。ホントすごい
んだ。見るに見れない。家は東の方に傾いたりしているんだけど、でも太い大黒柱と母屋は頑
丈にできていてあるの。うちも立て直そうなんて、もう雨漏りもひどいし、どうにもなんない
ね。放射能は高いし。9ぐらいあるし、家の中は4。測ってもぴーぴーなるし。写真もとって
きましたけど、見る影も無いです。(・・・)行ってみても懐かしい、ちょっと寒いから来れ
持ってきたいけど、もってこれないわ。息子たちからもだめっていわれるし、買うしか無い。
請戸の浜のほうは、家ながされて何もないよ。私ばかりじゃないなあとおもって。けどこの
後のこと考えるとね、もう私たちは1年1年じゃないの、80歳以上は、1日1日なの。ホント
に考えさせられます。ふるさとあっても、帰りたいけど帰れないってのはね。浪江に居る時は

何でも自分たちで作って、あの時が一番幸せで最高だったんあなと思って。最高があると、最低もあるなあと思う、最低のときに、どうやって言い上がろうと思うと、体がもの言うんだよね。 仮設でもイベントがありまして、私はなるだけ参加して、はげまされてるんだなとおもって、毎日感謝の気持ちでいます。（・・・）

C×D さんの語り（女学校時代の同級生）（ギャラリー：E, J, K）

婦人会で共に活動していた浪江高校の同級生 C と D さん。2 人は、ゆったりとしたペースで、懐かしい思い出や原発誘致時代を回想した語りを展開した。2 人とギャラリー席の間では、終止笑いが絶えなかった。

D：楽しい思い出は沢山。 部活動もあったし。悪いこともしないで、いいこだったんだよ(笑)。

C：ろくなことしなかったけど、楽しかった。 ろくなことしなかった。(笑) かわいいもんだつたよな。

D：下駄はいて、通学して。映画も見に行っただ。とにかくうちに帰って、手伝いしなければならなかった。歩いた。C ちゃんたちは請戸から歩いたの？

C：歩いたよ。お昼はお弁当、私ら色々帰りに寄ってきたりしたよ。

D：今白状したのか？（笑）

C：父親は怖かった。 とにかく父親が厳しかったから。 火鉢振り上げて、勉強も見てもらっていた。よく本は読んだな。月刊誌も毎月買ってくれたり、母が亡くなったからね。お風呂の焚き口で妹らはその本を読むんだよね。そうしている間に、お風呂はゆであがっちゃって。また怒られるんだよね。子育て、介護が終わってから、旦那と旅行もしたり、趣味とかし始めた。婦人会活動は楽しかった。 いろんな所に研修もいかせてもらったけど、こんな風になると思わなかった。

C：福島にも研修できたな。 なんだかんだいって、今では憎たらしい原発をつくるどころから見に行ってたもんな。

D：あれ、創る時から、私たち視察していたんだよ。老人会とか。出前講座や、勉強会とかね。

C：あれは、そういうもつで、強制させていたんだよね。やっぱりならされてたんだな。 洗脳されてたんだな。 絶対安全だとかいって、10年前のトラブル隠しからおかしいと思っていたんだ。 いろんなどこ観ただけどな。 その前は、色々調査でみせていたんだけどな。不信感はいまになって募るだけだ。

D：チベット地帯だったから、あの頃出稼ぎが多かったの。どこの家も出稼ぎで出ていって。うちでも旦那が働いていたから。今考えると、それがねらいだったんだな。

C：我々もならされてたんだな。 オリンピックおわつてから、豊かになったことはホント。我々もならされていたんだらうね。おつとざわ飛行場だからね。小学校1年で終戦を迎えたんだけ

ど。あの当時、高等科、今でいう中学生ね。毎日飛行場の草むしりだっって行って、出て行った。いってらっしゃいってなんていうと、上級生に怒られたもんだったな。私らもあの土地を安く売ったんだよな。土地を。

D: ホントに何も無い所に目をつけたんだな。

C: 実際、核燃料サイクルの陸奥って行ったこと有るんだけど、本当に、もうこれ日本かっていうテキサスの荒野かっていう感じでよ。はまなす街道なんて名前だけ良くて、松がこんなに倒れてよ。あれ見ると、あれこれ日本かなと思う。これはもう核のゴミしか置けないだろうな。何も生産できないんだろうなって。所々ごぼうの畑があっってね。あの時は大手ゼネコンの看板が凄かった。私らもこんな感じ、チベットだか、砂漠だったのかなと納得したんだけど、まさかこんなになると思わなかった。息子にもいわれるんだ、佐賀原発まで行ってどうしたって。まあこんなになると思いませんでした。

D: そっちょこっちょって、歩いてね。(笑) (・・・)

<ユーモアの語りについてのまとめ>

ユーモアの本質は、ある概念と事象との間の不一致から生じるズレによりうまれるとモリオール(Morreall,1995: 90=166)は述べている。これは、心理学などのユーモア研究において、主流な見方となっている。例えば、丸毛(2014)は、アウシュヴィッツの生還者であるプリモ・レーヴィが残したユーモアにあふれた体験談について、レーヴィは状況がはらむズレを笑うことで、思考の自由を確保していたのではないかと述べている。

Gさんが体験した食料不足だった開墾時代と物が豊富にある現代のズレ、Eさんが体験したあべこべな結婚と現代の結婚観のズレ、そして、CとDさんが語った原発誘致時代と事故後の何も知ることができずにだまされていたことのズレが表現された語りは、避難者たちにとって、さらに置かれた避難生活という現状のズレとしてあらわれている。しかし、きわめて困難な状況に直面した中でも、ユーモアを交えて語ることで、その状況からの解放を行った。各語り手の体験は絶望的な出来事であったに違いないが、ユーモアあふれる表現を交えて軽やかに語った。

そして、現在から過去を振り返り、新たなストーリーを創造する語り手たちは、現在おかれた現状を笑いつつも「こうして、私が80までふうふうして生きていられるのは、不思議だね。若いとき鍛えすぎたからこうしていられるのかなと思って。ありがたく思っています。」や「毎日感謝の気持ちでいます」と、日々の生活の中に感謝の気持ちを述べた。

このようなユーモアあふれた語りは、高い生成継承性を持つ人が、負の経験を前向きに捉える転換的な語り直し(救済シークエンス)の語りである。すなわち、後続世代へ

と関与する「今は困難であっても、努力すれば成功する」という希望の物語への語り直しを可能にした (McAdams et al., 2001)。

2-4. カタルシスの語り

もちろん全ての語りが、笑いで語られた訳ではない。震災を生きのび自分だけが助かった罪悪感、一人暮らしにおける孤独感などの感情についても率直に語った。これまでの人生を振り返り、過去の自分と現在の自分を関連づけ、意味づけをおこなうことができたとき (回顧の作業が成功したとき)、カタルシスの表出が行われる (圓田, 2001)。そして コトレ(Kotre,1995=1997:254) は、「人生の総ざらいが上手く行くと、一体感、統一感、達成感がその人の人生にもたらされる」とし、協働の場においても同様に、語り手たちは静かに口を開き、淡々と自らの人生の総ざらいを行ったのである。

Iさんの語り (ギャラリー: J, K, D, E)

昔はくねくね曲がった用水路で、農薬も使っていない田んぼで魚をとって遊んでいたというIさん。勉強はあまり好きではないIさんは、高校卒業後、計算機関係の会社に勤めた。しかし、オイルショックのときに為替も変動相場制になり、勤めていた会社は倒産した。その後、浪江町にラーメン屋を開業した。

あの頃は、原発もあったから、原発があつてのお客さんだったから。浪江だけじゃなくて、双葉郡はそれで生活してた人はかなり居たと思う。飲食、下宿関係。その恩恵は大きかったとおもう。双葉や、大隈では税金も入っていたから。

*: 何でラーメン屋にしたんですか?

I: ラーメン屋ってのは資本投資が低くて、回転率がよいの。ラーメンっていうのは、1日何杯売れば生活出来るって言うのが、手っ取り早く分かるって言うのがあつたんで。ラーメンで一番難しいのは、茹で上げるのが難しいの。後は、材料、これとこれをまぜるでできるの。麺の状態をみて、茹で上げるのが難しい。見て分かる。ある程度かかるけどね。仕込みは分量通りにやればそれで終わりだから。

*: 一番人気は?

I: 普通のいわゆる中華そばと焼きそば、結構出ましたね。後は、チャーハン。後はもろもろ。夜一時までやっていたから。結構来てたね。

*: 結婚はいつされたんですか?

東京に居る時。2年ぐらいで倒産したのかな? 会社倒産ってのは、容易じゃないと思うよ。そんなこんなで、店も、営業許可書が切れたらやめるって決めていたから。60 過ぎたら、自分の時間と決めてたから。まあ、やめて、これからって言う時、女房が亡くなったから。だから、そ

れから、女房のお父さんと居るの。やっぱり、我がの親と違うからね。

地震だけでは、家は壊れる事無かったんだけどね。建てて、2年目で地震がきたから。家は全然壊れなかったから。原発なかったら、そこにいたんだけど。

避難の時は、おにぎり一個だけ、2日目はコッペパン 1/3。うちの子供が丁度女房の 100 日であったから。東京に言ったら行っただ、こっちの状況も分からないから。ここの仮設を調べてたら、空いていたの。この後、こうだって言うこと国から示されてないでしょ。復興住宅ができるとか、出来ても入れるか分からないし。そんな状況だから、私はうち建てる気はないから。跡継ぎいないから。はっきりいって、今後の人生は成り行き任せって言う感じだね。

来年、70 でしょ。結局 10 年しかすめない家建ててもどうしようもないでしょ。まあこれもしょうがないだろうなと思いますけど。

*：浪江は一時帰宅でかえりましたか？

I:浪江はあまり行かない。行っただ、只眺めているだけでしょ。位牌もみんな持ってきているから。向こうに行ったら、お墓あるだけだから。しょっちゅう行かなくても良いのかなあとおもって。お墓はなおしましたけど。

まあ隣組も遠くまで行っている人もいるけど。。。あっちこっちに行っている。

(省略)

*：浪江はどんな街ですか・

生まれてずっとだしね、まあほほんどのこと分かっている街だから。生活してて、何にも特別なこと考えなくて、生きてられるというか。こっちにくると、出かけるにしても、色々パソコンで調べたりしなきゃ行けないし。(省略)

*：浪江での好きな季節は？

I:どっちかという、秋かな。夏は仕事やっけて、暑いし。冬は帰り寒いし。秋とか、春とか、生活していて楽だったね。秋は、山にいてもきのこことったりね。仕事やっけてる時は、仕事だけだったからね。

*：奥さんも一緒に働いていたんですか？

I:いや、1人。忙しい時はね。小さい店だから、そんなにそんなに店自体、10坪くらいだったから。店でずっと立ってから、膝悪くしてね。早く定年むかえたかった。いくつになっても仕事やっけてる人はいるけどね。よくサラリーマンは退職してから、何をしたいかわからなくて、そのうちすぐ死んだりする人いるみたいだけどね。ある程度考えていたから。

*：退職後は何をしていたんですか？

I:カメラを持って色々歩いていた。ipad でとったり、facebook にアップしたり。(省略)

*：今の浪江について？

I: 浪江に誰も帰ってこない。お墓も無縁仏になるのかと思って。今後人口が少なくなって、あ

と住む人が居ないってことだからね。将来的には、お墓守る人も居ない。昔みたいに、子供が何人も居て、うち継いでくれる人が居るのが当たり前だったんだけど、今はそうでもないからね。今は長男だからって、うち継ぐわけでもないからね。まあそれもそういう風に育てたんだか、世間がそういう風潮なのか、まあそれもそれでしょうがない。まあ大体生きて来て、これからはそんなとこかなあと思って。まああと何歳まで元気で生きていられるのかなと思って。自分がいつ死ぬかなんて誰も分からないんだから、こうやって元気でいたって、明日死ぬかもしれない。みんな生きてる間は元気でいたと思うだろうけどね。今朝も救急車で運ばれた人居たみたいだけどね。何歳だからじゃないだよ。その時生きていて、自分が良いと思うのか、そのときの気持ちはどうなのかな？そのときになってみないと分からない。まあ後10年だか20年だかしらないけど。

私は前から考えていたんだけど、80までは生きたい。80過ぎて元気だったら、人生のおまけ。おまけが何年つくか。そう思っている。自分の人生はそうでありたいなとっている。まあそんな所です。

ギャ：((拍手))

E×Hさんの語り (浪江時代からの友達) (ギャラリー：D, J, K, I)

Hさんは、カメラの前に一人ではずかしいということで、友達のEさんが隣同士に座り、語りが始まった。質問者である著者とEさんは質問もせずに見守った。

Hさんは、川内村に育ち、浪江の若林に就職した。そこで出会った夫と付き合ってから1年も経たないうちに、浪江町の室原に嫁いだ。結婚して半年で、夫は出稼ぎに行った。嫁ぎ先は農家で、やったこともみたこともない仕事で苦勞したという。子供も2人恵まれた。しかし、しばらくして姑がくも膜下で倒れた。夫は出稼ぎで居なかったため、独りで病院の姑に毎日付き添っていた。そんな生活をしているうちに、夫も出稼ぎから帰ってきた。今度は夫が病気になり入院するが、退院して間もなく夫は亡くなった。一人暮らしになったHさんは、子供たちと一緒に暮らすことになったが、最初から孫たちと接していなかったの、一緒に生活してもすれ違いが多く悩んだという。孤独に苛まれながら過ごしていたある日、震災が襲った。

(省略)

H: 今度非難した先は、南会津の田島、また山。3月下旬だというのに、凄いい雪でした。私にしてみれば、雪はあるし、山だし、お店は無いし、なんといいかわからなかったね。そこの公民館にいきました。大隈辺りの人もいて、一緒に食事をしていました。そこでも私は具合が悪くなって、田島の病院にいったんです。そのときも、これまた、お金もなかったし、お金を借りました。でも、会津に居たときは周りの人がみんな良い人ばかりで、大きな鍋に、カ

レーなどつくったり、いろんな炊き出しを作って、ご飯を届けてくれました。ただ、お風呂はなくて、役場の車が来て、週に2回程は、お風呂に連れて行ってもらいました。見知らぬ人に、たとえ一万円であっても、借りたことは、ホントにありがたかったです。

会津の田島は、お店もなく、皆さんと共同で、2ヶ月程生活していました。その後、同じ田島でも、会社の寮に入ることが出来ました。そこは、各家庭、一部屋もらえて、お風呂もトイレもありました。ただ、食事だけは、避難者だけで、煮炊きをして一つの釜の飯を食べてきました。買い物は会津鉄道にのり、会津まで来ていました。電車は避難者ということで、お金もかからず、良かったですけど・・・

私は、こんな会津で生活するのは、いつまで続くのだろうと、雪はあるし、寒いし。何もやることはないし、ただ、孫たちも知らない土地で、慣れない学校生活で頑張っているのだろうと思って、自分も具合が悪くなって、迷惑をかけない様にと自分なりに社宅の庭の草むしりをしたり、お掃除をしたり、昼間は散歩方々、缶拾いをしておりました。その会津では浪江町と同じく、今頃になると、ふきのとうや、わらび、せりつみをして、食べることも出来ました。唯一の私の散歩道にはワラビ、ふきのとうなどの山菜をとってきて、その集会所で食べたことで、早く浪江町に帰りたいという思い一杯でした。8月一杯はこうして、共同生活をしていました。そのうち、みんなで集まって、いつも避難している人に、周囲の人が、ご飯を持ってきたり、おかずをもってきたり、色々、やってもらっていつまでもこんな生活をしていたらダメじゃないかということで、みんなで相談して、じゃ、各自それなりに、仮設とかに入ろうかということになり、役場に問い合わせしました。たまたまこの仮設に入ることになりました。会津に居るときは、周りの人に、世話になり、感謝の気持ち、お礼を一杯言いたいですね。

で、笹谷仮設に来た頃は、ここに来た時、8月下旬は暑くて、これまた私は具合が悪くなりました。浪江で働いているときは、会社休まず、夏でも冬でも、雨降っても、なにしても、勤めていたのに、何でいまは、体が弱くなったのかとしみじみ感じる様になりました。この仮設に来た時、2日間程泣いていました。部屋はほんとに、若い人と同じだったので、これまた、ここでいつまで、こういう生活するんだろうと、だれも知っている人がいない、5人で一部屋に居るのは窮屈な思いでしたね。そんな時、ある人が、まだ若いから、1Kも空いたし、移ったらといわれました。私は1Kに移ることができました。そして、集会所の集まりや、いろんな所にみんなに誘われ、健康体操をしているときに、浪江時代の川久保さんに出会いました。それはとてもうれしかったです。あ、これでなんとかお話できて、自分でがんばっていけるなあ、とっていました。今では、健康体操もやったり、自分の好きな歌があつて誘われると出かけたり、唯一自分で、元気に若い人に迷惑かけないで、頑張っていこうと、皆さんに支えられていこうと思います。

E：これからもよろしくおねがいします。手を取り合ってね。元気にやっていきましょう。

H: 浪江には帰りたくても帰れない。うちも土地も、若い人たちから、帰れないからねって言われています。家は、うちの人と一緒に作った家です。でももうそこには帰れないからねって言われています。孫たちは学校も福島だし、福島にばあちゃん住むよと言われました。これから福島で、自分の住む家を若い人と一緒に、探して作って、これからの人生を過ごして行きたいと思います。

今は若い人にもばあちゃんばあちゃんってってもらえるし、ありがたいです。

私も、子供たちも親戚も離ればなれになったので、今は若い人たちに頼るしかないので、出来るだけ、若い人に迷惑をかけない様に、自分の生活を頑張って生きたいと思っています。ただ今はみんなお友達が出来ました。うれしいことだけど、これから先のことは、いつまでこの生活が続くか分かりません。いずれまたバラバラになると思うと、私はまた孤独な目になると思うと、残念な思いになります。

皆さんと一緒に、どこまでもゆけるわけじゃないよと若い人には言われているけど、早かれ遅かれ、皆さんとの思い出を胸に、今は自分の道を探りたいです。

E: こうやってね、隣同士で居れると思います。一緒に居れたら幸せだよ。力を合わせて、楽しく暮らして、これからも頑張っていきたいとおもいます。

H: 先のことはおいて、今、今日明日、一日の生活を楽しく過ごしたいと思っています。

E: 一日を頑張りましょう。

H: いや、もう、何しゃべったんだか、頭がぼつとしてわからない。

E: ありのままをしゃべればいいんだよ。これからよろしくね。

H: 今はね、声かけてもらうけど、これから先、福島に住む様になったら、やっぱり、ふるさと浪江で近所同士お茶飲みや温泉に行ったり、そういうことがもうできないというのが、一番寂しいよね。自分で家作っても、いつまでも避難者避難者ってられるのも嫌だし、だから、福島で自分がどれだけ頑張、生活できるかな、若い人に迷惑かけないで出来るかなって、誰か知っているお友達がそばにとかあればなあとか、何かやっていれば自分に良いんだけど、それが見えないっていうか自分が今どこに住むか分からないっていうのが、一番不安。ただ、今は、仮設に居る分には、親を飲んだりしてられるからいいよね。

E: 気心の分かったお友達で、笑い声が絶えなく過ごしていますけど。このぐらいでいいですか？私もほら、元気ならいいんだけど、病気持ってるから。手術も先生はやってみなきやわからないっていうし。若い人に迷惑かけたくないし。温泉いたり、歌を歌ったり、気まぐればあちゃんです。

* : ありがとうございます。

ギャ: ((拍手))

E: ちょっと軽くなったでしょ？ここ色々あっても、大変だから。

H: そうだね。

E: 希望をもてなきゃね。希望を持てるまだあれじゃないからね。励まし合って暮らしているの。
小旅行とか行く様にしているの。

H: Eさんは家族とか兄弟とかで温泉いこうってなって、良いじゃないですか。私はみんなばらばらで、ぽつんとひとり。旦那の親戚ともないし。こんなときうちの人が居てくれたら、色々考えられるのに、残念だね。浪江にいるときは、自分たちで作った家じゃないですか、だから、離れるって辛い。私何しゃべったのかわからない。ほんとこんな話になってごめんね。

* : いやありがとうございます。

E: それでいいの。私たちだって、不安で毎日いるんだからこれでいいの。

Cさんの語り（ギャラリー：D, E, G）

Cさんは、震災以来つけているという日誌を持参した。これまで何度もテレビ局や新聞による取材を受けており、震災当時の様子を語り続けているという。請戸での生活の様子が、鮮明に語り出された。自分だけが津波を逃れ、助かったことに罪悪感を抱いているCさんは、後世に震災経験を語り継ぐことで、少しでも役に立ちたいと願っている。

* : 浪江の思い出は？

C: いっぱいありますよね。ありますよね。海もありますしね。まあ今は危険だから海で泳ぐなとか、白砂青松の綺麗な所だったんですよ。渚も広くって。ほんとに、砂浜も綺麗で。今の景観とは大分違いますがね。ホントに近所のお友達と、妹ひきつれて、泳ぎましたよ。今は危ないって言うけど、私たちの頃は死にかけたことも沢山ありましたよ。だから大したもんだと思います。今海危ないから、って言うけど、私たちにとっては友達以上のものがありましたけどね。ただ、今こうしてみると、穏やかな気持ちで眺められないし。今やっぱり、海辺にいくと、何となく嫌な想いでもありますよね。でもやっぱり、海もそうだし、請戸って、高い山が無いんですよ。まあ大平山っていう、なだらかな丘陵地帯があるんですけど、そこにね、請戸の潮風が強いのか知らないけど、そこはサクラの育たない所で、サクラの花ってのがみれないところなのね。ただ、大平山は山桜が綺麗なんですよ。それが、綺麗な年ときれいじゃないとしがあるっていうのね。花芽が鳥に食べられて、その芽がなくなるとそうでもないらしいのだけど、まあ、綺麗な時は、ホントにね、あの松の緑の中で、ぽーっとピンクがあれがあってね、夕暮れ時には、ホントに絵の中から浮かび出す感じがあって、あの風景がホントに好きだったんですよ。今いってみると、浜街道のよつじに、慰霊碑がたっているんですけど、あの辺からみるのが素晴しかったんですよ、で、去年ちょうど、サクラの時期に、お墓参りに行って、その光景みた時はさすがに涙がでましたね。ホントに、このふるさと捨てられかな、とそ

ん時思いました。でも帰れないと思って、何回か、インタビュー受けても、もう帰れないふるさとだからっていうんだけど、捨てきれない気持ちはどっかにのこってるんですよ。悲しいですねホントに。いや、それと、あの津波で、周りにほんとに数え上げると切りないくらい亡くなってるんですよ。で、まあ、生き延びてよかったなあと思う反面、何となく生き延びて、何となくすまなかったなという気持ちがなかなか抜けなくて、罪悪感みたいなものがつきま
とっていましたね。

はい。だから私は地震が来まして、午前中、中学校の卒業式に来賓で出かけていまして、帰ってきて書類の整理をしてたんですね、2時過ぎですね。その夕方ちょっとお通夜があったもんですから、5時になったら、隣のご主人とそのお通夜にいこうと言っていたので、ちょっと調べものしてて、その間に、キャベツの2、3個とってくるかなあという格好で、野良着に着替えて、いたんですけど、その途端に地震がきたもんですから、なんて言うんでしょ、もう立ってられない、歩けない。はいながら、とにかく外に飛び出して行って。飛び出して行ったら、2階の屋根の瓦がガラガラッと14、5枚私は数えたのです。後は、神棚の榊立てが倒れたくらいの被害で。っていうか、台所はめっちゃめっちゃでしたね。まあ、開きの食器ダンスも中身が飛び出して、あ、これは大変だということで、まあ、幸い、孫2人が居るのですけど、下の子が友達と2人で遊びに行って、帰ってきたもんだから、うちの長男の嫁も家に居ましたし、孫も卒業式から帰って、居ましたし。とっさに、近所に、脳梗塞をした親戚の兄貴がいて、とにかく必死になっていって、出てくれ出てくれって、その奥さんに言ったのですけど、中々出れないでしたのですけど、そのうち、また凄い揺れが来たものだから、家に帰ってみたら、とにかく避難しなきゃダメだよって、戻ってきてみしたら、家の細い道、道の側のうちが西に傾いていたんですね。あ、この家がつぶれたら、出る道がなくなるなど思っているうちに、昔家で浅井戸を使っていたもんだから、出なくなって、水道もはいたから、井戸の入り口にコンクリートの重しをのせて置いたんですよ。そしたら、急に雷が一つガンとなった記憶があるんですね。そしたら、井戸の重しが、ぼーっと向こうの方に飛んじゃってね、水が凄いですよ、そこから、ひゅーひゅーひゅーって飛んじゃって。このぐらいの高さまで水がでちゃって凄いですよね。周りは、ピッピッピって出ているし、あれこれ津波だなあっていう、やっぱり恐怖感ありましたですよ。とにかく逃げなきゃって。向こうの家がつぶれたら出れなくなるから、必死に、親子4人で孫の友達も引きづるようにいれて、役場目指そうということで、行く途中わーわーわーわー出ているんだけど、乗せてくる訳行かなくて、とにかく、役場に避難だよって大きい声で、窓から叫んで。ちょっとなだらかな山になるところに役場職員が居たんですよ。そのなだらかな所が、請戸では地震の避難場所だったんですよ。でもここでは、ダメだって役場職員が「Cさん、とにかく役場に逃げてくれと」。で、6号線を上っていったんですけど、6号線が上れないんですよ。車、車で、又戻って、恵央橋で（請戸川に架かる橋）そこを通過、

貴船からそこを通過して、漸く役場に抜けれたんですよ。避難としては私たち早い方だと思うんですけどね。後は、渋滞ですごかったですよね。逃げないで、津波の被害にあった人も居ますけどね、渋滞で巻き込まれた人も多かったんじゃないかな。あの生死を分けるあれっていうのは、罪悪感があるんですよ。助かってよかったのか。でも、まあその人らの分も生きて、なんとか、語り継いだり、少しは役に立つ様なことができればなあと、そう心に、言い聞かせて入るんですけど、今となっては。

ギャ：うん・・・

C：まあそんなことです。

ギャ：((拍手))

<カタルシスの語りのまとめ>

東日本大震災時に発生した原発事故によって、突然奪われた浪江町民たちの生活は、これまでの日常生活の延長線上にあり、そう語られた。多くの語りから、このような苦難は、避難生活に限ったことではなかった。現在に至るまで、家族や配偶者の死、倒産、開墾、戦時中、戦後、農家への嫁入りなど、様々な時代の編制を経た経験の結晶は、引き続き否応無く彼らを前進させ、私たちに明るく振る舞い続ける。しかし、彼らの優しさや強さの裏にはこういった語り辛い体験が眠っている。そして、これからの人生をどのように生きていくかという不安との葛藤の中、自分が理想とする人生を描く自己イメージの統一がなされている。例えば、「80までは生きたい、80まで生きてその先は人生のおまけ」(Iさん)、「これから福島で、自分の住む家を若い人と一緒に、探して作って、これからの人生を過ごして行きたいと思います」(Hさん)や「生死を分ける出来事は、罪悪感があるんですよ。助かってよかったのか？でも、その人たちの分も生きて、なんとか語り継いだり、少しは役に立つようなことができればなあと、そう心に言い聞かせているのです。」(Cさん)などの語りからカタルシスの表出が見られた。行く末が見えない現状から見いだした納得できる結論と前向きに生きる姿であった。

Iさんは、奥さんとの出会いから始まり「別れ」「孤独」そして「震災」、人生の総ざらいと現在抱える孤独感の告白が行われた。ギャラリー席は、Iさんのラーメン屋を知っている。同じふるさとや歴史を共有する者たちは、Iさんの人生をしっかりと受け止めた。周囲には元気な笑顔を絶やさないHさんは口を開いた。隣で見守るEさんの存在も大きい。当時の避難シーンが走馬灯の様に駆け巡る。そして現在Cさんは、津波を免れ、生き残ったことからの罪悪感が抜けきらず、ふるさとへの捨てきれない思いを語る。

日々の避難生活では、様々な気持ちを押し殺しながら生活していることは、第2章の

調査から確認できた。避難者同士でも被災状態による賠償金の格差から身を潜めて生活している。スティグマを負った避難者たちは、本音で語る場が確保されていなかった。しかし、この協働の場は、浪江の思い出を語ることによって、共に歩んできた震災の苦難や慣れ親しんだふるさとが奪われた喪失感を共有することで、信頼と安全性を得ることが出来た。

第3節 小結：「語り直し」の生成継承性

以上の語り直しパターンの事例から、実践①の対面的な協働の場において、慣れ親しんだ者同士、経験を共有する者同士が、浪江の思い出を継承するという課題を遂行することで、(i) これまで語られなかったライフストーリーが語られた（生成性）。時には語り手が2人になり、質問者に代わり独自の質問を投げかけ、時にはギャラリーから「〇〇さんは苦労したのだ」などの補助や笑い、相づちなどが加わった。このように語り手・ギャラリー・聞き手の役割は曖昧になり、語り手を援助するという一体感が生まれたことで安全な場が確保され、これまで語られなかったストーリーを語る事ができた。

ギャラリー席での参加人数や登壇した語り手間の関係性は、語り直しの発現に影響を与えた。そして、聞き手が語り手になる順繰りの語り的手法をとる協働の場は、複雑な関係性を産出する舞台設定であった。つまり、複雑な舞台設定である程、多元的なライフストーリーが生成され、(ii) これら語り直された多元的なライフストーリーから多様な解釈（意味づけ）が生まれた（生成継承性）。例えば、お見合い結婚の際、初めて会う花婿を見てのDさんの印象は「まあ並だったから、けど心躍る訳じゃないよ。まあ、しょうがないかという感じ」（D）、「ひとめぼれ」（B）、「同級生だったからね、うすら覚えには想像できた」（E）、「穏やかな人」（C）など多様であった。他者のライフストーリーを聞くことで、自らの経験も感化され思い思いに表現することができた。

つまり、多様な解釈がみられたことで、物語は自己の物語の中で複数化し自己を他者へと結びつける生成継承性が表出された。意味付けされた物語は記憶しやすく、語りやすいのである（Shank R.C and Abelson, 2005）。

さらに(iii) 世代間でのコミュニケーションが加わることで、次世代に開かれた語りやメッセージが込められていた。ルバルスキー(Lubarsky,1997: 143)は、老若による組み合わせを世代間インタビュー（Intergenerational interview）とし、ライフストーリーの生成的側面がより効果的に表れることを示している。例えば「こうして、私が80までふうふうしていきとられるのは、不思議なのだね。若いとき鍛えすぎたからこうしていきとられるのかなとおもって。ありがたく思っています。」（G）、「男女二人で歩くなん

てのはあの頃だめだったのだ。」(B)、「そんなんで、両家の親同士で決めちゃって、本人ほったらかしにして、そういう時代だったの、現在の世の中にしてみては、ちょっと外れているよね(笑)」(E)、など、現在と過去のズレを把握しながら語りは進行した。

協働の場は、苦労を共にしてきた避難者たちにとって、これからも共に歩んで行こうとする連帯感を確認した空間でもあった。収録後行ったアンケート結果から、「浪江の思い出を話したことで変化はありましたか？」による回答は、回答者16人中「こころがすっきりした」[はい8人、少し6人、今までと変わらない2人、いいえ0人]、「前向きになった」[はい10人、少し5人、今までと変わらない1人、いいえ0人]であった⁴⁵。苦労を分かち合い、自分ひとりではないという連帯感と安全空間の提供こそが、ユーモアや感謝へ転換する生成継承性につながったと考えられる。

(i)～(iii)の要点から、このような「仕掛け(ここでは協働の場)」により、語り手の語りの変動するのである。通常では語られない語りを生成させることがこの実践で明らかになった。

⁴⁵ アンケート質問表は AppendixB を参照。

第 5 章

協働の場における多元的な役割距離：実践①から

第 1 節 役割距離概念について

第 2 節 役割距離とコミュニケーション

第 3 節 カメラの役割

第 4 節 小結：多元的な役割距離からその先の生成 継承性へ

第1節 役割距離概念について

1-1. ドラマツルギーと役割距離

本章では、協働の場で、多元的な語りがどのように語られたのか、そのメカニズムを明らかにするため、ゴフマンの役割概念を一視角として相互行為分析を行う。なぜこの協働の場が浪江町民の経験の意味づけを促進させたのか、そのメカニズムの解明を行う。

協働の場での語りでは、登壇者の語りが終わるごとに、ギャラリー席から拍手が沸き起こった。相互行為をドラマツルギカルに分析したことで知られるゴフマンによれば、ここではチームが働いたといえる⁴⁶。「チームとは、一つのまとまりあるルーティーンを演ずるのに協力している一組の人々」である（Goffman, 1959=1974:93）。例えば、パフォーマーがパフォーマンスに失敗したとしても、オーディエンスが失敗に気づかないふりをする「察しのよい無関心」を貫いたり、適切なフォローを入れる「保護的措置」をしたりすることで、お互いにとって落ち着きの良い自己アイデンティティが、共同作業を通して維持されることになる（Goffman, 1959=1974:270）。つまり、オーディエンスが拍手をすることで、登壇者（パフォーマー）をその気にさせるための適切なフォローがみられたことになる。さらに登壇者の語りにうなずいたり、笑いを入れることで、お互いにとって落ち着きの良い自己が保たれたことになる。このように行為を演技としてとらえるドラマツルギーの観察からは、「演じる自己」が多元的に存在しうる。

ゴフマンの発想では、行為を演技としてとらえるとはどのようなことなのか。ゴフマンはパフォーマンスという言葉で「一組の特定の観察者たちの前に断続的にいる期間に生じ、かつ観察者たちに何らかの影響を及ぼす、ある個人の挙動全体」（Goffman, 1959=1974:24）と定義している。つまり、本人が伝達する意図のない印象やイメージも伝達されてしまうのである。何がそう読み取られるのかは状況次第である。その個人がどんな意図をこめているかとは別次元の意味を帯び、どんなつもりであろうとその状況で決まってしまう。

協働の場では、チームを形成し、フォローしあいながらライフストーリーが語られた。この語る際に演じられるのがゴフマンによる「状況づけられた役割（situated role）」である。木村（2007）は、ゴフマンが主題化したかった状況の定義について「状況の

⁴⁶ ドラマツルギー(演出論的アプローチ)に着目するゴフマンの観察では、行為とはパフォーマー（演技者 actor）がオーディエンス（観客）の前で演技をすることであり、パフォーマーとオーディエンスが相互の立場を交換（相互行為）しながらパフォーマンスをすることである。通常相互行為で作用するドラマツルギーは、パフォーマーとオーディエンスが互いに相手の状況を察し合いながら、自己アイデンティティ（自己イメージ）や役割意識を共同作業によって、その場もっているシナリオを読み取り、適切な行為を遂行する。つまり、相互行為によって、秩序が保たれることである。（Goffman, 1959）

中に投げ込まれている個々人はそれぞれ複数の関心や動機、パースペクティブをもって
いるにもかかわらず、目の前で進行している『事柄』の同一性について、『明白な同一
の理解』（＝状況の定義）に迅速に達してしまうという事態であり、人々はその状況の
定義を正確に査定し、それに従うかたちで自己呈示や印象操作へと囲い込まれている
と述べている。その際、状況のなかにいる人々は「状況の定義」を共同で維持するため
に、相互行為のなかで様々な役割を演じることになる。「状況づけられた役割」とは、
「状況の定義」を維持するために相互行為の中で演じられるこうした役割のことを示し
ている（Goffman, 1961=1995:100）。ゴフマン（Goffman, 1961=1995:100）は、「個人が、
状況にかかわりのある活動の回路の中で演じる役割は、必ず個人に関する何かを表現し
ており、個人や他者は、その何かから、その個人についてのイメージを形づくる」とし、
状況づけられた役割を演じることは、「状況の定義」を維持することだけではなく、個
人にとっては自己呈示や印象操作の手段にもなっていることを示唆する。本分析では、
ゴフマンの状況づけられた役割に焦点をあてることで、個人は常に社会的状況に拘束さ
れ、社会的役割のなかでも自己を演出し、自己呈示を行っていることを浮かび上がら
せることができる。この際、完全に社会的役割において役割を制御することはできないが、
距離をとることを「役割距離」と称し、主任外科医の振る舞いを例として挙げている。
ゴフマンは、役割距離を「個人とその個人が担っていると想定される役割との間のこの
効果的に表現されている鋭い乖離」と定義し、「個人は実際に、その役割を否定してい
るのではなく、すべてを受け容れるパフォーマーにとって、その役割のなかに当然ふく
まれていると見なされる虚構の自己を否定しているのである」と述べている（Goffman,
1961=1995:115）。寒川（1999）は、役割距離について、「役割距離とは、個人に付与
された公式のイメージ（『らしさ・らしく』）とその個人が持つ自己イメージが一致し
ない場合に、自己イメージを表現するために示されるものである」と解釈している。

協働の場に参加した浪江町避難者たちは、個人に付与された公式のイメージ、つまり
「避難者像」から距離がとれたために（自己イメージを表現するため）語ることができ
たといえる。ここでは、避難者像という「あるべき姿」を払拭するために語ったのでは
なく、協働の場という舞台装置が役割距離をとりやすい場であったことから、自由な語
りが促進されたのである。

これまで語られてこなかった、多元的なライフストーリーを創出させたキー要因とし
て、様々な役割を同時に担う個人のあり方として捉えようとしたゴフマンの役割理論を
考慮することは、協働の場での相互行為を分析する枠組みとして必要である。したがっ
て、役割距離により、個人の多元的自己がどのように扱われているのか明らかにするこ
とができる。

協働の場に働く相互行為では、与えられた課題を遂行するために、多元的な役割距離が発生したと言える。例えば、本実践で確認できた事例として、語り手の女性が亡き夫についての思い出を語っていたその瞬間、女性は感極まり涙を流しながら、嗚咽をはじめた。ギャラリー席からは「一緒に頑張りましょう」と保護的措置によりフォローする。この時点で別の役割とシナリオが発効しはじめたことになる。このシナリオの変化をゴフマンは転調 (keying) として定義しており、別のパフォーマンスに変更されていくことについて、「傷つきやすさ vulnerability⁴⁷」がつかまとうことになると、相互行為の壊れやすさと柔軟性について強調した (木村, 2007)。必ずしも行為者の意図したとおりにならないのが、ドラマツルギーの描く現実であり、傷つきやすさという所以でもある。例えば、被災者／避難者たちの声を収集する状況において、カメラをむけられた当事者たちはメディアに期待される被災者／避難者像を演じてしまう場合がある (第2章)。しかし、状況を変えると、これらの支配的な表象に対してオルタナティブな語り (多元的なライフストーリー) として生成されたことが確認できた。本研究の実践はこのようなメディアに期待される被災者／避難者像や語りを避けるため、場の設定を変えて多元的な語りの誘発をねらうものである。埋もれているライフストーリーを発現させ、多元的な在り方として捉える。

1-2. 岩田による役割概念の再検討

役割理論の既往研究では、社会構造レベルにおける役割理論の研究は、主として構造機能主義者たちによって行われている。この現状に対し岩田 (1988) は、個人レベルの役割理論が検討されていないと批判し、ミクロとマクロレベルの両面を考慮したゴフマンの「役割」概念の再検討を行った。役割距離概念によって、個人がいかに関多元的役割をうまく処理しているのか、そのメカニズムの解明に着手することが可能だと述べている。岩田(1988)が理解するゴフマンの役割距離は、個人にとって二面性を兼ね備えている。1つには、自らの社会的生存確保のため (「公式の状況的役割期待の存在様式」)、つまり道徳に従って状況的役割にコミットしている側面である。2つには、創発的自己の多元的要求充足にかかわる存在証明 (「非公式に複数の相違なる多元的役割期待を同時に知覚して自己を組織化する」)、つまり、エチケットを逸脱しない範囲において、個人が自発的活動に従事する側面である。岩田(1988)は、後者を社会の平和や個人の自由を前提とした、個人が担う実践的手段として含意していることを強調した。そして、個

⁴⁷ ゴフマンはフレーム概念を使って、状況の定義を説明する。「転換・転調」といったフレーム間の関係を通じて絶えず別の状況定義に移行してしまうもろさ「傷つきやすさ」をもっているとのべている (Goffman, 1974:376-79)。

人は社会的所与の役割を受け入れて社会の存在維持に貢献する一方、社会的許容範囲において自由を享受し、観念ではなく、実効のある具体的行為によって社会に働きかける可能性を秘めているとした。よって個人は社会の決定に従いながらも、その決定に異議申し立てることが可能なのである（＝状況の定義）。ゴフマンは個人の役割距離の側面を指摘することによって、社会秩序を維持しながらも個人が社会を改変して行く柔軟さや多元性を既存の社会学的役割研究に導入しようとしたと解釈している。こうした背景のもとで「主我と客我⁴⁸」の対話が成立すると述べている。

本研究では、協働の場でとられた個人レベルの役割距離について、岩田(1988)が注目した個人が持ちうるゴフマンの「多元的役割演技者」による創発性とそこから発動される社会への主体的貢献性から具体的な多元的役割演技者について考察を行う。

1-3. 役割距離のコミュニケーション的側面

岩田(1988)の役割距離の意義として、「創発的自己の多元的要求充足にかかわる存在証明」は、個人がとる多元的な表出が、社会を改変していくエネルギーに寄与すると強調している。協働の場において、遂行する継承のための語りの収録行為を、社会を改変していくエネルギーと捉え、語り手に働いた多元的な役割距離とそのコミュニケーション効果について相互行為分析を試みる。

まず、ゴフマンが役割概念の原点とした外科医の事例から、役割距離におけるコミュニケーション効果について紹介する。手術中の主任外科医が緊迫したチームの緊張を和らげるためにジョークを飛ばす行為について、チーム全体の役割が円滑に遂行されるために、リーダー自らが役割距離を表現することは、チーム内（部下の協力を得るため）のコミュニケーションを促すための手法として使われた(Goffman, 1961=1985:138)。このようなコミュニケーター役割（潤滑油的な役割）をもちこめるのは上位者の特権である。演じられている自分を客観的に観察して言及する行為は、「自己の同時的な多元性」を呈示する行為である（Goffman, 1961=1985:159）。あくまでもこの多元性は、主任外科医として手術が成功するためにとる役割、つまり主任外科医が演じなければいけない暗黙の役割として、避けられない振る舞いの一つとして解釈することができる。冗談を言うという主任外科医の役割を演じる際、自己を動員したり、統合したりする必要がある。その際、チームメンバーがその冗談を受け入れる体制である場合に、冗談を言うというパフォーマンスが生じる。そこに、「自己の同時的な多元性」が現れている。ゴフマン

⁴⁸ G.H.Mead が自我論として、人間が持ちうる二つの自我「主我」と「客我」によるもの。「客我」とは me、他者の期待をそのまま内面化したもので、「主我」は I、この客我に対して反応する自己のことである（Mead, 1913=1991:93）。

は「一つの活動システムに積極的に参加しているときでも、彼は、多くの特定の活動システムを横断している他の事柄、関係、多元的な状況に関わりのある活動システム、行為の規範保持に従事せざるを得ない」とし、ある役割での不可避的な側面について述べている（Goffman, 1961=1985:159）。このように、自己の同時的な多元性は、結果的に行為と表現の間の葛藤・対立（緊張感）を緩和する効果を持っているのである。コミュニケーション論的にはこの役割距離は課題を遂行するにあたり効果的であったといえる。

では、協働の場ではどうであったのか？実践①の協働の場では語り手たちが様々な役割を演じる多元的な役割距離がみられた。「次世代に語り継ぐための物語を発現する」という一連の過程をコミュニケーションとして捉えると、この役割距離は有効であったといえよう。以下事例をあげ、役割距離との関係性について考察する。

第2節 役割距離とコミュニケーション

2-1. 古老役割によるユーモアを交えたコミュニケーション

古老役割の事例として、80代女性 R さんの農家への嫁入りの語りを取り上げる。R さんは、その日のことを鮮明に覚えていた。本人抜きでとり行なわれた結納について、ユーモアを交えて語った。

R：学校からの帰宅後仏壇に立派な化粧箱にはいった嫁支度のための帯と履物、金一封みたいな（笑）水引かかった封があげられてたので、父親に今日何かあったのかを聞くと、今日はレイの返事があったのだというので[結納]だったと言われた。なんだか悔しくて涙がこぼれてきたよ。自分の結納にも立ち会えなくてね、いや私は残念というかなんと言っているや（笑）。一言でいいからね、こんなことあるんだとせめて知らせてもらいたかった。気持ちも整理つかないでしょ、一生のことだものね。（大笑い）

そんなんで、両家の親同士で決めちゃって、本人ほったらかしにして、そういう時代だったの。その相手のことも、顔なんて想像できなかったよ。1ヶ月後に、結婚式が決まったから何月何日に行くんだよと父親に言われた。隠居の祖父母もいうんだよな、昔からこの A 家のじいさんってというのは、俺の友達だから、みることも、聞くことも、試すこともないんだからおまえ、今後何月何日に行くんだよって、じいちゃんにもいわれたの。いや、私もがっかりしたっていうか（笑）、おかしかったよ。（笑）はっきり顔もわからないでね。その一ヶ月の間も、今のとうちゃん（旦那）、映画見に行こうだの、何の誘いも無いんだよ。まあ、現在の世の中にしてみれば、ちょっと外れてるよね（笑）

だから現在、私は時々話すの、「あの時どうして、ちょっと映画観にいこうだの、1回くらい誘

っても良かったんじゃないの」っていうと、照れくさそうに、「こんな良い父ちゃんだものよかったべ」っていうんですよ。(笑)

質問者：実際初めて会ったのはいつでしたか？

R：結婚式の日ですよ。(微笑み)

ギャ： えー

Rさんは古老役割をとることによって、ユーモアを交えながら、自らの不幸話をも、おもしろおかしく語ることで、過去の自己から距離がとれ語ることができた。視線は質問者を向き、時より吹き出す笑いをこらえながら、物語を淡々と時系列で語った。

ゴフマンの事例による、主任外科医が緊迫する手術中に冗談を交えて遂行する一種の役割として習慣化された役割距離に比べると、ここでの古老役割はリーダーとして振る舞うという役割の習慣的側面はない。Rさんは、古老役割を演じることで、辛い体験をした過去の自己から距離をとることができ、結果的に協働の場で新しい自己を獲得することができた。このことから、異なる相互行為のパターンによって（主任外科医が責任を果たすためにとる行為と語り手が物語を語るための行為）、役割距離の意味が異なってくるとも位置づけられる。

さらに、この協働の場での質問者が、語り手の孫の世代にあたる若者であったことも、古老を演じるきっかけとなったと考えられる。Rさんはこの協働の場において、孫に継承するための適切な表現（口調と内容）を駆使し、創発的に古老という役割を演じたと捉えることができる。古老とは、昔のことや故事に通じている人生の大先輩であり、絶対的な説得力を持つ長老的存在である。Rさんはその古老を演技することで、教訓としてのユーモアを交え、おちのついたストーリーを語るができる熟練の持ち主である。Rさんは古老という役割によって過去の出来事や自己との間に距離（客観性）を保ち、語りづらい体験談も古老役が捧げる「昔話」として、語る事が出来た。

2-2. 通訳者役割による翻訳・代弁のコミュニケーション

協働の場での語り手たちは、ギャラリィ席で次の登壇順番を待ちながら、他者の語りを聞くことになる。このような順繰りの登壇により、語り手役割（パフォーマー）は、当初は質問者が語りを引き出していたが、徐々に段取りを学習し、質問者なしで、語り手同士、あるいは語り手とギャラリィのオーディエンスだけで語りが進行された。FさんとDさんの登壇事例から、Dさんは耳が遠いFさんのために、質問者からの質問を繰り返して、Fさんに伝達した。時には、DさんFさんの掛け合いの語りも生まれた。

* : 心の支えは？

D:心の支えになったのは何？職業？

F : そうだね。働くって言うのが、心の支え。姑もいたけど、その人たちもみなきやいけないから。普通の人なら、もうとっくに居ない。

D:居ない居ない。

F : 言って悪いけど、私は大きな百姓の娘で、浪江町でも2番目に財産があると家で。だから、くよくよしないの。そして、親もみなきやいけないってことで、2人看取って。自分の家を建てて、移ったの。苦労しか無い。けど、仕事をやっているとね、楽しいのね。それが支え。うちの旦那がそんなでも、仕事に行くと皆良くしてくれて。お客さんたちもいい人だし。これまで、やってきたの。くよくよしない。借金借金でも。毎回催促ばかり。何百万、何千だから。最後は、農協やめてから、パートになって、友達がモーテルやっているから、そこ手伝ってくれていうから、掛け持ち。6時に終って、そこに直行だ。6時半から、6個の部屋を全部掃除して、11時頃帰ってきて。それで、お風呂の中でパン食べて。

D:あら。

F : そうしていたの。

D:借金を返済して。

F : そう、自分でも家建てて。

D:体を粉にして、働いたのだね。

F : ホント苦労したのだ。それでも、こうやって、ニコニコしているから、苦労していると思えないって皆に言われるのだけど。

D:そこまでは私はFちゃんのこと知らなかった。

F : 皆にニコニコしていたから、そう思ったでしょ？

D:うん。苦労しているとは分からないね。

F : まさかお店ではぶすつとする訳に行かないでしょ。はい、いらっしゃいって、ニコニコしなきゃ。お客さんはこないでしょ。暗い影出さないで。けど、お客さんにもしかられたことあって、トイレで泣いたりしていたな。

D: ということあるわな。

F : 私が悪かった訳じゃないのだけど。高いとか安いとか注文して。こんな話でごめんね。

質問者 : いやとんでもないです。大きな農家に生まれて、将来の夢はありましたか？

D : 夢はあったのかだと。

F : ないね。その頃は。百姓だけにはなりたくなかったけど、サラリーマンには憧れたね。

D:だよ！同じ気持ち。

F : でしょ。その旦那は税務課に10年勤めていたから、頭は良かった。けどアルコールでダメ

にした。

D:けどこれ(女)もった訳じゃなかったの？

F:いや、お酒が女。酒が彼女で、奥さん要らないの。そういう人も居るの、世の中。もう最低の人。お金を一円も返すことできないの。一度、役場にお弁当とどけた時、その旦那が、部下にお酒のませていて、ホントはダメなのだけど。それで、部下にどなって、命令したりして。そういうことの繰り返し。最後は、野ざらし。お墓の角にある田んぼ。お酒呑んだのじゃないの？焼酎でも。寒いとき、焼酎飲んで、それでなくなったの。

(・・・)

*:今だと別れるとかあるのですけど、当時はそういうこと無かったのですか？

D:昔は別れるとかなかったんだよね？

F:子供も居たしね。親たちも居たからね、そういう固い気持ちがあったのだね。

D:昔そういうの無かったのよね、根性が強かったのだ、皆。責任感とか。

F:旦那なくなっても、葬儀は私が払った。

D:離婚してなかったからね。

F:私は離婚はしなかったのだけど、息子たちが協議離婚してくれて。息子らずっと見てきたから。こう、高台や、岸壁にいて、殺したいって2人ともいってくれた。母ちゃんのこと困らせているから。だけど、殺人にはなりたくないって、言っていた。それで、息子たちが離婚してくれたの。私じゃなくてね。まあ、ホントにこんな人居るのかって思う程。

D:人生色々だな。

F:そう、人生色々。

登壇者2人の語りでは、質問者に代わって、気のあう親友同士や同級生同士が直接質問することで、語りが促進された。DさんとFさん(同級生)の事例から分かるように、2人の語りは漫才のように繰り広げられ、Fさんは亡くなったアル中の夫の話といったプライベートなライフストーリーを語り始めた。一方で、Dさんの役割は、耳の遠いFさんのために、質問者に代わって質問する役割がとられた。ここでは通訳者役を担っている。質問者に代わり通訳DさんがFさんに直接質問をするという積極的な場面がみられた。それはコミュニケーションを円滑に促すためにとったDさんによる補助行為である。

2-3. カウンセラー役割としてのフォローコミュニケーション

RさんとKさんの場合では、カメラの前に一人ではずかしいということで、ご近所同士で仲の良いRさん(カウンセラー役)がKさんの隣に座り、Kさんは淡々と自分

の生い立ちをモノログで語った。ギャラリー一席も引き込まれるようにうなずき、息のみ、Kさんの話に耳を傾ける。以下は、涙ながらに語り終えたKさんの話につながる会話である。

R：これからもよろしくおねがいします。手を取り合ってね。元気にやっていきましょう。

K：浪江には帰りたくても帰れない。うちも土地も、若い人たちから、帰れないからねって言われています。家は、うちの人と一緒に作った家です。でももうそこには帰れないからねって言われています。孫たちは学校も福島だし、福島にばあちゃん住むよと言われました。これから福島で、自分の住む家を若い人と一緒に、探して作って、これからの人生を過ごして行きたいと思います。今は若い人にもばあちゃんばあちゃんっていつてもらえるし、ありがたいです。

私も、子供たちも親戚も離ればなれになったので、今は若い人たちに頼るしかないのです。出来るだけ、若い人に迷惑をかけない様に、自分の生活を頑張っ生きていきたいと思っています。ただ今はみんなお友達が出来ました。うれしいことだけど、これから先のことは、いつまでこの生活が続くか分かりません。いずれまたバラバラになると思うと、私はまた孤独な目になると思うと、残念な思いになります。

皆さんと一緒に、どこまでもゆけるわけじゃないよと若い人には言われているけど、早かれ遅かれ、皆さんとの思い出を胸に、今は自分の道を探したいです。

R：こうやってね、隣同士で居れると思います。一緒に居れたら幸せだよ。力を合わせて、楽しく暮らして、これからも頑張っていきたいとおもいます。

K：先のことはおいて、今、今日明日、一日の生活を楽しく過ごしたいと思っています。

R：一日を頑張らしましょう。

K：いや、もう、何しゃべったのだから、頭がぼっとしてわからない。

R：ありのままをしゃべればいいのだよ。これからもよろしくね。

ギャラリー一席では、終止うなずきやためいき、語りの最後には拍手がわき起こり、舞台（語り手）がオーディエンスと一体となった。Rさんをはじめ、ギャラリー一席はサポーターやフォロー役になったことで（保護的措置）共同作業により語りが構築された。Kさんの存在が与えた安心感や、ギャラリー一席がオーディエンスとして保護的措置をとったことにより、語りを促すためのコミュニケーションに効果的であった。

第3節 カメラの役割

カメラは、この舞台設定において2つの効果を示した。1つは、カメラを設置することで、自分の語り記録されているという協働で行うドキュメンタリー映画の制作現場

として、各自の語りが記録に値するものであることを、価値づけしたことである。

相互行為が作動しているドラマツルギーにおいて、カメラはパフォーマーとオーディエンスの関係性を変えた。孫の世代に浪江の記憶を届けるという課題の遂行はカメラの存在により、そのライフストーリーに正当性が付与されたと考えることができる。つまり、カメラの向こうでは孫が聞いていて、自己のライフストーリーが孫に届くというお墨付きのもと相互行為が行われた。通常、気詰まりや語りづらさの原因である報道カメラとは違って、協働の場でのカメラは、視聴者が誰か、誰に向けられた語りであるのかが明確な設定である。そのことから、語り手たちは、安心感や親密感を得ることで、協働の場のカメラは、積極的な語りの促進的役割を取り持ったといえる。

2つ目は、従来のインタビュー論ではカメラは恐怖を与える要因だったにも関わらず、後世につながるライフストーリーを収録する、という課題の遂行を行う協働の場では、自己表現を促す道具立てとしての役割を果たした。多元的な役割距離が創出されることだけではなく、カメラもパフォーマーの一人、語りの受け手である孫役としての存在を築いた。カメラの向こうで待っている孫の世代へ向けられた語りは、カメラが世代をつなぐパイプとしての役割を果たした。カメラにしたためられた語りは、生成継承性として、次の世代へ連なり新しい価値を創出していく過程に一致する。カメラの先に、孫や将来の浪江を担う後世代が耳をすませ、参加者たちの語りに聞き入る姿があることを前提に、語り手たちは、カメラの前の舞台にありのままに登壇する。Pさんは、収録2日、3日目に参加し、3日目には姉の形見の着物を縫い直したという半纏(はんでん)を着てきた。「私も見た瞬間気に入ったガラでしたから、一重だったのだけど、私は綿を入れて、自分なりに仕立てた訳です」と述べると、カメラはその半纏の細部にクローズアップした。聞き手が同じ空間に不在であっても、カメラの存在により、語りの生成継承性が促された。したがって、協働の場の参加者たちにとって、カメラは、記録者としての役割の枠を超えた存在になっている。これらの要因は、避難者にとって報道カメラとは逆に、カメラが安全空間の確保を補助したともいえる。

第4節 小結：多元的な役割距離からその先の生成継承性へ

古老や、通訳、カウンセラー役割の事例から、語り手役割から距離をとることで、異なるコミュニケーション手段をとることが出来たことが共通点としてあげられる。これを役割概念で解釈してみたところ、役割距離をとることで（語り手役割とは別の役割を演じることで）これまで語りづらかったことが多元的な語りで発現するというメカニズムが明らかになった。

浪江町避難者たちは、世間一般で言われている主流な震災の語り以外の物語は語り辛くなっている。しかし、舞台を変えることにより（協働の場の設定により）、（避難者としての）語り手役割から距離をとる機会があたえられた。したがって、複雑な相互行為から役割距離が増え、コミュニケーション手段が多元に現れた協働の場は、語りの多元性を捉えるために必要な手法であった。舞台設定を変える一つの試みとして、協働の場は語りの促進という役目を果たした。

よって、岩田（1988）が述べる「個人の関与している多元的役割から創られた個人独自の存在様式」とは、協働の場で語り手たちが、別様の役割を演じ、自己表現を行うことで余裕や自信のアピールにもつながっているということである。終戦や、開墾、被災などの困難を体験したにもかかわらず、笑いとユーモアを交えながら表現すること、人生の総ざらいをしながら自己の多元性の存在を確認する行為には、負の経験を正の経験に語り直された救済シークエンスの表出と一致し、生成継承性が発現されている（McAdams et al., 2001）。

コミュニケーションという観点から考えると、語り手は古老役割によってユーモアを交えて次世代へ助言するコミュニケーターとして語り継ぎを補助し、過去の自己から距離をとることができた。通訳やカウンセラー役割が働いた複数（2人）の登壇者の場合では、既に多元的な関係性がからんでおり、どちらかが見守り役あるいは代弁者となり、聞き手にまわることで、語り出しを補助するコミュニケーションの促進が図られた。DさんとFさんは、同級生同士という関係性から、役割分担が行われ、豊かな語りを援助した。このことは、ゴフマンのドラマツルギーにおける、シナリオを遂行する相互行為からさまざまなチームが構成されることであり、その際に生じる自己呈示としても解釈することができる（Goffman, 1959=1974: 90）

さらに、取り上げた3つの役割事例に共通することとして、そこで演じられる役割や自己、そこから生まれる多声的な語りが共同構築されることであり、対面的相互行為から起こる、いまここに象徴される一回性の集いであることがあげられる。元々親しい者同士が集った協働の場であることから、一つの目標が掲げられた空間（後世に浪江の記憶を繋げる）では、即興的なやりとりの中から役割距離がとられたことになる。Rさん1人を取り上げても、古老とカウンセラー役割の二役を演じることができた。個人が多元的役割演技者とされている所以は、この自由度の高い協働の場によって引き出されたことになる。これまでスティグマが付与されていた状況にあった避難者たちは、当事者同士が集う場において、これまで語りづらかったライフストーリーを生成させ、且つ多元的なライフストーリーが生み出された。

ドラマツルギーの観点から、参加人数や関係する人が多い程（情報量が多い程）シナリオは増える。ふいにシナリオが移行しても、それをフォローする人材の層は厚い。同じ文脈を共有している人同士の相互行為において、協働の場は、多元的な役割距離を創出させることで、ギャラリーや語り手によるフォローや、それに伴うコミュニケーションが活発になる。この層の厚さは相互行為が活発になることであり、安心感に比例する。親密者同士がギャラリー席から拍手で応援したり、複数で登壇できる自由な設定によりいつものお茶のみや井戸端会議が再現される。この慣れ親しんだ空間によって、語り手の語りも活発になる。さらに、カメラという道具立てが加わることで、多元的な役割距離の創出にも寄与している。親密者同士-ある程度お互いのシナリオを把握できる仲-、で繰り広げられる語りの中には、多元的な役割距離が眠っているのである。

第6章

memorytalk において制作された動画分析:実践②から

第1節 語りの生成過程と動画作品について

第2節 動画作品のパターンとその分析

第3節 写真による記憶想起

第4節 震災の語りの演出

第5節 小結:「解き放つ」生成継承性

第1節 語りの生成過程と動画作品について

1-1. ワークショップの過程記述

実践①では、世代間インタビューにより、参加者たち(65歳以上)の多様なライフストーリーを抽出した。しかし、継承性を考えれば若い世代のライフストーリーを抽出する必要もある。実践②では、開発した memorytalk アプリを用いて、福島県立浪江高等学校の全生徒と担当教師を対象に、浪江時代の思い出を動画にするワークショップを企画した。ワークショップは以下の流れで進行した。

まず、「作品作りで大切なこと」として、個人が持つ日常の記憶や物語が継承において大事であることについて徳川が講演した⁴⁹。次に、DMD 開発者である青木⁵⁰が memorytalk の機能について説明を行った。本ワークショップは、①memorytalk 全ての機能を紹介し、②各自 memorytalk アカウントを作成し、③動画の制作(練習・本番)のステップに基づき作業を行った⁵¹(図10)。参加者たちは、青木がデモンストレーションする画面を参考にしながら、memorytalk 機能についての説明と平行して各自アカウント名を新規登録した。その間、アカウントを作成し終えた生徒は、memorytalk 内の「記憶を探す」ページでアーカイブされている写真や動画を自由に検索し、閲覧した。



図10 ワークショップ風景

⁴⁹ 「とんでもないことと、とんでもないようなこと」徳川直人(東北大学大学院情報科学研究科社会政治情報学講座社会構造変動論准教授)

⁵⁰ 青木輝勝(東北大学未来科学技術共同センター准教授)

⁵¹ ワークショップ時の配布資料の一つである作業マニュアルは、AppendixCを参照。

次に、memorytalk 内の「記憶を残す」ページに移り、動画作成の練習を行った。登場人物と背景写真を選択し、「こんにちは」などの挨拶を挿入した練習動画を制作した。同様に、青木の解説に沿って作業を進めた。操作方法をまとめたマニュアルを配布したところ、マニュアルを見ながら進める生徒も数名みられた。

動画作成のステップとして、はじめに、あらかじめパソコンに仕込まれている 30 枚の浪江町の風景写真から背景写真を選び、次に 83 種類のキャラクターからストーリーの登場人物となるアバターを選ぶ。そして、選んだ人物の動作を 106 種類のジェスチャーリストから選ぶ。最後に、動画に挿入する BGM を選択する。パソコン操作に慣れている生徒は、1 名以上の登場人物を選び、シナリオを挿入し、様々なジェスチャーを交えたストーリーの構成を立てた。

休憩を挟み、本番の動画制作を行った。2 日前のプレイメントの際に配布した指定用紙にシナリオを書き込んできた生徒は 4 名であった。しかし、書き留めていない場合でもシナリオの構成が練られており、スムーズに物語を構成する生徒は各 6 人グループ中 1、2 名確認できた。一方で、練習動画の内容である「こんにちは」など挨拶のみで、なかなか本番シナリオを構成できない生徒も各グループ 1、2 名いた。ある生徒は、登場人物のジェスチャーに重点を置くあまり、物語が進行しない生徒もいた。ある生徒は、写真を選択する行程から次に進めず、またある生徒はシナリオが思いつかないなど動画制作の進行具合に差が出た。制作終了後、了承を得た 3 名の作品を匿名で発表した（作品①、③、⑨）。発表中、生徒と教員たちの間で笑いと拍手が沸き起こり、ワークショップは終了した。

ワークショップ後のアンケート結果⁵²から、ワークショップに参加しての感想として以下のようなコメントが寄せられた。

- アニメーション動画が簡単につくれて楽しかったし、自分が作ったアニメが動いて、感動した。
- 浪江でやったことを書いているうちに、少しずつ浪江の記憶が戻ってきたようで楽しかったです。
- 難しいと思っていたが、意外と簡単にできました。キャラクターや動作の種類がたくさんあり、色々と考えることができました。
- 他の作品を見て、浪江のことについて様々なことを知ることができた。
- やっているうちに、楽しくなってきた、もっと長い動画を作りたいと思いました。
- 何気ない日常がこのアプリを通して、とても懐かしく特別なものを感じて驚きまし

⁵²アンケート質問表は Appendix C を参照。

た。

質問項目：memorytalk にアップされている写真や動画のなかで、心に残っているものを教えてください。

○最後に皆で見た動画が面白くて、浪江のことも思い出すことができたと思います。

○浪江駅の震災前の写真

○完成した4人の動画

○1人の男の人が自分の奥さんの話をしている動画

○請戸川、桜並木、駅など

○キャラクターのバリエーションがあつてよかった。

以上から、memorytalk を用いたことによって、浪江の記憶や出来事を思い出す切っ掛けとなった。

1-2. 分析方法：ストーリー領域における評価機能

制作時間約1時間で動画制作を完了し memorytalk に投稿できた作品は、36人中27作品であった。残り9名分は、作業時間が足りない、パソコン操作が難しいなど、何らかの理由で形にできず memorytalk には投稿されていない。時間の関係で、動画の出力後におこなう memorytalk へのアップロードは、開発チームがアカウント「2015/10/01ワークショップ」を作成したあと、アップロード（投稿）を行った。本研究の分析対象は、現在 memorytalk に掲載されている、27作品を対象とする。27作品の内、背景写真になる写真を持参し、使用した人は3名であった。

これら動画作品のシナリオ部分に対して、ストーリー領域に着目した構造分析を行ったところ、ストーリー領域や過去の経験にあたる物語世界が確認できた作品は、27作品中20作品であった。残り7作品は、こんにちはなどが繰り返され、物語世界やストーリー領域が確認できない挨拶のみの作品であった。

本章では、ストーリー領域および物語世界が確認できた20作品（生徒16作品、教師4作品）のシナリオと、背景に使われた写真について分析を行う。以下、生成された動画作品の概要である（表5）。

表 5 memorytalk による作品概要一覧

作品番号	シナリオ・エピソード 詳細概要	背景写真	固有名詞	シナリオシーン	登場人物	ユーモアの語り	告白によるカタルシス	断片的な記憶	震災の語り
①	お盆休みの請戸での花火大会	大川(請戸)		4	3				「また請戸の浜で花火大会やろうよ！」
②	5月になると散る桜	見上げた桜	中央公園	5	5			「でも5月になれば花が散っちゃう」	
③	おばあちゃんとの畑仕事の思い出、お風呂に食べたジャガイモ料理がおいしかった。	田畑		8	2		「好きだった野菜はじゃがいも」「そうだったのね」		
④	海での思い出	夕焼け海岸		3	3			「冬にもかわからず足だけ海に入って遊んだりもした」	
⑤	震災後、一番苦なことにはチャレンジした	桜並木		4	2	英語による自己紹介	「英会話を習い始めた」		
⑥	駅前の思い出	浪江駅まえ	浪江駅	1	3				「また浪江駅まえでお酒が飲める時がくるといいな。」
⑦	マリナーパークでの思い出	大川(請戸)	マリナーパーク	7	4		「なかなかレギュラーになれなくてかっかりしてた」	楽しい思い出の連載	
⑧	浪江高校校舎前から、今は入れない校舎だけどこか部活動したい。	高校門まえ(写真持参)		7	1				「いつの日かこの校舎で部活動して楽しみたい」
⑨	学校での思い出、文化祭で33万羽の折り鶴で巨大壁面をつくった。夜中、火事にならないように男の先生が学校に泊まった思い出。夜中暴走族がきた。	富岡高校校舎(写真持参)	すいせんさい	7	2				
⑩	夏の釣りの思い出	大川(請戸)		6	2				「また釣りに行きたいね」

表 5 memorytalk による作品概要一覧 (続き)

作品番号	シナリオ・エピソード・詳細概要	背景写真	固有名詞	シナリオシーン	登場人物	ユーモアの語り	告白によるカタルシス	断片的な記憶	震災の語り
⑪	空について サツマイモ畑の思い出。2010年は夏に雨が少なくて、水やりにはヒーヒーいっていた。という訳で、私の苦勞を吸ったサツマイモは生物選択者が美味しく食べた	空		3	3			「空きれいだったな」	
⑫	新婚旅行の思い出、夕方7時半ごろ、暗くなつてみんなが見送りにきた。	桜並木		7	1	モノローグによる毒舌			
⑬	休日友達と遊んだ思い出、自転車なかなか乗れなかった。ひざこそうから血が出たよ。	浪江駅まえ	スーパーひたち	4	3			「浪江駅が混んでくらくらしたな」 「夕方7半のだね」	
⑭	出そめ式の思い出。おじいちゃんの船に乗って、沖でみかんをなげる、けどそのままこっそり食べていた。	夕焼け海岸		9	2		「そのままこっそり食べていた」、「少し気持ち悪かった」、「船に乗るのも好きだった」		「またいつかのリタいな」
⑮	桜みちの思い出。桜が満開のとき桜みちをとおると桜みちのにおいがしたな	見上げた桜		2	2			「桜餅のにおいがしたなあ」	
⑯	小高に住んでいた頃は、犬の散歩にいったなあ。	見上げた桜		3	1				
⑰	公園でよく遊んだ思い出、トラマコに乗りながら、桜を見た。青春の日々	桜遊具		5	3				
⑱	散歩の思い出。浪江でよく散歩してたね	田畑		2	4				
⑳	好きな人について、あの頃俺たち、夕日に向かって走ってた。今は夕日がまぶしすぎて背をむけてるもんね	桜遊具		9	2	アタイ調、偽名(ミーとペン)	「ペンがアタイのことが好きだったんだ。いや、俺は今でもあの時とおなじだぜ。そんなペンが。。。わたしは好き」		

第2節 動画作品のパターンとその分析

実践①におけるライフストーリー分析と同様に、転換的な語り直しが行われた箇所に着目し、対比、ユーモアの語り、カタルシスの語りの分析枠組みを用いて、動画作品の分析を行った。実践②では対比の語りは見られなかったが、ユーモアの語り、告白によるカタルシスが確認できた。

2-1. ユーモアの語り

作品⑤



A:はろー。あいむ、ぼぶ。震災の影響で何か変わりましたか？

B:あによはせよ。じゅぬん、しの、いんにだ。震災後、一番苦手なことにチャレンジしました。

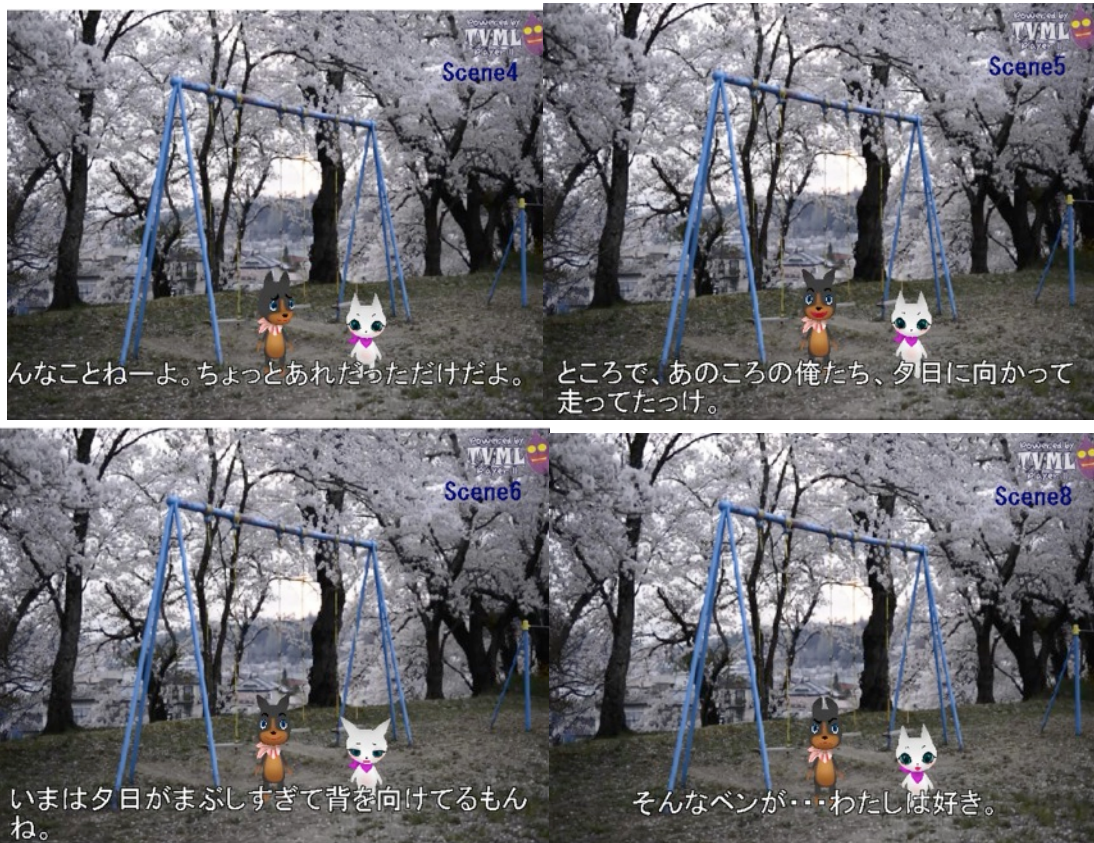
A:わーお。いっつ、ぐれい。何にチャレンジしたの？

B:英語を習い始めたんだよ。

作品⑤は、宇宙人と伯爵というユーモラスな登場人物設定により、現在の心境や思いを前向きに表現している。奇抜なキャラクターを選んだことで、辛かった震災体験を乗り越え、英語を習い始めた、というポジティブな会話が成立した。負の経験として捉え

がちな震災経験を正の経験として捉えた本作品は、救済シークエンスの現れである。「英会話を習い始めたんだよ」という告白はカタルシスの語りにも一致する。

作品⑳



A：こんにちは。おれはベン。

B：こんにちは。あたいはミー。

A：ミーとは中学校の同級生。

B：ベンはあたいのこと好きだったんだ。

A：んなことねーよ。ちょっとあれだったただだよ。（写真参照）

ところで、あの頃の俺たち、夕日に向かって走ってたっけ。（写真参照）

B：今は夕日がまぶしすぎて背をむけてるもんね。

A：いや俺は今でも、あの時とおなじだぜ

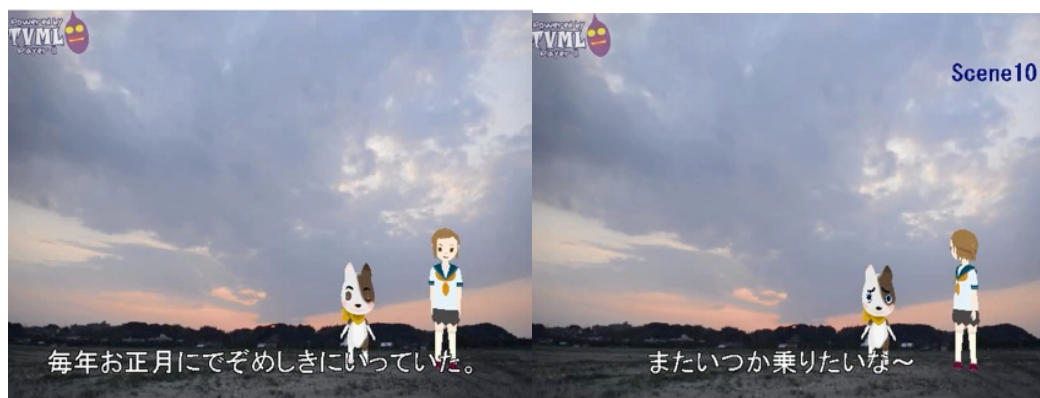
B：そんなベンが・・・わたしは好き。（写真参照）

作品⑳は、犬とネコの人物設定で、過去と現在の思いをつなげた軽快な掛け合いのストーリーである。今も昔も変わらないポジティブな想いがストーリーとしてまとめられている。さらに、ボブとベンという架空のキャラクターを生成することで、被災者としての自己から距離が保て、自由なシナリオが生成された。ユーモアあふれるキャラクタ

一とセリフ設定により、節目である震災の経験を良い出来事へと意味付けする語り直しが行われている。つまり、喪失から前向きな意味づけが行われており、生成継承性の現れであるといえる（やまだ 2007a）。

2-2. 告白によるカタルシス

作品⑮



犬は隣で聞き役（表情の変化や相づち）

A：毎年お正月に出初め式にいった。（写真参照）

A：おじいちゃんの船に乗って沖にでてみかんを投げるんだけど

A：そのままこっそり食べていた。

A：船は沖でぐるぐる回って

A：気持ちが悪かった。

A：でも海も好きだったし、

A：船にのるのも好きだった。

A：またいつか乗りたいな〜（写真参照）

作品⑮では、出初め式を起点として、震災前の様々な思いを彷彿とさせる。当時は打ち明けられなかったこと、今思うと実はそうでなかったことが告白されているストーリーである。

作品⑦



A：うけどで思い出すのはマリンパークでしょう！

B：みんなでテニスをしによく行った～！

C：うんうん、よく行った。楽しかったね。

D：それから、サッカーの観戦の応援に行ったこと！

B：なかなかレギュラーになれなくてね、がっかりした。(写真参照)

D：そんなことない、そんなことな！頑張ってたよ！

C：たくさんの思い出マリンパークが残っていて良かったね。

「なかなかレギュラーになれなくて、がっかりした」(作品⑦)(写真参照)では今だから話せる素直な気持ちの告白として動画に反映された。

memorytalk は、匿名で参加できる他に、動画制作する際、対面関係を持たずにアバターを通じてストーリーを構成することができる。上記の作品では、ユーモアあふれるキャラクターを使用することで負を正のストーリーとして構成しやすくなっており、過去に言えなかった内容を告白するシナリオが生成された。これらの作品の中では、語りづらかったことが様々な演出によって告白されている。

第3節 写真による記憶想起

memorytalk は、背景写真を自由に選ぶことができる。この機能によって浪江町の写真をきっかけとして、多元的な動画作品が制作された。以下、写真が与える記憶想起の特徴を述べる。

3-1. 写真による断片的な記憶の現れ

作品⑬



A：スーパーひたちに乗って新婚旅行にいったよ

B：暗くなってきたのに、みんなが見送りにきてたね

C：夕方7時半のだね

A：浪江駅が混んでるくらいだったね

浪江駅の写真から彷彿としてよみがえる新婚旅行に旅立った夕方を描いた作品⑬は、「スーパーひたち」、「夜7時半」、「帰宅ラッシュ」と、走馬灯のように鮮明な記憶を想起させる。記憶は断片的だが、詳細な情報が制作者の脳裏に焼きついていることがわかる。

3-2. 写真による多様な記憶の現れ

作品⑥



A：カンパイ（写真参照）

A：大学生の頃、地元の友達とお酒を飲みに行った思い出。

A：今ではみんないい大人になりました。またなみえ駅でお酒が飲める時が来るといいなあ。

作品⑥で、「カンパイ！」浪江駅の写真から呼び起こされたのは、学生時代の飲み会であった。写真から誘発された断片的な記憶は、その後続く様々なストーリーや描写を生成させた。作品⑬の背景写真と同じ浪江駅の写真を用いているが、新婚旅行と飲み会の思い出が想起された。1つの写真から制作者によって異なるストーリーが展開されたことは、多様な意味付けがなされたことに等しく、結果的に多元的な作品が生成された。

以下の桜の写真からも同様のことが言える。

作品②



A：イヤッホイー

B：キレイー

- C：でも5月になれば花が散っちゃう
D：私桜だーい好き！
E：いやなみえ町の中央公園の桜きれいだったな。

作品⑩



- A：なみえの桜道はきれいだったな。
B：桜が満開のとき桜道を通ると桜餅のにおいがしたな。(写真参照)

作品②と⑩では、同じ桜の写真から異なるストーリーが展開した。「でも5月になれば花ちっちゃう」(作品②) 鮮明な記憶の断片がよみがえり、「桜餅のにおいがしたなあ」(作品⑩) と嗅覚の記憶も想起した。

3-3. 写真の絵日記的使用

作品⑧⑨⑭は、各自持参した写真を背景にした作品である。主に出来事の記録として、写真は絵日記として使われた。いずれの作品も学校校舎を使用しており、あらかじめパソコンに仕込まれた浪江の風景写真を背景に使った作品と違い、持参した写真であるが故に、それに付随するストーリーの趣旨は明確である。

作品⑧（字幕キャプションなし）



A：こんにちは。僕の名前はのぶ。

A：ここは浪江高校校門まえです。立派な校舎ですが、今は入れません。

A：いつかこの校舎で後輩たちと部活動やりたい。

作品⑧は、浪江高校の校舎を紹介しながらも、後世に原発事故の痛手を伝えようとしている。

作品⑨



A：富岡高校の文化祭で校舎の全面いに巨大壁画をつくったよね。

B：そうそう、折り鶴を一杯おって、1995年すいえんさいだったね。

A：新聞広告の裏紙を使ったり、印刷所から要らなくなった色紙をもらったりして折ったね。全部で33万羽の鶴だった。（写真参照）

B：体育館で針金に折り鶴をつけて絵になるように組み合わせたね。丁寧につくらないと生徒会の先生からやり直しさせられた。校舎に飾る時は建築会社をお願いしてクレーンで屋上にあげてもらったね。

A：毎日放課後遅くまで残って公開文化祭に間に合うように頑張ったね。出来上がったときはすごく感動した。

B：うん、文化祭の前日にやっとできたのだよね。そしてみんなで仮装行列に出かけたんだよね。夜中にも折り鶴がかに時になったら大変だから、男の先生が学校に泊まったんだよね。そしたらバイクに乗った暴走族がきたんだって。

作品⑨では、具体的な出来事について何が起こったのか、詳細にわたり当時の様子が描かれている。

作品⑭



A：やあ

A：懐かしい色々たくさんの思い出があるよなあ。中でも休日に友達と遊んだ。

A：自転車なかなか乗れなかったな

A：膝小僧から血が出たよ。(写真参照)

A：今は乗れるからいい思いでだよ。

作品⑭では日記をつけるかのように、自転車練習した日々の様子が記録したされている。

第4節 震災の語りの演出

生徒たちが抱える日々の語りづらさは、ワークショップ後実施したアンケート調査からも明らかである。例えば、「質問項目：浪江についてよその人には話しづらいと感じることはありますか？」の回答には「どこの学校？と聞かれてちょっといいづらい」「話が合わない」「避難しているというだけで話しづらいいたくない」と述べている。

しかし、memorytalkを使用した結果、日々語りづらいつ感じている生徒たちであっても、震災の経験やその後の思いを語る上で、セリフまわしに変化をあたえることやアバターのジェスチャーを変えるなどの演出を施すことで、自分たちの経験をもとにした動画作品を作ることができた。以下、作品を交え、分析する。

作品⑫



A：高校の校庭にはサツマイモ畑があった。

A：女子が多い選択クラスで畝をつくるときに、クワが振るえない女子が多かった。

A：女子にもある程度の筋力を求めたい。

A：2010年は夏に雨が少なくて、水やりにヒーヒーいっていた。(写真参照)

A：この私が

A：という訳で、私の苦勞を吸ったサツマイモは生物選択者が美味しく食べた。

A：翌年も、授業の一貫で、畑をつくるつもりだったんだがなあ。(写真参照)

作品⑫は辛口なモノログによる生物の授業活動の描写だが、「翌年も授業の一貫で畑をつくるつもりだったのだが。。。」と皮肉をこめたセリフから余韻を残す演出が施された。

作品⑬



A：こんにちは。今日は小学校の時の夏休みの話をします。

A：おばあちゃんの家遊びに行くと、畑仕事を一緒にしました。

B：はい、どうも。

A：畑にはたくさんの野菜があった。一番収穫が好きだった野菜はじゃがいも。

Bさん：そうだったのね。

A：お昼にじゃがいもを使った料理をおばあちゃんに作ってもらって、食べたのとても美味しかった。(写真参照)

つる子さん：あら、ありがとう。

B：これで私の話は終わり。さよなら。

作品③は、「今日は小学生の頃の夏休みの話をします」で始まり、おばあちゃんとの楽しい畑仕事の思い出が対話調で進行する。しかし、ストーリー終盤「そうだったのね」から「お昼にジャガイモを使った料理をつくってもらって、食べたのとても美味しかった」の間、登場人物のおばあさん役の表情が固くなり、にがい表情になった。しかし、瞬時に、おばあさん役は「あら、ありがとう」と表情は戻り、お辞儀をした。表情を変える演出によって、戻れない故郷への悔しい思いが表現されている。

作品①



A：請戸に来るとお盆やすみの花火大会を思い出すわ。

B：そうそう、みんな海岸に寝転んで花火を眺めていたよね。

A：また請戸の浜で花火大会やろうよ。

C：わかった。おいらも協力するよ。

浪江から離れて生活を送る避難者たちは、「また請戸の浜で花火大会やろうよ！」(作品①)、「また浪江駅前でお酒が飲める時が来るといいな」(作品⑥)、「いつの日かこの校舎で部活動して楽しみたい」(作品⑧)、「また釣りにいきたい」(作品⑩)などのように思い思いの願いを表現している。しかし、帰還する目処が立たない浪江町の現状において、「帰りたい」などの本音すら語れない現状があるにもかかわらず(第2章より)、memorytalkがもつ匿名性が与える安全空間の確保により、願いや本音が反映された作品

が生成された。

以上の作品例から、memorytalk の動画作成機能により、語りづらいとされる震災関連の語りが動画作品として生成された。

第5節 小結：「解き放つ」生成継承性

実践②の協働の場において、memorytalk の機能である多様な登場人物選択により、語り手役割の代役であるアバターを設定することや memorytalkID を使用することで、匿名性（安全空間）が得られる。このアバターの配置により、制作者とアバター間のやり取り（演出）であるもう一つの相互行為が追加される。実践①で得られた多元的な語りは、複雑な舞台設定によるものであったが、memorytalk も同様にアバターを設定することで複雑な関係性を生み出す舞台設定が可能となった。その相互行為は、以下のような演出が可能である。一つは、動物や宇宙人などのユニークな (i) 登場人物設定や様々なジェスチャーの選択により、キャラクターに合ったセリフ回しや表情を演出することでこれまで語りづらかった語りなど多元的な動画作品が生まれた。2つ目に (ii) 背景写真を選ぶことで、制作者による視覚的想起がみられ、多元的な物語と解釈（意味付け）が生まれた。例えば、20 作品中 7 作品が桜の写真（桜並木、桜と公園、見上げた桜）を背景写真に用い、制作者独自の桜にまつわる物語が生成された。

このように、memorytalk におけるユーモアの語り、告白によるカタルシスや震災を取り巻く現状についての作品化の過程から「しゃべっていいのではないか」、「作品にしてみよう」という思いが芽生えた。このことから、やまだ（2007a）の言う「解き放つ」について2つの解釈が可能である。1つは抑圧されていた自己からの解放、2つ目は社会的過程に向けてリリースされ、制作者の手から離れて行くことである。つまり、memorytalk を通して、自由に表現することで自己解放が行われ、作品をインターネット上に投稿することで、制作者の手から離れ、作品は全世界の目に触れることになる。そして、ケアする者がケアされる過程へとつながるサイクルを形成する⁵³。つまり、生成継承性における「生み出す、つくる」、「はぐくむ、維持する」、「解き放つ」というプロセスのうちの「解き放つ」ことが実践②によって確認された。したがって、実践②は (iii) 「解き放つ」生成継承性の現れとして捉えることが出来る。生成継承性とは、このよう

⁵³ 実践①では、得られた語りを DVD に保存し、仮設住宅の集会所に寄贈しただけであり、第三者が閲覧したことは確定できない。しかし、インタビュー映像は現在 memorytalk で観覧可能である。実践②で開発した memorytalk 内に、これら実践①で収録したインタビュー映像をサンプル動画としてアーカイブしたからである。このことから、即時的にインターネットに公開できることや、インターネット経由でいつでもどこでも memorytalk にアクセスできることで、memorytalk にのみ「解き放つ」生成継承性が発現している。

な新陳代謝の繰り返しであり、その土地の記憶はこのような解放作業によって発現し、サイクルが形成されていく。

(i)～(iii)の要点から、 **memorytalk** が与える機能を通して記憶が想起され、制作者による演出（表現）を通して、「解き放つ」生成継承性が発現することがこの実践で明らかになった。

第 7 章

協働の場における高次なコミュニケーション：実践②から

第 1 節 memorytalk が与える生成継承性

第 2 節 断片から「集合知」に変わる時

第 3 章 小結：多元的な役割距離からその先の生成継承性へ

第1節 memorytalk が与える生成継承性

本節では、memorytalk において多面的な語りが反映された動画作品が生成された過程について、3つの次元から考察をおこなう。まずは作品作りの場との関係性から発生した副次的関与、次にシステムとの関係性から発生した役割距離によるロールプレイング、3つ目としてインターネットとの関係性から発生した公開への手助けである。

1-1. 考察(i) : 副次的関与の発生

動画を制作する際、制作者は、いくつもある背景写真から一つの写真を選ぶことや、膨大なリストをブラウジングしながら登場人物のキャラクターを選択する。さらに、ジェスチャーリストの一つ一つに目を通しながらストーリーの構成を練る。その間、隣人との間に雑談がみられた。例えば、背景写真を選ぶ際、「この桜どこだっけ?」「浪江駅懐かしい」「空きれいだったよね」などの雑談が生じた。さらに、キャラクターリストから登場人物を選択する際、想定していた登場人物とは異なる宇宙人や動物をベースにしたキャラクターがあり、「これ見て、このキャラおもしろい」「これうちのおばあちゃんと犬なの」などの話題があがった。

このように主要関与である動画制作作業の過程において、一部の生徒たちの間で会話が誘発された。制作者たちは、このひとときによって、浪江の懐かしい話を誘発した。さらに、「こっちのキャラクターの方があうよ」など互いの作品に対するアドバイスする制作者も確認できた。これは、ゴフマンの言う「副次的関与」であり、仕事をしながらの鼻歌や、何かに耳を傾けながらの編み物を例としている (Goffman, 1963 : 48)。「主要関与を維持しながらもそれと平行してさりげなく続けることのできる行為」である。相互行為において、複数の活動に従事していることは、副次的関与の現れであり、動画を制作する上で必然的であった (Goffman, 1963 : 48-55)。例えると、セラピストがカウンセリングの際、患者にお茶を入れる行為が副次的関与である。お茶を入れることで、患者は気が紛れ、主要関与である語りを誘発しやすくなるのである。つまり、一見主要な作業からは脱線していると感じられる関与は、memorytalk という道具が与えた「操作方法」によって余談や雑談を誘発することで副次的関与を引き起こしている。この副次的関与が生じることで、制作者たちは気が紛れたり、互いの意見によって触発されたりと、その間自己の経験に向き合いながらシナリオをおこすための編集作業が行われることになる。

memorytalk の特徴は、語り手自らが環境をカスタマイズ (写真選択、登場人物、ジェスチャーなど) できる点である。これは、例えて言えば、1人で俳優や演出、大道具も

やるという自由度の高い状況であり、その分作業量も増える。そうした自由度の高さを紛らわす形で、副次的関与として memorytalk と制作者の間での相互行為が自然と生まれるようにデザインされている。

そして、今回のワークショップのように memorytalk を利用する場合、memorytalk は副次的関与として対面的相互行為を誘発しやすい CMC であることが言える。つまり、匿名の CMC としても利用でき、対面的相互行為やリアルな人間関係を誘発、補完する CMC としても利用されたことになる。このように、memorytalk は選択性と自由度の高い CMC として位置づけられる。

さらに、ゴフマンは主要関与／副次的関与を支配的関与／従属的関与とも言い換えている。memorytalk を用いた個人単位の動画制作を主要関与（＝支配的関与）とし、制作中の制作者間の相互行為を副次的関与（＝従属的関与）とする（Goffman, 1963=1980:49）。ワークショップを開いたことで副次的関与を引き起こし、支配的関与としての動画制作を促進した。主要関与のみでライフストーリーを語ろうとすると、避難者たちは避難者像を演じてしまう恐れがある。しかし、副次的関与が発生することで隣人と雑談し、そのことが避難者像としての語り手役割に対する役割距離行動にもなっている点に注目したい。ワークショップでの参加者間の談話も主要な動画制作に従属しつつ、語り手から距離をとる行動になっている。ここに支配的な語りに回収されない、自由な語りを誘発する仕掛けが二重に施されている。

ワークショップ終了後のアンケートに見られる「個性豊かなキャラクターがかわいかったです。作る人によって、様々な物語ができて楽しいと思います」や「難しいと思っていましたが、意外と簡単にできました。キャラクターや動作の種類があり色々考えることができました。」「自分が打ち込んだセリフが動画の中で話され、とても面白かったです。もっと長いセリフや物語風に作ってみたいと思いました。」などのコメントからも、参加者たちは、副次的関与が働いたため、主要関与である動画制作をする際、雑談から情報交換が行われることで気楽に作品を制作することができたといえる。したがって、memorytalk という道具立て自体が副次的関与を帯びており、気軽に動画作品を生成することができる仕組みといえる。これは、生成継承性の現れとなる多元的なライフストーリー（動画作品）の生成に役立っている。

1-2. 考察(ii) : ロールプレイングの発生

実践①の協働の場では、ユーモアやカタルシスの語りといった多元的なライフストーリーの発現と同様に、実践②の memorytalk によって多元的な動画作品が生成された。異なる制作者が同じ写真を使用しているにもかかわらず、多元的な語りが派生している

ことから一目瞭然である。その要因として、memorytalk は、memorytalkID やアバターによる匿名性が保証されている、さらにアバターの配置によって相互行為が追加されることから、多角的な動画作品を誘発させている（第 6 章）。考察(ii)では、匿名によってとりおこなわれるアバター配置の相互行為について考察を深める。

制作された動画作品をゴフマンの役割概念を一視角として分析すると、memorytalk は、語り手（アバター）となるキャラクターを自由に選択できる。語り手である制作者は、アバターを通して避難者としての語り手から距離がとれ、自由に作品を制作することができた。これは、制作者がストーリー中の登場人物に聞き手役（アバター）を自由に設定することができる点からも明らかである。制作された 20 作品中 18 作品は、2 人以上の登場人物で構成されており、ストーリーの語り手と聞き手役を自由に配置すること、つまりロールプレイング（役割演技）することで対話が自由に構成される。

実践①におけるドラマツルギー的観察から（第 5 章）、参加人数や関係する人が多い程（情報量が多い程）語りをフォローする人が多く、安心感を与えることでシナリオ（語り）は増えることが明らかになった。memorytalk により生成された動画からも、登場人物であるアバターが増えることで賛同者がフォローする対話を確認することができた。例えば、作品⑦では、4 人によるアバターの掛け合いで物語が進行する。

- A：うけどで思い出すのはマリンパークでしょう！
B：みんなでテニスをしによく行った～！
C：うんうん、よく行った。楽しかったね。
D：それから、サッカーの観戦の応援に行ったこと！
B：なかなかレギュラーになれなくてね、がっかりした。
D：そんなことない、そんなことない！頑張ってたよ！
C：たくさんの思い出マリンパークが残っていて良かったね。

B の「なかなかレギュラーになれなくて、がっかりした」という告白を受けて、D は「そんなことない、そんなことない！頑張ってたよ！」とがっかりした思い出に対してフォローする会話が構成された。

作品①では、3 人によるアバター同士の会話が構成された。

- A：請戸に来るとお盆やすみの花火大会を思い出すわ。
B：そうそう、みんな海岸に寝転んで花火を眺めていたよね。
A：また請戸の浜で花火大会やろうよ。
C：わかった。おいらも協力するよ。

C（普段は腰が重いおじいさん役）が「わかった。おいらも協力するよ」と発言する同調のシナリオが構成されたことで、花火大会への思いは一層高まった。現実には、開

催することは難しい請戸での花火大会への思いをフォローする会話が構成された。

このように、体験の語りは CMC による動画制作という過程を経ることで、語り手である制作者はアバターを通して、語り手役割を自由に演出・構成できる。つまり、多種多様な登場人物を設定することによって役割距離が確保され、語りづらい経験の語りも作品化することができた。

ゲーミング⁵⁴的視点から考えると、プレイヤーはデザインされた手順やルールのもとで、目標に対する最適解の探求においてロールプレイングする。語り手役であるプレイヤーは memorytalk を使いロールプレイングしながら作品を制作することで、高次のコミュニケーションスキルを獲得している。デューク (Duke, 1974) は、ゲーミング手法は生産性が高く、ルールに則しながらもある種の役割を演じることで、多様な視点が獲得されることを述べており、これを「多重話 multilogue」と呼んでいる。ロールプレイングが行われる memorytalk プレイヤーは、より良い作品を制作するために登場人物を増やしたり、シナリオに工夫を凝らしたりすることで、ユニークで、オリジナルなストーリーを構成することが出来た。作成者がキャラクターを演じること (ロールプレイング) が可能である memorytalk は、役割の柔軟性が高く、距離が取りやすいといえる。

1-3. 考察 (iii) 公開への手助けの発生

物語は多様な媒体で記録・保存される。語りの口承だけではなく、日記や動画としても記録される。実践①では、カメラという道具立てが、現在と次世代をつなげるパイプ役を果たした。memorytalk も同様に、動画作品をインターネットに投稿することで、次世代へつなげる役割を果たしたのではないだろうか。実践①では、語りの相手が孫であることが明確であることにより、カメラの安全性が確保されたが、memorytalk では、特定はされていない他者へつなげる。このことは、他者と交換可能な日記を準備したことに等しい。memorytalk は、日記が手を離れ、第三者に公開されると同様に、匿名で作品がオンラインに公開される仕組みをとっている。memorytalk という道具立ては、次世代につなげるタイムカプセル的な役割を担っていると考えられる。

さらに、生成継承性の概念である「解き放つ (やまだ, 2007a)」は、生み出したものが手を離れ、世に送り出されるプロセスのことであり、ここでは全世界がアクセス可能なインターネットに投稿されることと解釈できる。ここに生成された物語は、世に公開される生成継承性の仕組みが memorytalk には備わっている。

⁵⁴ ゲーミングを「未来を語る言語」と呼び、人間が行いうる最も高次のコミュニケーション手段としている (Duke, 1974)。

これら考察 (i) と (ii) の過程を実践①の協働の場と比較すると、共通して多元的な役割距離が発生したことでライフストーリーの生成につながったと言える。そして、memorytalk における (iii) 公開への手助けの発生によって第三者（インターネット）に公開されることで、はじめて、生成された物語が継承性を帯びる形をとった。

第2節 断片から「集合知」に変わる時

memorytalk による動画作品には、実践①では確認できなかった記憶の断片の語りがある。対面で語る場合、語りは起承転結などある種のプロットにのっとった形で多くは語られる。単なる断片的な情報や、物語にならないつぶやきのような思いは、対面的相互行為における場合、気軽には語れない。しかし、CMC である memorytalk は、このような記憶の断片を作品化させた。目の前にオーディエンスがいる訳でもなく、即時的反応を気にしなくてもよい memorytalk は、このような断片的な語りに対しての受け皿となっている。その点の気軽さと自由度の高さは、作品を制作する上で重要な側面と考えられる。

さらに、memorytalk が、記憶の断片を育むことにおいて有効的であるとしたら、次に、それらの断片が複数つきあわされる／組み合わせることによって、新たな意味が創発されるのではないだろうか。これは、アッサンプラージュ⁵⁵ (assamblage) やコラージュ (collage) という概念でも説明できるように、違うものが2つ以上組み合わせることで違う意味が発生することである。トリン (Trinh, 1989) は、ヘゲモニーに回収されない自らの声を得るためには assamblage な語りが必要だとしている。物語を断片的に語ることで、差異を強調するのである⁵⁶。

memorytalk では、制作者が作品を生成すると同時に他の作品も閲覧することができる。制作者は他者の作品によって、同様の体験が他の人にとってどんなものだったかを知ることができる。ここでは実践①の協働の場でギャラリー席を設置したことによって、情報の共有が行われたことと同じ効果である。そのことから、語りがつきあわされることで、自らの語りだけでは見いだせなかった新たな意味が創出されることになる。これらの舞台装置に参加することで、語り手による意味付けを超えたものがみえてくる。これは集合知（みんなの知を集合させ、新たな発見が生まれること）の理論と一致する。集合知とは、「みんなの知恵」という概念であり、インターネットでの wikipedia やクラウ

⁵⁵ 「寄せ集め」の意味。様々な種類の物を一つに寄せ集めて作品にする現代芸術の手法として使われる。

⁵⁶ 映画監督である Trinh T. Minh-ha の映像作品 “Reassamblage” (1982) は「再組み合わせ」を意味し、被写体であるセネガルの女性の日常映像を意図的にクロスアップやカットの断片をつなぎ、編集した作品である。

ドソーシング、ソーシャルメディアなどに積極的に使用されている概念である。石川(2011)によると、集合知とは皆が関わることで人が持つ多様性が活かされることである。集合することで、「知る」、「問題を発見する」、「仮説を立てる」、「予測する」などの利点がある(石川, 2011:96-177)。

memorytalk は断片的な語りを発生させ、それが世に解き放たれることで集合し、他者の作品を通して新たな意味付けが行われる。実践②のワークショップ後のアンケートでは、「他の作品を見て、浪江のことについて様々なことを知ることができた。」や「何気ない日常がこのアプリを通して、とても懐かしく特別なものを感じて驚きました。」など、他者の作品を見ての発見や驚きがみられた。その他の質問「他の方のお話を聞いての感想と心境の変化はありましたか？」では、回答者 16 名中、共感したが 7 人、少し共感したが 4 名、今までと変わらないが 5 名、無かったが 0 人であった。前向きになったか、または、やる気が芽生えたが 5 人、少し前向きになったが 4 人、今までと変わらないが 6 人、前向きになっていないが 1 人の回答が得られた。

以上から、集合させた語りや作品を閲覧することで、集合知が働いていると言える。自己の語りを手を離れ、他者への意味付けに貢献し、その聞き手が語り手となることで再話されるという連鎖を経て、様々なバージョンの語りが生成された。このことは、協働の場によって語りが集合し、語り手が他の語りを知ることで情報が共有され、自己の経験に対する意味付けの誘発が行われる。この連鎖にこそ、生成継承性が現れているのである。

第3節 小結：多元的な役割距離からその先の生成継承性へ

以上の考察から、memorytalk がもつ副次的関与やロールプレイング、「解き放つ」という特徴が語りを誘発したり、役割距離を生み出したりすることで、多元的な作品を生成させ、継承性を帯びるという生成継承性のメカニズムが明らかになった。memorytalk の機能であるアバターを使用することで相互行為が発生し、制作者は「避難者像」としての語り手役割からロールプレイングすることで距離をとる機会が与えられ、語りづらい自己の経験を作品にすることが可能となった。さらに、memorytalk の選択幅によって、多元的な演出を施すことを可能にしたため、自由な表現を交えて多元的な作品を制作することができた。

通常、ソーシャルメディアなどの CMC は、個人が使用するコミュニケーション手段であるが、CMC を用いてワークショップを行った結果、その制作過程で対面的相互行為が確認できた。つまり、memorytalk とそれを使用したワークショップ 2 つの場で相互

行為が二重に施されたことになる。このことから、相互行為が複雑になり、役割距離が増えたことで、自由度とコミュニケーションの手段が増した。memorytalk のメリットはワークショップという対面的相互行為を形成する中で活かされたと考えられる。

したがって、memorytalk を使用した本実践は多声性を捉えるために必要な手段であった。また、memorytalk によって断片の語りが集合することで、新たな発見や意味付けが行われることが確認できた。この連鎖の過程において、生成継承性が現れたことになる。

終章

第 1 節 本論文のまとめ

第 2 節 今後の生成継承性の在り方

第 3 節 今後の課題と展望

第1節 本論文のまとめ

著者は、継承に対し、新しい物語を生成することが継承性を帯びていくという物語論的アプローチをとる「生成継承性」の枠組みを用いた。生成継承性は、多元的なライフストーリーの生成により効果を発揮する。そのライフストーリーの誘発のために、協働の場を用いた実践を行い、ライフストーリーを多元的に捉えるためのメカニズムを明らかにした。本章では今後の生成継承性についての在り方を提案する。まず、これまでの実践を整理する。

生成継承性には、「多元的なライフストーリー」が重要な要素である。その多元的なライフストーリーの抽出のためにどのような環境（空間、場）が必要であるか検証するための第一歩として、2つの協働の場を用いた実践的手法を採用した。

実践①は、セルフヘルプグループ、フォーカスグループインタビューとアクティブインタビュー3つの方法を兼ね備えた FTF である。これは、語り手が自由に登壇できることと、ギャラリー席を設け、他の語りを観覧できることで安心して語れる空間を設けることを意図している。この設計を用いて、福島市笹谷仮設で避難生活を送る浪江町民にライフストーリー・インタビューを行った。実践①から以下の3点の結果が得られた。(i) これまで語られなかった物語が語られた、(ii) 多声的な物語と多様な解釈（意味づけ）が生まれた、(iii) 世代間でのコミュニケーションにより生成継承性に結びつく多元的な語りが生産された。実践①の協働の場では、ゴフマンの役割概念を用いた相互行為分析から、語り手（パフォーマー）と聞き手（オーディエンス）はその場が持っているシナリオを読み取り、適切な行為を遂行する。オーディエンスが適切なフォロー（拍手や相づち）を入れることで多元的な相互行為が働き、常に複数の役割距離が発生した。語り手たちは孫役となったカメラに向かって積極的にライフストーリーを語った。これらの考察から、協働の場によって語り手役割から距離をとる機会があたえられ、複雑な相互行為が発生することでその役割距離が増え、コミュニケーション手段が多様に現れた。したがって、協働の場によって、多声性を捉え、語りづらい内容でも語れることができることが明らかになった。

実践②では、インターネット上での協働が可能な CMC における memorytalk アプリケーションを開発し、福島県立浪江高校の生徒とその教員 36 名を対象に、動画制作のワークショップを行った。memorytalk では、匿名性を獲得することで、自己としての語りから距離を保ち、アバターを通じた自己開示がみられた。参加者自身の顔が公表されないことや疑似人物でいられるという気軽さと安心感を得ることができた。実践②で得られた動画から、転換的語りである救済シーケンスから生成継承性の現れを確認した。

さらに、背景写真から想起された物語について分析した結果、同じ写真によって多様な記憶が想起され、多面的な作品が制作された。写真は断片的で鮮明な記憶を想起させ、絵日記的役割を担うことで出来事の記録の補助として使われた。制作者は、自由度の高い memorytalk により、巧みな演出をすることで、語り手役割から距離をとることができた。また、「しゃべっていいのではないか」、「作品にしてみよう」という衝動がみられた。ワークショップでは、memorytalk がもつ多様なキャラクターなどの選択幅が切っ掛けとなり、副次的関与の現れとして、隣人とのコミュニケーションが促された。そして、制作者はシステムに則したルールのもとで、最適解の探求においてロールプレイング（役割を演じることで多様な視点を獲得した）することで作品を完成させた。memorytalk は匿名のまま世に送り出す機能をもっていることから、やまだの「解き放つ」について2つの解釈が可能となった。1つは、自由に表現することで自己解放が行われたこと。もう一方は、作品を投稿することで、作品は全世界にリリースされることである。「副次的関与」と「ロールプレイング」、「公開への手助け」が働いたことで、作品は memorytalk サーバー上で集合体を帯びた。それは、集まることで、新たな意味付けが行われる集合知の理念に等しい効果である。

これらの2つの実践から、協働の場によって複雑な相互行為が発生し、役割距離が増え、語り手役割から距離をとる機会があたえられたことで、コミュニケーション手段が多様に現れた。このことから協働の場では多声性を捉え、語りづらい内容でも語れることができることが明らかになった。

これらの結果をふまえて、実践①と②の協働に働く相互行為についてモデルにまとめた（図 11）。本研究で実践した協働の場に働く相互行為について3つのポイントにまとめる。

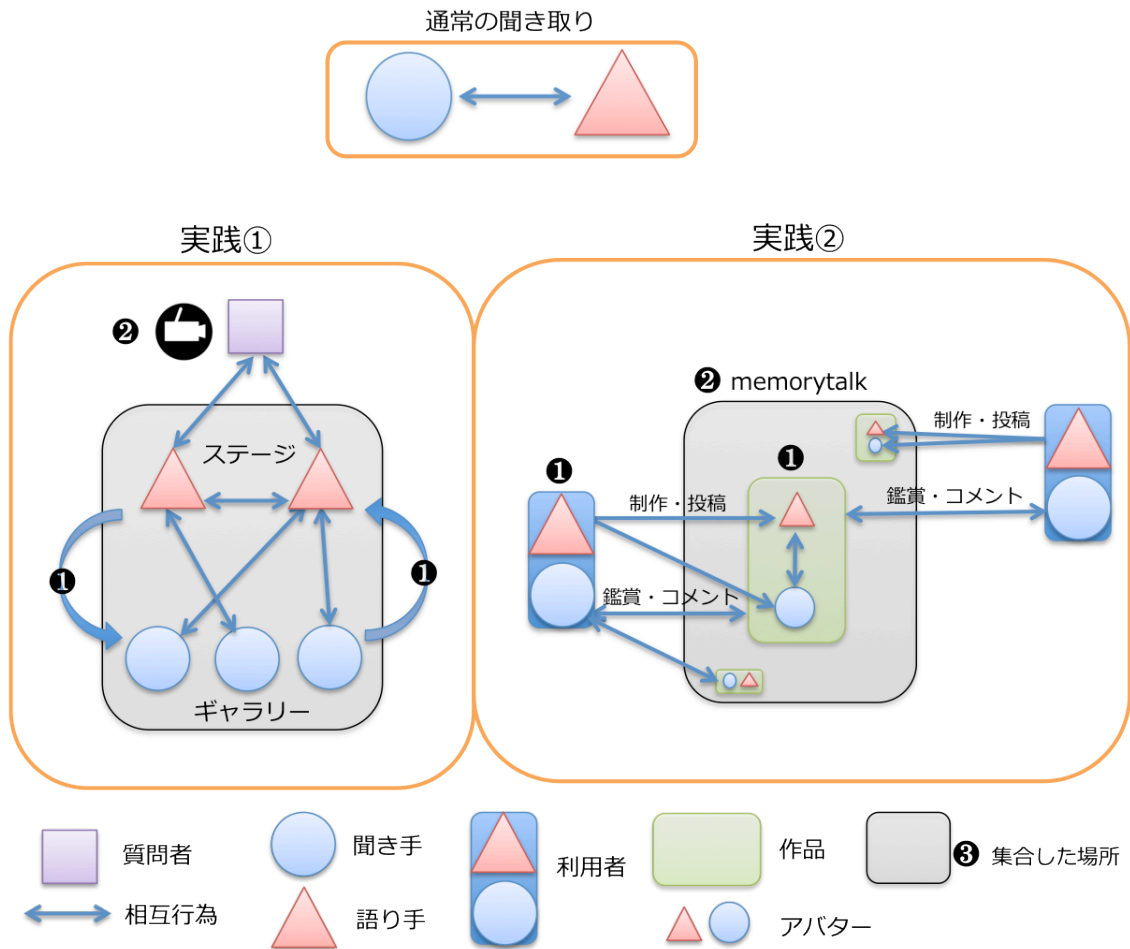


図 11 語りの相互行為モデル

一つ目は、実践①と②の舞台設定における語り手と聞き手に注目する。参加者は、いずれの場合も語り手と聞き手の二役を担った(①)。実践①は、ギャラリー席を設けたことで、そこで待つ聞き手は順繰りに次の語り手になった。実践②では、memorytalkユーザーは語り手と聞き手役割を担うだけでなく、制作者として作品の制作や投稿、そして、作品を鑑賞し、コメントを挿入する鑑賞者としての関係性も発生する⁵⁷。他の語りを聞いた聞き手も次の語り手になることで自己の経験と比較しながら、「私も語ってよいのだ」という安心感を得ることで、自らの経験も語る事ができた。実践②については、制作者は語り手と聞き手としてアバターを自由に創出することで(ロールプレイ

⁵⁷ 実践②では、語り手(制作者)による制作・投稿と聞き手(鑑賞者)によるアーカイブ内の動画などの閲覧までの実践であったため、投稿されている動画などに「コメントを挿入する」については、検証できていない。

ング)、匿名性を維持しながら避難者像から距離をとることができ、語りづらいことも動画作品として語ることができた。その制作者も、鑑賞者として他の作品を鑑賞することで情報を共有することができ、新たな意味づけが発現する。これらに働いた相互行為をまとめると、聞き手が語り手になること、語り手が聞き手になるという役割の入れ替わり(実践①)やアバターをロールプレイングすることで、多重かつ複雑な役割距離を生み出す。世間一般から期待されている、避難者として語られがちな語りとは異なる、多元的なライフストーリーの語りを生成することが出来た(①)。

次に、ドラマツルギーの観点から考察すると、それぞれの道具立てが相互行為を促進していたと考えられる。実践①のパフォーマー(語り手)は、ギャラリー席を前にしたカメラ付きの舞台上で演技する(語る)。実践②の制作者はアバター(パフォーマー)を用いてストーリーを演出する。実践①ではカメラの存在、実践②では memorytalk という道具立てにより相互行為が活性化したといえる。これらの道具立ては相互行為を活性化させると同時に、役割距離を発生させ(カメラは孫役であることやアバター選出のための多様な選択幅)、語りを多元的に捉えるダイナミックな関係性が構築された(②)。

そして、物理的であれバーチャルであれ(実践①では集団で語りを収録する、実践②ではインターネットに作品を投稿する)、語り手たちの語りを一つの空間に集合させたことにより、語りが複数付き合わさり組合わされることで、新たな意味づけが創発された(③)。このことは、集合知やアッサンブラージュの理論と一致する。特に、実践②では物語にならないつぶやきのような思いも作品化され、断片的な語りに対しても受け皿があった。

本研究は、生成継承性に対しゴフマンのドラマツルギーモデルを援用した。その結果、パフォーマーとオーディエンスが配置された舞台をデザインすることで、豊かな効果が生み出されることが解明できた。ある程度のパフォーマンス性を促進することで、参加者たちは自己表現を行い、新たな意味づけを発見することができたのである。ゴフマンのドラマツルギーでは、状況づけられた役割により、個人が自らの意図とねらいのもとで演技するが、その反面、演技は拘束されるという課題がある。しかし、本研究で設計した2つの舞台は、舞台設定をうまくコントロールすることで、どのようなシナリオを生み出しやすくするかをコントロールすることで、その課題を克服することができる。舞台をデザインする(=コントロールする)ことで、既存のメディアからは見えてこなかった当事者たちの声が見えてきた。そのことはゴフマンのドラマツルギーを使うことにより、より明確に呈示することができる。それはゴフマン研究にとっても新しい視点を含んでいる。

また、本研究の対象である福島県浪江町避難者たちは、故郷喪失の危機に直面してい

る。彼らの語りは、離散の語り(diaspora)として、ポストコロニアル研究の枠組みとして捉えることができる。現代社会において、物語は常に支配的表象の壁があるため記憶定着を妨げている(Spivak,1988)。本研究では、語り手が複数になることや、物語が語り直されることで自己表現を促す自由な協働の場によって、支配的な語りや表象に回収されない多元的なライフストーリーを生成することができた。さらに、断片的な語りは、集合させることで新しい解釈や評価が生成する概念と一致した(集合知や Assamblage)。これは、スピヴァック(Spivak, 1988)による命題「サバルタンは語れない」に対する一つのアプローチとして貢献できるであろう。そして、ライフストーリー研究にも新たな知見として貢献できる。

第2節 今後の生成継承性の在り方

本研究は「ライフストーリーはどのようにすれば自発的に語られ、後世へ語り継がれるのか」について問うものであった。これらの実践結果から、今後の生成継承性の在り方について3点にまとめる。1つ目は「文化的実践としての生成継承性」、2つ目は「表現としての生成継承性」、そして3つ目は、「集合させる生成継承性」である。

提案①：文化的実践としての生成継承性

本研究に先立ち、小学生国語の国定教科書にも認定された絵本『稲むらの火⁵⁸』を手を取った。これは、1854年安政東海地震の実話が元となっている短編小説である。筋書きは次の通りである。

ある海辺の村の高台に名主の老人が、大きな揺れの後、海水が沖に向かって引いて行くのを見て津浪の襲来を予感した。そこで、彼は自宅の田んぼに積んであった大切に育てた米のついた稲むらに松明で火を放ち、火事だと思わせ、村人全員を高台に村人を集め、津波から救ったという物語である。

地震がくる直前に、村人たちが豊作を祝う祭の準備をしているという冒頭のエピソードから、稲むらは村人にとって非常に重要であったことがわかる。この実話を元にした、防災のための教訓話は紙芝居や学校教材など、今日まで物語として継承されている。

『稲むらの火』が教材として取り上げられた背景には、ラフカディオ・ハーンが1895年に発表した短編小説『The living god』が関係している。この短編のなかで、ハーンは名主儀兵衛を「五兵衛」と改め、湾を見下ろす高台に住む年老いた村の有力者とした。つまり、安政南海地震とは、異なる設定になっているが、この物語こそが『稲むらの火』

⁵⁸ 『津波！！命を救った稲むらの火』原作：小泉八雲 文・絵高村忠範

の原型である。

その後、文科省が国語の教材を全国に公募した所（1934年）、和歌山県で小学校の教員をしていた中井常蔵が、ハーンの『The living god』をもとに、教材用にまとめた「燃ゆる稲むら」と題し応募したところ、入選を果たした。『稲むらの火』は晴れて、国定教科書に登場する流れとなった。中井は、『The living god』に出会ったとき、故郷に語り伝えられているあの物語だと感動したという。中井が描いた『稲むらの火』は、村にとって貴重な資源であり一年の収穫でもある稲むらを燃やしてまで村人を救った五兵衛の物語であり、子供たちの心をとらえた教材になった。そして、2005年スマトラ沖大地震による大津波災害を受けて、『稲むらの火』が注目を集めたことから、防災まちづくりの教材として、復刻版の紙芝居が新しく作られ各地の小学校に配布された(伊藤, 2005)。

このように、『稲むらの火』は一つの実話を元に、時代時代で物語が語り直され、継承されてきている。さらに異なる媒体によって再生され、新たな意味を提供してくれる。これは、本研究で検証したやまだ(2007a)の社会的過程へリリースされる「解き放つ」行為に重なる。それと同時に、当事者の語り(原作)から離れ、再吟味され、新たな文化の作り手として変化させていく文化的実践とも重なる(佐伯, 1995:30)。

語りが動画作品に転換した過程を考えると、本研究で実践した memorytalk は文化的実践が行われる場である。この文化的実践によって物語が変化することで継承へとつながっていく。

協働の場によるインタビュー収録や memorytalk の実践から明らかになったように、語りを聞いた聞き手は再吟味し、新たな文化の作り手として世界に関わる文化的実践を行った(語り直しや作品化)。そして、それは介入(ファシリテーターとしての質問者や memorytalk という設計)なくして生成はなかったであろう。文化的実践を行う場を確保すること(コントロールすること)は設計者の重要な役目である。

以上のことから、収集した語りをそのまま保存することが継承ではない。文化的実践を経て、変化していくことで継承につながると考えられる。

提案②：表現する生成継承性

本研究では、語りづらい経験のライフストーリーは、協働の場に働く多元的な役割距離により生成されることが明らかになった。協働の場の設計により、聞き手も次の表現者になりうることで継承につながる連鎖性を育んでいる(実践①ではギャラリーで観覧する次の語り手と、実践②の参加者が他の作品を観覧することによって作品を制作する)。私たちは、日常生活で他者の語りを自分に引き寄せながら対話を続けている。多

元的なライフストーリーであるほど、語り手は他者のライフストーリーによって想起が促され生成に至るのである。

本研究における、協働の実践には「表現行為がもたらす2つの効果」が見られた。1つは「セラピーとしてのアート」が自己解放をもたらし、転換的な語りが可能になる。生きづらさを抱えた人々の自己表現は、新たな社会との関わりを生み出し、表現者に生きる力をよみがえらせるのである（藤澤, 2014）。実践①による事後アンケートによる質問「他の方のお話を聞いての感想と心境の変化はありましたか？」では、回答者16名中、共感したが7人、少し共感したが4名、今までと変わらないが5名、無かったが0人であった。前向きになった、または、やる気が芽生えたが5人、少し前向きになったが4人、今までと変わらないが6人、前向きになっていないが1人の回答が得られた。事後アンケートから、実践②では、memorytalkによって物語の作品化が行われ、生徒をはじめとする参加者たちは「自分にも制作できた」というポジティブで前向きな姿勢や、やる気が芽生えたことが確認できる（p117参照）。オーディエンスを前に自由に語りことやmemorytalkを用いて作品を作ることで、浪江町避難者たちが日々のストレスから解放され、少なからず心が癒されたことが確認できた。

2つ目は、「表現が表現衝動を刺激していく」という現象を、ひとつの継承性と捉えることができることである。実践①では、参加者達はユーモアやカタルシスを交え、自由に自己の経験を表現した。次の語り手となる聞き手は、その表現に感化され、同様に自由な語り直しが行われた。実践②では、ユニークなキャラクターを選び、セリフを考える過程が既に自己表現である。その作品を鑑賞した者は、他者の体験と自己の体験の差異を見だし、自己の体験を作品化する。memorytalkユーザーは投稿された作品を自分に引き寄せ、次に制作者となるユーザーは自らの経験を、断片的に作品化したり、ユーモアを交えた自由な表現で作品化する。物語を「またあの話か」というお決まりの型として捉えるのではなく、表現されたライフストーリーを閲覧することで、同じ体験をした聞き手は感化され、自らのストーリーを語った。この衝動は、生成継承性のうち継承性の部分を担っている。この連鎖の過程で、物語は表現された語りや作品によって変化する。この変化こそが自己表現への衝動である。

提案③：集合させる生成継承性

第7章で述べた通り、実践①②ともに、一カ所に参加者が集まり、情報を共有することで新たな意味付けが行われた。参加者たちは主体的な相互行為を行うことで、多元的な役割距離が創出された。このことから、さらなる語りの誘発が行われる。

現代社会では、故郷を離れる等による、人々の移動が頻繁に行われている。そのため

インターネットによるコミュニケーションに頼らざるを得ない現状でもある。実践①のように、対面で気心の知れた仲間と話すことができる機会は年に数回もないだろう。memorytalk は、どこにいてもインターネット上で集まりに参加することができる。多様な知を集合させることで（集合知）、新しい発見が生まれることは、クラウドソーシング⁵⁹や wikipedia などにおいて実証されている。

しかしながら、集合させることがパフォーマンスにどのように影響を与えるのか、過度な多様性によってコンフリクトが発生していないかなど、場のパフォーマンスがポジティブに作用するためには、マネジメントが必要とされる。本研究では、ファシリテーター役として著者が質問者になったり、ワークショップを開きライフストーリーの生成をマネジメントする形となった。高いパフォーマンスをあげるには、集合した際、監視する何らかのシステムも必要である。

第3節 今後の課題と展望

今日の震災デジタルアーカイブの主流は、画一化された防災への教訓を収集し、それを検索し閲覧することである。しかしながら、我々が目指すべき震災アーカイブとは、その土地に根付く多角的なライフストーリーの表出を活発にすることである。多角的なライフストーリーによって、その土地が語り手にとってどのような場所であったのかを知ることができるため、当事者以外の人、我がこととしてその重要な経験の語りを聞くことが可能になる。我がこととして聞くことで、当事者以外の人、さらに防災の教訓の重大さに気づかされる。

本研究では、2つの協働の場がライフストーリーの生成継承性にどのような影響を与えるのか検証したが、これらの実践から3つの展望とそれに付随する課題をまとめる。

本研究で設定した実践は、生成継承性の枠組みによる聞き手と語り手間の物語の生成についての検証であったが、協働の概念が語りを促し、自由に表現することでその聞き手も次の表現者になりうる。このような連鎖を生み出す点は、デジタルアーカイブなどの継承法を検討する上でも重要な知見である。今後、他分野にも活用できるだろう。しかし、本研究では、対象地域を福島県浪江町避難者に限定したため、浪江町避難者以外（他者）から見た場合、どうなるかについては不明である。今後は、浪江町避難者以外の第三者を交えた実践を重ね、生成されたライフストーリーをどのように永続的に継承するかについて検証する必要がある。

2つ目として、ソーシャルネットワークなどのバーチャルな場での語りは、他の人間

⁵⁹ インターネット上でアウトソーシングすること。

を傷つけることや、語りが他者を傷つけ得るという感覚が希薄化してしまうというネガティブな側面が問題視されている。しかし、本研究で用いた memorytalk は自由度の高さやコミュニケーションの選択可能性によって、リアルな他者の即時的反応を想定する必要がなく、語りが蓄積していけるなど、ポジティブな側面を検証することができた。このことから、CMC のポジティブな側面を抽出することで、ネガティブな側面の改善につながると考えられる。今後、ソーシャルメディアを有効に利用するために必要な知見として貢献できる。

一方で、本研究で使用した memorytalk は複雑でユーザーフレンドリーではないことがあげられる。本研究で行ったワークショップは、時間的な制限とネットワークによる一極集中により、想定していた「利用者が他の作品を鑑賞し、コメントを挿入する」という参加型・協働型の機能を活かした生成継承性を確認するまで至らなかった。本来、インターネット上のアプリケーションは各自の都合で利用できるという利点をもっているので、今後、ワークショップという形態をとらず、長期的に一個人のアクセスログを分析したり、memorytalk のユーザビリティの精度を上げながら、検証を重ねる必要がある。

3つ目として、作成された動画が memorytalk の機能（あらかじめ提示されているキャラクターリストや動作リストから動画を制作すること）に依存してしまう恐れがあることである。また、本研究では副次的関与と自己表現との関係性は必ずしも十分には明らかにされなかった。今後さらに映像分析を深め、検討する必要がある。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々にお世話になりました。本稿をまとめることができたのは、多くのご支援とご指導のお陰であり、ここに深く感謝の意を表します。

まず、東北大学大学院情報科学研究科メディア情報学講座の先生方、ならびに研究室院生やスタッフに謝意を表します。堀田龍也先生、窪俊一先生、森田直子先生、坂田邦子先生には数々のご指導や励ましを通して、私自身の至らなさを実感することができたことは、今後の努力の糧になるものであります。私が3年間で博士論文をまとめることが出来たのは、指導教官の堀田龍也先生、論文指導を頂いた坂田邦子先生や窪俊一先生による日頃のご指導のほか、本稿の構想についてアドバイスから文章の推敲まで辛抱強く付き合ったださったからに他なりません。何よりもメディア情報学講座に所属し、自由な発想で研究に取り組めるめぐまれた環境であったことに感謝した。論文執筆中には、相談に付き合っただいた研究仲間である院生の方々や、秘書の小野寺香絵さんには公私両面でお世話になり、皆様に、この場をお借りして、深くお礼を申し上げます。

同研究科社会政治情報学講座社会構想変動論の徳川直人先生には、まだ社会学初心者である私に、ゴフマンの相互行為概念を通して社会学の深さと魅力を常に示してくださいました。これは本研究で得られた最大の利益です。被災地をフィールドワークにしていたことから、様々な不安があった中、先生の柔軟なご指導を通し、何度も勇気づけられました。本稿のコアとなる動機づけをみだし、本稿を仕上げる事が出来たのは先生の丁寧なご指導とやさしい励ましがあってであります。分野外である私を「徳ゼミ」にお誘いいただいてから、先生や参加者の方々の温かなサポートによって、新たな知見や、視野を広めることで、常に知的刺激を与えていただきました。ゼミ参加者の一人でもあるゴフマン研究者の木村雅史先生には「役割概念」理論について丁寧にご指導いただき、ゴフマンの魅力と理論研究の楽しさを教えていただきました。memorytalkを用いたゴフマン解釈（第5章～7章）では文献についてご教示いただいた上で色々とヒントをいただきました。これからも先生方から受けたご指導をうまく活かせるように、社会学で得た新しい切り口で探求していきたい。本論文作成にあたり、審査委員として多くの助言をいただきました、小林一穂先生、堀田龍也先生、徳川直人先生、窪俊一先生、坂田邦子先生には深く感謝いたします。

また、memorytalk の開発過程では、東北大学大学院情報科学研究科コンテンツ学研究室の青木輝勝先生、同大学院情報科学研究科システム情報科学専攻情報ソフトウェア構成論の大堀淳先生と上野雄大先生、これら2つの研究室の院生(逢坂美冬、上西くるみ、Nguyen Thi Huyen Van)からなるプロジェクトチーム一同に多くのご支援やご指導を賜りました。突然持ちかけたプロジェクトアイデアに対し、根気よくご理解を頂きながら形にすることができたことは、貴重な体験として今後にも活かされます。途中、何度もあきらめようと思った時期もありましたが、入念に打ち合わせをする過程で、一丸となって開発を進めていただきました。皆様のご支援とご指導に感謝致します。特に青木先生には、遠方でワークショップを開催する際、膨大な数のパソコン機器を設置するため、研究室総出でお支援いただいた上、お会いするたびに叱咤激励をいただきました。本稿は memorytalk の開発なしでは書き上げることはできません。皆様に、この場をお借りして、感謝申し上げます。

そして、本研究でご協力いただいた福島県浪江町の方々には深く感謝申し上げます。辛い避難生活の中でも、いつも笑顔で接していただいた仮設住宅の皆様の度量とやさしさには私自身が勇気づけられました。そして、仮設校舎に間借りしている状況ながら、ワークショップを開催した福島県立浪江高校全生徒と鈴木先生や高木教頭先生方々にも、深く感謝申し上げます。研究と実践の狭間で様々な葛藤がありましたが、皆様のご理解とご支援のもと本研究を実践することが出来ました。今後これらの交流を大切にし、このご恩をいつか返せるように、精進して行きたいです。一刻も早い再建を願っております。

研究活動費においては、放送文化基金「放送文化基金助成」、メディア総合研究所「若手研究者研究助成金」ならびに、東北大学大学院情報科学研究科「学生プロジェクト」資金からのご支援を頂戴しました。大変感謝しております。

得てして自分の能力以上のことを実践しがちな私ではありますが、常に温かく見守り、辛抱強く支えてくださった家族や全ての方々に深い感謝の意を表して謝辞と致します。

2016年3月
佐々木加奈子

参考文献

- 朝日新聞特別報道部(2012)『プロメテウスの罫：明かされなかった福島原発事故の真実』学研
- 安藤映子（2013）「単身高齢者支援事例にみる参画型ソーシャルワークの可能性—解決志向アプローチの活用による協働と連携の促進」『社会福祉学』第54巻第2号 pp.83-93
- 石川博(2011)『集合知の作り方・活かし方—多様性とソーシャルメディアの視点から—』共立出版 pp96-177
- 伊藤和明（2005）『津波防災を考える—「稲むらの火」が語るもの』岩波ブックレット No.656 岩波書店
- 岩田若子（1988）「役割概念の再検討：E. Goffman における"役割距離"の含意」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』：社会学心理学教育学 No.28 pp.11- 21
- 大城真由美、我如古梓、三宅茜巳、仲本實、後藤忠彦（2013）「沖縄戦についてのデジタルアーカイブ教材の開発：オーラルヒストリーと地域資料等を用いて」『日本教育情報学会年会論文集』（29）pp. 460-461
- 岡本真(2012)「震災アーカイブの現状と課題」『情報知識学会誌』Vol.22, No.4 pp.308-315
- 岡本祐子、坂本清治、やまだようこ、森岡正芳（2013）「沖縄に学ぶ世代継承性とライフサイクル—沖縄の伝統文化を次世代教育にどう生かすか—」『準備委員会企画シンポジウム3』
- 恩田勝亘(1991)『原発に子孫の命は売れない—舩倉隆と棚塩原発反対同盟 23年の闘い』七つ森書館
- 小澤義雄（2004）「老年期における世代間継承の認識を伴う自己物語の構造」『発達心理学研究』第24巻第2号 pp.183-192

- 木村雅史 (2007) 「E.ゴフマンの相互行為分析の展開-『フレーム分析』における「括弧
いれ」概念の定義-」東北社会学会 社会学研究 第 81 号 pp.23-46
- 串崎幸代 (2005) 「E.H.Erikson のジェネラティビティに関する基礎的研究について：多
面的なジェネラティビティ尺度の開発を通じて」『心理臨床学研究』第 34 号 (2) pp.
197-208
- _____ (2008) 「女子大生における親の子育て経験の聞き取りについての一考察」
『千里金蘭大学千里金蘭大学紀要』生活科学部・人間社会学部 第 5 号 pp.61-67
- 小林多寿子 (1992) 「親密さと深さーコミュニケーション論から見たライフヒストリー」
『社会学評論』第 42 卷 第 4 号 pp.419-434
- 小林直毅 (2010) 「メディア表象の不可抗性とテレビ的イメージ」『社会志林』
法政大学社会学部学会 56 卷 pp.163~176
- 佐伯胖, 佐藤学、藤田英典編 (1995) 『文化的実践への参加としての学習』シリーズ学
びと文化①学びへの誘い』東京大学出版界 pp.30
- 坂田邦子 (2013) 「東日本大震災から考えるメディアとサバルタニティ」『マス・コミュニ
ケーション研究』日本マス・コミュニケーション学会 82 号 pp.68
- 坂本旬 (2008) 「『協働学習』とは何か」法政大学キャリアデザイン学会 pp.52-57
- 桜井厚 (2010) 『インタビューの聞き方』せりか書房
- _____ (2012) 『現代社会学ライブラリー7：ライフストーリー論』弘文堂
- 桜井厚・小林多寿子 (2005) 『ライフストーリー・インタビュー-質的研究入門』
せりか書房
- 佐藤崇 (2014) 「非日常が日常化した福島から何をどう伝えるべきか、自問が続く」
『ジャーナリズム』、朝日新聞社、no. 284, pp.57-64

寒川美穂 (1999) 「E.ゴッフマンの役割距離に関する研究」『教育学研究紀要』 中国四国教育学会 第 45 卷 第 1 号 pp. 323-327

高村忠範 (2013) 文・絵『津波！！命を救った稲むらの火』 原作：小泉八雲 汐文社

竹内一真 (2012) 「継承の伝承における生涯発達の視点からの先行研究の検討—generativity 研究に焦点を当てて—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』 第 58 号 pp. 383-395

_____ (2013) 「実践を通じた教育における伝承者による伝え方と世代間の語りの関係性—正統的周辺参加における十全的参加者による経験を伝えるということ—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』 第 59, pp. 625-737

田渕恵, 三浦麻子 (2014) 「高齢者の利他的行動としての『語り』に与える世代間相互作用の影響：実験現場を用いた検討」『発達心理学研究』 第 25 卷 第 3 号 pp.251-259

徳生葵・畑中(2011) 「キャラクター表現によるクロスメディア歴史教育コンテンツの提案」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』 第 58 卷 pp.142-142

中川恵里子 (2009) 「ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性」『生涯学習基盤経営』 第 34 号 pp.99-112

永村美奈、佐藤翔輔、柴山明寛、今村文彦、岩崎雅宏ら (2013) 「東日本大震災に関する記録・証言などの収集活動の現状と課題」『レコード・マネージメント』 No.64 pp.49-66

西山直子 (2010) 「世代間関係における Generativity の可能性—Narrative Approach の立場から—」『京都大学大学院教育学研究科紀要』 第 56 号 pp.345-357

芳賀正之 (2008) 「参加型・協働型の web サイト構築による美術教育の可能性—造形教育 wiki (アートと教育への眼差し事典) の実践と展開—」『美術教育学：美術科教育学会誌』 第 29 号 pp.409-417

深瀬祐子, 岡本祐子 (2012) 「高齢者の語りに基づく母親的人間との相互性の変容」
『発達心理学研究』第 23 巻 第 1 号 pp.55-65

藤澤三佳 (2014) 『生きづらさの自己表現-アートによってよみがえる「生」』晃洋書房

藤森立男, 矢守克也篇 (2012) 『復興と支援の災害心理学大震災から何を学ぶか』
福村出版

松浦雄介(2014) 「マルクス主義の文化論」井上俊編『全訂新版現代文化を学ぶ人のために』世界思想社 pp.249-250

丸毛美樹 (2014) 「プリーモ・レーヴィの表現するユーモア-科学者・アウシュヴィッツ
からの生還者・作家のケンタウロスとして-」『笑い学研究』第 21 号 pp.98-112

圓田浩二 (2001) 「カタルシスと知的創造のインタビュー-方法論的考察-」『社会学評論』第 52 号 第 1 巻 pp.102-117

安田祐子, やまだようこ (2008) 「不妊治療をやめる選択プロセスの語り-女性の生涯
発達の観点から-」『日本パーソナリティ心理学会』第 16 巻 第 3 号 pp.279-294

やまだようこ (2000a) 『人生を物語る 1-生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房

_____ (2000b) 「展望 人生を物語る事の意味-なぜライフストーリー研究か？」
『The Annual Report of Educational Psychology in Japan』 Vol.52, pp.212-214

_____ (2007a) 『やまだようこ著作集第 8 巻 喪失の語り-生成のライフストーリー』新曜社

_____編(2007b) 『質的心理学の方法—語りをきく-』新曜社

- Baudrillard, J.(1979) *La Societe de consommation Ses Mythes, Ses Structures* 今村仁司・塚原史訳(1995)『消費社会の神話と構造』紀伊国屋書店
- Duke, R.D.(1974) *Gaming the future language* 中村美枝子・市川新訳(2001)『ゲーミングシミュレーション：未来との対話』アスキー
- Erikson, E. (1950) *Childhood and Society* Norton & Co. 『幼年期と社会(中篇)個性の成立』草野榮三良譯、日本教文社
- _____ (1977) *Childhood and Society* Norton & Co. 『幼児期と社会』仁科弥生訳みすず書房
- _____ (1989) *The Life Cycle Completed* 『ライフサイクル、その完結』村瀬孝雄・混同邦夫訳 みすず書房 p73
- Goffman, E.(1959) *The Presentation of Self in Everyday Life* 石黒毅訳 (1974) 「ゴッフマンの社会学1『行為と演技-日常生活における自己提示』誠信書房
- _____ (1961) *Encounters* 佐藤毅・折橋徹彦訳 (1985) 「ゴッフマンの社会学2『出会い』誠信書房
- _____ (1963) *Behavior in Public Places* 丸木恵祐・本名信行訳(1980) 「ゴッフマンの社会学4『集まりの構造』誠信書房
- _____ (1974) *Frame Analysis:An Essay on the Organization of Experience* Northern University Press
- Gubrium, Jaber F. & James A. Holstein (2003) *Post Modern Senseibilities*, Gubrium & Holstein eds, *Postmodern Interviewing*, SAGE
- Healey, p. (2002) *Collaborative Planning-Shaping Places in Fragmaneted Societies*, Palgrave Macmillan
- Hoetzlein, R.C. (2012) *Visual Communication in Time of Crisis: The Fukushima Nuclear Accident* *Leonardo*, Vol. 45, No.2, pp. 113-118

- Joinson, A.(2003) Understanding the psychology of internet behavior:virtual worlds, real world 三浦麻子, 畦地真太郎, 田中敦訳(2004)『インターネットにおける行動と心理』北大路書房
- Kotre, J.(1984) *Outliving the self:Generativity and the interpretation of lives*. Baltimore, MD:Johns Hopkins University Press.
- _____ (1999) *Make it count: how to generate legacy that gives meaning to your life*, The free press.
- _____ (1995) *White Glove* 石山鈴子訳(1997)「記憶は嘘をつく」講談社, pp.245
- Labov, W. (1972) *Language in the Inner City* University of Pennsylvania Press
- Lubarsky, N.(1997) Rememberers and Rememberances: Fostering Connections with Intergenerational Interviewing, In Brabazon, K. and Disch, R.(eds.) *International Approaches in Aging*, The Haworth Press, pp143
- McAdams, DP., & de St. Aubin. Ed. (1992) A Theory of Generativity and Its Assessment through Self-report Behavioral Acts and Narrative Themes in Autobiography. *Journal of Personality and Society Psychology*, 62(6), pp.1003-1015
- McAdams, D.P.,de St. Aubin, E., &Logan, R.L.(1993) Generativity among young, midlife, and older adults. *Psychology and Aging*, 8 pp.221-230
- McAdams (2001) Generativity in Midlife. In Lachman, M.(Ed) *Handbook of Midlife Development*, New York:Wiley, pp.279-309
- McAdams, D.P., Reynolds, J., Lewis, M., Patten, A., & Bowman, PT. (2001) When Bad Things Turn Good and Good Things Turn Bad: Sequences of Redemption and Contamination in Life Narrative, and Their Relation to Psychosocial Adaptation in Midlife Adults and in Students. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, pp.472-483
- Mead,G.H. (1913) The Social Self, *The Journal of Philosophy, Psychology, and Scientific Methods*, 10, pp374-380 船津衛・徳川直人 編訳(1991)『社会的自我』恒星社厚生閣
- Morreall, J. (1983) *Taking Laughter Seriously* 森下伸也訳 (1995)『ユーモア社会を求めて笑いの人間学』新曜社

- Plath, D.W.(1985) *Long Engagement: maturity in modern Japan* 井上俊・杉野目康子訳(1985)
『日本人の生き方—現代における成熟のドラマ』岩波書店
- Raphael, B.(1986) *When Disaster Strikes- How indivisuals and Communities cope with
Catastrophe* ラファエル, G. 石丸正翻訳(1995)『災害の襲うとき：カタストフィの精神医学』みすず書房 pp21
- Rosenthal, G(2004). Biographical reseach, Seal, C. Gubrium & D. Silverman, *Qualitative
Research Practice*, Sage
- Sasaki, K., Sakurai, M.(2015) Voluntary isolation after the disaster, *Journal of Disaster
Research*, Vol.10, No.5 pp.687-692
- Shank, R.C. and Abelson,R.P.(1995) *Knowledge and Memory:The Real Story in advances in
social cognition*. Hilldale NJ
- Spivak, G.C. (1988) *Can the Subaltern Speak?* 上村忠男訳 (1998)
『サバルタンは語るることができるか』みすず書房
- Thompson, P. (2002) *The voice of the past:Oral History 3rd Edition*, 酒井順子訳『記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界』青葉書店
- Trinh T. Minh-ha (1989) *Woman, Native, Other writing Postcoloniality and Feminism* Indiana
University Press:Bloomington
- Yamada, Y.(2004) The Generativity Life Cycle Model: Integration of Japanese Folk Images and
Generativity, *The Generativity Society caring for future generations* Edited by Ed. De St.
Aubin, Dan P. McAdams, Tae-Chang Kim American Psychological Association;Washington,
DC pp.97-112
- Young, K.G. (1987) *Taleworlds and Storyrealms:The Phenomenology of Narrative*, Nijhoff

報告書等 出典順

総務省ガイドライン（2013）http://www.soumu.go.jp/main_content/000225069.pdf

浪江町役場運営ウェブサイト(<http://www.town.namie.fukushima.jp>)より

平成26年度浪江町住民意向調査（復興庁・福島県・浪江町共催）の調査結果出典。

平成25年度浪江町住民意向調査（復興庁・福島県・浪江町共催）の調査結果出典。

平成24年度浪江町住民意向調査（復興庁・福島県・浪江町共催）の調査結果出典

「国際人権ひろば」一般財団法人 アジア・太平洋人権情報センター，No.79 2008年
5月発行号

「青少年支援映像制作プログラム～ワークショップのためのガイドブック～」
NPO 法人湘南市民メディアネットワーク(2010)

Appendix A

1. クローズドキャプション解析
2. 浪江町に関するテレビ特集番組表
2011年3月～2014年3月
3. テレビ報道に関するアンケート質問表

<クローズドキャプション解析>

全国放送におけるクローズドキャプション内の“福島”や“被災地”（図1、2）の日別単語使用回数からも明らかであるように、年々被災地をとりあげる放送（特別番組、報道）は少なくなってきた。さらに、“浪江町”（図3）の日別単語使用回数では特集番組放送日や節目の3月11日などに顕著に回数が増えている。

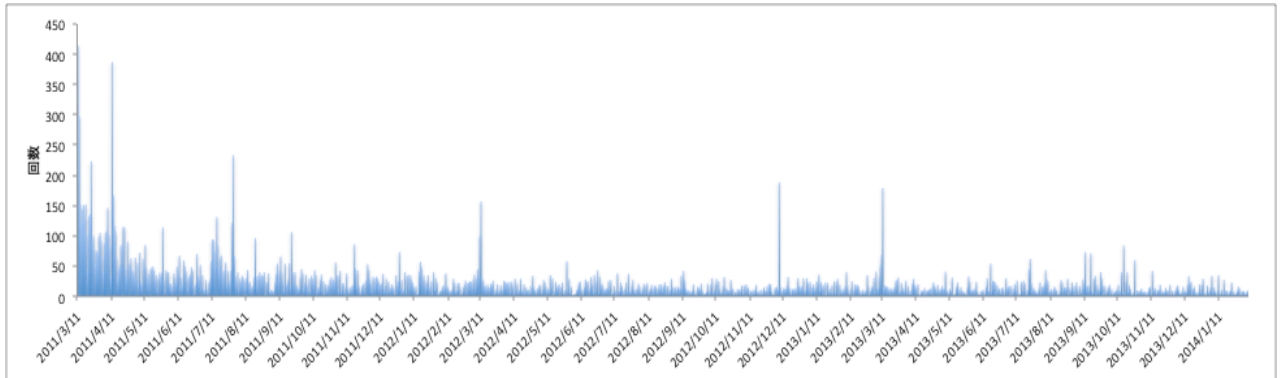


図1 全国放送における「福島」のクローズドキャプション日別単語使用回数

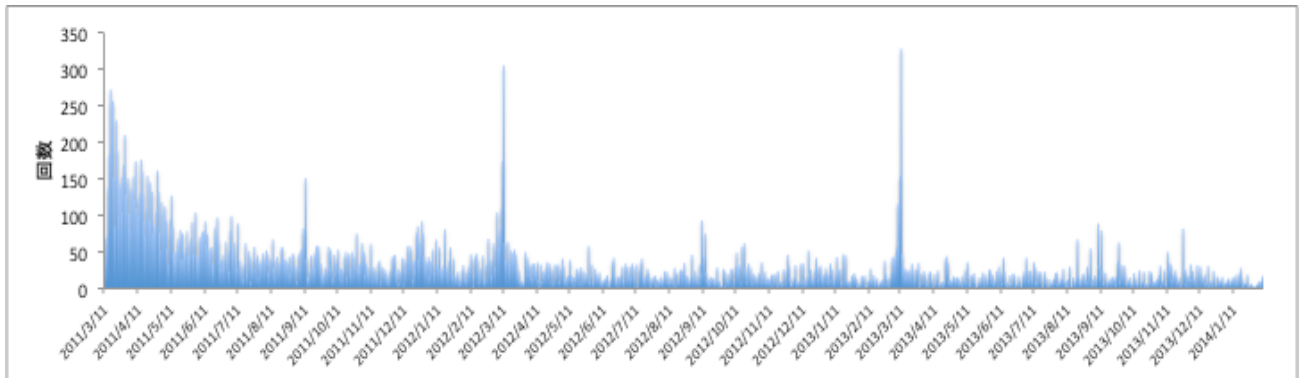


図2 全国放送における「被災地」のクローズドキャプション日別単語使用回数

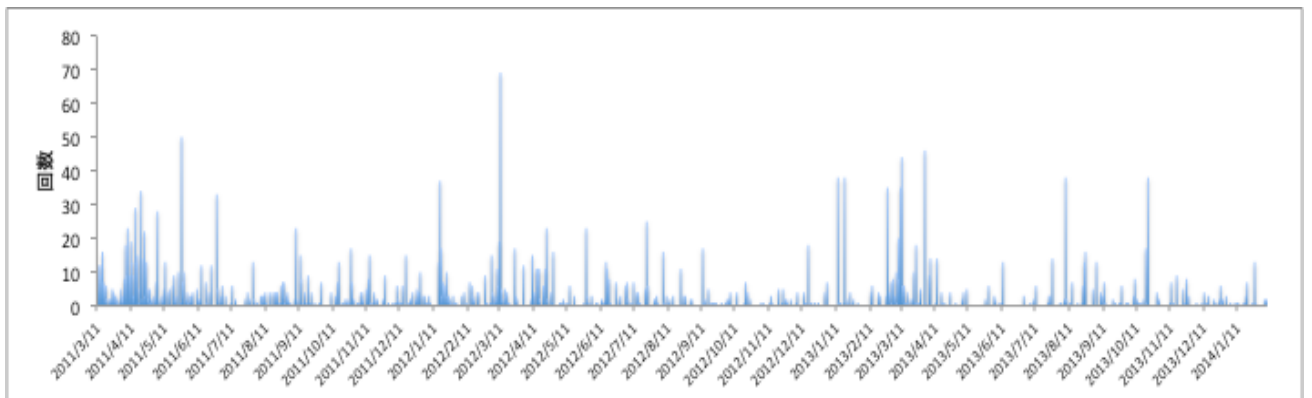


図3 全国放送における「浪江町」のクローズドキャプション日別単語使用回数

2011.4.7	NHK	クローズアップ現代 “町を失いたくない～福島・浪江町
2011.4.8	NHK	クローズアップ現代 “町は失われてしまうのか？”
2011.5.11	NHK	クローズアップ現代 “故郷はどうなるのか？福島・浪江原発事故に直面する人々”
2011.5.14	NHK	浪江町警戒区域～福島第一原発 20 キロ圏内の記録～
2011.6.13	NHK	クローズアップ現代 “原発事故3ヶ月 避難者達は今”
2011.7.30	TV 朝日	ドキュメンタリー宣言 “チェルノブイリの教訓” Part1
2011.8.6	TV 朝日	ドキュメンタリー宣言 “チェルノブイリの教訓” Part2
2011.9.7	NHK	クローズアップ現代 “町をどう存続させるか～岐路に経つ原発避難者達～
2011.11.27	日テレ	NNN ドキュメント “おとうの船 置き去りにされた 20 キロ圏内”
2012.1.15	フジTV	ザ・ノンフィクション “老人と放射能 FUKUSHIMA 第1章”
2012.1.22	フジTV	ザ・ノンフィクション “老人と放射能 FUKUSHIMA 第2章”
2012.3.11	TV 朝日	報道ステーション SUNDAY スペシャル 14時間震災特番内浪江町の闘い密着
2012.3.17	NHK	新日本紀行ふたたび「安波祭にこめた願い～福島浪江町～」
2012.3.24	NHK	NHK スペシャル “故郷か移住か原発避難者達の決断”
2012.4.22	NHK	NHK アーカイブス 新日本紀行がみつめた福島・浪江 故郷を追われた人々は今
2012.5.10	NHK	あの日わたしは～証言記録 東日本大震災～「浪江町山崎雅弘さん」
2012.6.7	NHK	あの日わたしは～証言記録 東日本大震災～「浪江町田代澄男さん・スミ子さん」
2012.7.20	NHK	あの日わたしは～証言記録 東日本大震災～「浪江町関根俊二さん」
2012.7.22	NHK	明日へ ふるさと未来を描こう～福島・浪江町～
2012.9.11	NHK	クローズアップ現代 “5年帰らない“宣言”の波紋 苦悩する原発避難民
2012.11.10	日テレ	ザ、鉄腕 Dash! Dash 村から秋便り
2012.12.16	NHK	明日へー支えあおうー証言記録 東日本大震災福島県浪江町～津波と原発事故
2013.3.1	NHK	あの日わたしは～証言記録 東日本大震災～浪江町 泉田文男
2013.3.8	BSNHK	BS1 スペシャル「波のむこう～浪江町の邦子おばさん～」
2013.6.8	フジTV	ふくしまてくてく大堀相馬焼き
2013.9.8	日テレ	24TV 富士登山中継スペシャル「福島県浪江町の幼なじみのこども達が挑んだ富士登山」
2013.9.19	NHK	あの日わたしは～証言記録 東日本大震災～「浪江町渡部邦子さん」
2013.10.9	NHK	あの日わたしは～証言記録 東日本大震災～「浪江町金井春子さん」
2013.10.19	NHK	目撃！日本列島「被ばくの不安をなくすために 福島浪江町の染色体検査」
2014.1.26	NHK	明日へー支えあおうー復興サポート「ふるさとの未来を描こう～福島・浪江町2～」
2014.2.26	NHK	クローズアップ現代「“よりどころ”はどこに？～原発避難から3年、浪江町の選択～」

浪江町に関するテレビ特集番組表（2011年3月～2014年3月）

Appendix B

1. インタビュー後のアンケート
2. NHK 震災デジタルアーカイブ証言逐語録
3. インタビュー収録 DVD パッケージ

インタビュー後のアンケート質問表(無記名)

■浪江の思い出を話したことで変化はありましたか？

心がすっきりした

はい 少し 今までと変わらない いいえ

前向きになった

はい 少し 今までと変わらない いいえ

以前より辛くなった

はい 少し 今までと変わらない いいえ

浪江町に帰りたい思いが強くなった

はい 少し 今までと変わらない いいえ

その他

■他の方のお話を聞いての感想と心境の変化はありましたか？

共感した

はい 少し 今までと変わらない いいえ

前向き、やる気が芽生えた

はい 少し 今までと変わらない いいえ

以前より辛くなった

はい 少し 今までと変わらない いいえ

浪江町に帰りたい思いが強くなった

はい 少し 今までと変わらない いいえ

その他

裏に続く

NHK 東日本震災アーカイブ～証言 Web ドキュメント～逐語録

(下線部はストーリー領域)

○氏名： 金井 春子 さん (63)

. 取材時期：

. 2013年4月26日

金井：「もう大津波が来ているぞ！」というのが聞こえているのよ。そして「何で行くんだよ！」というのが耳に入ったんです、「家に戻るんだよ！」というのが。私としては、お父さんがいるから迎えなくちゃいけないので、それで行こうとしたら、「そこに大津波が来ているんだぞ！」というのが聞こえたのよ。それが半端でなかった声だったので。

NA：福島県浪江町で暮らしていた金井春子さん。津波が来る直前、夫とともに警察官に助けられました。

NA：津波で14人が亡くなった浪江町の中浜（なかはま）地区。金井さんの自宅は、海から200メートルの場所にありました。

金井：これが、わが家なんです。

NA：外出先で車を運転中だった金井さんは、地震で家が崩れるのではないかと心配し、急いで戻りました。家には、病気で療養していた夫がいました。

金井：玄関開けて、そしたら夫が、ちょうどこの辺に寝てたんだと思うのね、この部屋に。そして「だめだ、早く」ってんで、「お父さん悪いけど、車置きに行ってくるから支度して」って。着替えも何も出すことできなかったのね、もう揺れがひどくて。

NA：金井さんは、落ちてくる瓦で、車が壊れると思い、大通りの駐車場に移動させます。そして、自宅に戻ろうとした時、遠くの車から叫び声が聞こえます。

金井：「もう大津波が来ているぞ！」というのが聞こえているのよ。そして「何で行くんだよ！」というのが耳に入ったんです、「家に戻るんだよ！」というのが。私としては、お父さんがいるから迎えなくちゃいけないので、それで行こうとしたら、「そこに大津波が来ているんだぞ！」というのが聞こえたのよ。それが半端でなかった声だったので。

NA：大声に驚いた金井さん。あわてて家に戻ると、夫をパジャマ姿のまま連れ出します。津波が迫っていることを教えてくれたのは、2人の警察官でした。金井さんたちは、警察官の車に乗り、避難を始めます。後ろからは津波が迫ってきました。

金井：もう後向いた時は、（津波が）防波堤を越えて来て、追いかけられたんですよ。もう、渦巻いて入って来たんで。本当に危機一髪でした。その後、もう少し先に行った時は、家が浮いて、どんどん家が浮いてきたんです。何て言ってもいいかわからなかったですよ。ぞっとします。血の気が引きますよ。

NA：車はぎりぎりのところで、津波を振り切ることができました。2人の警察官は、金井さんたちを高台に降ろした後、すぐに他の現場へと向かいました。

NA：福島市飯坂（いいざか）の仮設住宅。原発事故の影響で地元には帰れず、金井さん夫婦の避難生活は、震災発生から2年以上続いています。金井さんたちは、あの時、助けてもらった警察官にひと言のお礼も言えなかったことが、ずっと心残りでした。

金井：やっぱり「ありがとう」という言葉が言いたかったですよ。一目でも会えて、ひと言でも言いたかったの。

NA：平成25年2月、金井さんは、命の恩人である、箭内（やない）さんと小路（しょうじ）さん、2人の警察官と再会することができました。

金井：あの津波の、大津波が流れてくる時、私たちは自分のことしか考えてなかったですよ。でもね、箭内さんと小路さんが、もう必死で叫んでる。ありがとうございます。

金井：皆さんに助けてもらった命だから。これからどこかで災害があった時、自分は少しでもいいから、お手伝いできればと思うけど、年が年だから、それもかなわないかもしれないけど。そう思うしかないね。

○渡部 邦子さん（51）

.美容室経営

.2013年3月15日

渡部：おまわりさんが（原発事故の）2日目に、すごい勢いで登っていったのは記憶にありますね。何かサイレン鳴らして、救急車とか、それも防護服着て。「中に入れ、何やっているんだ」みたいな感じで言われて。「ええっ」みたいな緊迫感が走りました。

NA：福島県浪江町（なみえまち）で、美容室を経営していた渡部邦子さん。原発事故の知らせを聞き、車で津島（つしま）地区に避難しました。

NA：渡部さんの自宅兼美容室は、東京電力福島第一原発から、およそ10キロ離れた場所にありました。あの日、渡部さんは、外出先から帰宅した時に、大きな揺れに襲われます。

渡部：揺れが来て、止まるだろうと思ったら、どんどん揺れて、（家から）出られなかったですね。おっかなくって。

NA：幸い携帯電話がつながり、家族の無事が確認できました。近所の人の話から、原発に異常が発生していたことを知りましたが、この日はそれほど心配していませんでした。

渡部：恐怖心がなかったというか、「大丈夫だべ。東電は大丈夫だよ」みたいな感じで、安心していたんですけど。

NA：しかし、原発は深刻な事態に陥ります。3月12日の早朝、10キロ圏内の住民に対して、避難指示が出されます。

渡部：その直線で10キロというのが、自分の家が何キロかわからなくて。でも、もう一回（防災無線の）放送があったので、これはただごとではないと思って。犬も乗せて、「とにかく逃げっぺ」ということで逃げました。

NA：渡部さんは、原発から30キロ近く離れた津島地区の学校に向かいます。しかし、体育館や教室は、既に多くの避難者で埋め尽くされていました。さらにペットもいたため、しかたなくグラウンドで過ごすことにします。

渡部：寒かったんですよ。浪江は雪がなくても、津島は雪で。エンジンをかけておくと、今度はガソリンがなくなるので、娘とくっついたり、犬とくっついたりして。「帰りたい」って娘にも言われて。でも帰れないし。

NA：この日の午後、1号機で爆発が発生。避難指示は20キロ圏内に広がります。その後も相次いで爆発が起こり、大量の放射性物質が、雪や雨とともに津島地区に降り注ぎました。

渡部：津島は（原発から）30キロだから、絶対に安心だと頭に植えつけられていたというか。みんな外で散歩したりとか、消防団の人も外で煮炊きをして食べていたと思います。何で早くそれが教えられなかったのかなと。（避難所に）あんなにいっぱいいて、津島の人たちも畑をやっていたりしていて。

NA：町が、隣の二本松市へ避難するよう呼びかけたのは、最初の爆発から3日後の15日になってからでした。

NA：美容室は1年半にわたって休業。渡部さんは、東京や福島市で避難生活を送っていました。その時、多くのお客さんから美容室を再開してほしいという電話がありました。渡部さんは、南相馬市の原町区（はらまちく）で、再び店を開きました。

渡部：原町だったら、一時帰宅とか何かで浪江の人が来てくれるとか、自分自身も土地勘がわかるとか。あとはやっぱり原町の人。「浪江の人だから応援したい」って。その言葉が、何かすごい元気をもらいますよね。

○山崎 雅弘 さん (50)

. 高校 教頭

○吉田 洋 さん (54)

. 高校 分校長

山崎：いよいよ原発がまずい、というような言い方だったと思うんですね。その時に、これはちょっとまずいんじゃないかということ、それまでテレビで映し出していた爆発以上のことが起こるのかな、というふうに考えたときには、非常に不安でしたね。ある意味、修羅場だったかもしれないですね。

NA：福島県立浪江高校の教頭、山崎雅弘さん。

浪江高校の分校・津島校に設けられた避難所の運営にあたりました。

NA：平成23年3月11日、山崎さんは、津波への対応や生徒の安否確認をして、高校近くの自宅に帰りました。翌朝、外から聞こえる大きな音で目が覚めました。

山崎：町の広報車で、まず避難しろという声が聞こえたものですから、起きて聞くと、津島の方に避難をするということを町で呼びかけていました。

NA：3月12日の早朝、原発に異常が起きているとして、国は避難指示の範囲を、前日の半径3キロから10キロに拡大しました。

NA：山崎さんは、県の教育委員会からの指示を受け、分校の津島校に向かいます。ここは、原発からは28キロほど離れていました。

山崎：津島に向かうときはですね、あの方面に一本道なものですから、もう大渋滞ですね。ですから本当に進まなくて、まあ焦りっていうんですか。

NA：学校には、すでに多くの住民たちがつめかけていました。

分校に着いた山崎さんは、この時、自分も含めて多くの人たちが、状況を把握していなかったといいます。

山崎：みんなそれぞれにガヤガヤして、何があったんだろうって、真相を知らないまま逃げてきているっていうのが正直でしたよね。そんな着のみ着のままでも何日もいるという形ではないので、まずはとにかく来たんだと。私と同じだと思います。取りあえず1回避難して、すぐ戻れるんだという感じだったと思いますよ、最初は。

NA：避難先となった津島校の分校長、吉田洋さんです。

責任者として、山崎さんらと共に、避難所の運営に当たりました。当初は、時間がたつにつれて増えていく避難住民の対応に追われました。

吉田：全部で1,200人ぐらいいはいたと思います。まず、避難されてきた方が入る場所っていうんですか、その部屋を確保しなくちゃいけないということで、普通教室とか特別教室とか体育館とか、全部開放しまして。最後には、廊下にも毛布を敷いて、段ボールを敷いたりしてやりましたが、何とか。

NA：午後3時36分、1号機が爆発。

避難指示の範囲が、津島校のすぐ近くの、半径20キロ圏内まで拡大されました。

NA：情報は、テレビとラジオに限られていました。この場所にとどまるべきかどうか、役場からの連絡はなく、住民たちに不安が広がっていました。

山崎：体育館にラジオを流せることが分かりまして、ラジオをつけて、皆さんには、やはり情報を流さないとまずいだろうということで、ラジオをつけて、まず情報を流しました。あとは、テレビを外に向けて皆さんに見れるような状況にもしました。そこに皆さん集まって。あとは、電話が時々通じる。それから公衆電話が長蛇の列になって、やはりいろいろな知り合いの方と連絡を取りつつ、いたわけですね。電話口ではやはり、すぐに危険を察知している方も、いっぱいいらっしやいましたので。そこからもう、遠くに出ていく方もやっぱりいらっしやいましたね。

NA：午後3時36分、1号機が爆発。避難指示の範囲が、津島校のすぐ近くの、半径20キロ圏内まで拡大されました。

吉田：いろいろなところからの情報を得て、もう津島は危ないのかな、っていう判断をした方もいらっしやったと思うんですけど。急にワッと、パニック状態にはならないようにはしていたんですが、徐々には広がっていったかとは思いますが。

NA：当時、山崎さんたちが書き記していた日誌です。

12日に1号機、14日に3号機が水素爆発していました。

山崎：爆発が途中であったのも、テレビで見たんですけれども。当初1200人ぐらいいた人たちが、車のガソリンのある人は、どんどん逃げて、どんどん減っていくわけですね。最初の爆発でも、何百人単位でドッとなくなる。

テレビに釘付けになってテレビを見ている余裕も、そんなに実はなくて、いろいろ動き回ったりしている中で、本当にこの場所でいいのか、ということは考えましたね。できるならば、遠くへ逃げなくちゃってという思いは、自分自身もありましたね。

NA：事故発生から4日目の、15日午前3時ごろ、突然役場の職員が学校を訪れます。住民を町の外へ避難させる案が打診されました。国から何の情報もない中での、町長の判断でした。

山崎：役場の方がいらして、消防団の代表と一緒に、学校側と3者で協議をしたんです。その時に、最初に役場の方が、いよいよ原発がまずい、というような言い方だったと思うんですね。その時に、これはちょっとまずいんじゃないか、ということ、それまでテレビで映し出していた爆発以上のことが起こるのかな、というふうに考えたときには、非常にこう、不安でした。自分自身もですけども、そこに人がまだいっぱいいましたから、この人たちどうすればいいんだろう、っていうのがありまして。

全員うまく避難させられるのか。そういうことについては、自信がありませんでしたので。

NA：町はバスを手配し、隣の二本松市などに住民を避難させました。

午前6時ごろには、2号機が損傷、4号機が水素爆発するという事態になりました。

NA：午後5時過ぎ、すべての住民が避難したのを見届け、2人は分校に鍵をかけました。

NA：津島校の周辺では、3月12日から2か月ほどで、国が避難の目安としている、年間の放射線量に達していたと推定されています。

NA：放射線の影響を考えると、当時、住民たちが4日間にわたって避難所にとどまっていたことが正しかったのか、2人は今も複雑な気持ちを抱えています。

吉田：とにかく、言葉で表せられないような、大変な4日間だったかなっていう気がします。

まあ出来れば、もっと早く、そのような情報を伝えてほしかったなっていう気持ちは正直ありますね。

山崎：途中で自分も、もしかしたら自分も死ぬのかもしれない、っていう瞬間的なものは、何かあったような気がするんですね。

もっと知れたはずの情報っていうのはあったのかな、って思うときはありますね、やはり。あの場所が、今になって本当に（放射線量が）高かったっていうふうに言われるわけですけどね。住民の方も、皆さんあそこに避難していた方は思っているでしょうけれども、もう少し遠くに逃げられたんじゃないかとかね。そういう気持ちがあるのは、当たり前じゃないでしょうか。自分自身もそう思う時があります、やっぱり。

○泉田 文男 さん (68)

・泉田 幸子 さん (68)

・場所： 福島県浪江町

・番組名： あの日 わたしは

・取材時期： 2012年11月22日

文男：これが俺の車なんだよ、軽トラック。この車で逃げてきた。

（津波は）一瞬のあれだもん、ドーンと来るんだもの。じわっと上がってくるんじゃない、ドーンと。ここからずっと流された。母親が向こうまで。

NA：福島県浪江町に住んでいた泉田文男さん。母親と2人で高台に避難する途中、津波に流されました。

文男：これが俺の車なんだよ、軽トラック。この車で逃げてきた。

（津波は）一瞬のあれだもん、ドーンと来るんだもの。じわっと上がってくるんじゃない、ドーンと。ここからずっと流された。母親が向こうまで。

NA：福島県浪江町に住んでいた泉田文男さん。母親と2人で高台に避難する途中、津波に流されました。

文男：あれが原発。だいたいこの辺は、（原発から）3~4キロじゃないかな。

NA：原発事故によって、立ち入り禁止の状態が続いている浪江町。自分が暮らしていた場所がどうなっているのか確かめたい。この日、町の許可を得て、泉田さんと妻の幸

子さんは、避難先の群馬県から一時帰宅しました。

幸子：ここが玄関でした。

NA：泉田さんの自宅は、海のすぐ近くにありました。

地震に襲われたとき、妻の幸子さんは出かけていました。隣町で農作業をしていた泉田さんは、急いで自宅に戻ると、92歳の母・キヨイさんを車に乗せて高台へと避難します。

文男：あそこまで車でいった。

NA：海岸から2キロほど離れた高台のふもとに着いた泉田さん。車を降りたところで、居合わせた近所の人たちと立ち話をします。その時、津波が襲ってきました。

文男：（津波は）一瞬のあれだもん、ドーンと来るんだもの。じわっと上がってくるんじゃない、ドーンと。

NA：とっさに母親の手を引いて、高台を登ろうとします。しかし、津波は一瞬で2人を飲み込みます。泉田さんは、運よく木をつかむことができましたが、津波が引いたとき、母親の姿は消えていました。

文男：手が離れちゃって、どうしようもなかったからな。これがやっぱりな。少し10分ぐらい早く山に上がっていれば、何とかあったのかな、なんて思ったりしたり。

NA：夜になって、ようやく警察官に救助されたとき、泉田さんは、自力では動けない状態でした。

NA：妻の幸子さんは、外出先で無事避難していました。4日後、2人は再会することができました。

NA：一方、3月12日に東京電力福島第一原発1号機が水素爆発。浪江町を含む10キロ圏内の住民に避難指示が出されます。

NA：消防や警察も撤退し、捜索は打ち切られてしまいます。津波で流された行方不明者は、がれきの中で放置されました。

NA：一斉捜索が始まったのは、4月14日。震災発生から1か月以上が過ぎていました。

文男：母親が見つかったのは、だいたいこの辺。田んぼだった所。

NA：母・キヨイさんの遺体が見つかったのは、震災発生から2か月近くたってからの

ことでした。

幸子：「目に見えない放射能があつて、誰も入れない」と言われたら、「入って、捜してきて」とは言えないもんね。頼めないね。自分も行けないし。

文男：1～2 か月も放置しておかれたというのは、やっぱり悔しいわな。

○関根 俊二 さん

- ・ 医師
- ・ 場所： 福島県浪江町
- ・ 番組名： あの日 わたしは

取材時期： 2012年3月5日

関根：何の情報も入ってこないわけですよ。放射能のことに関してのね。

一般の方の、避難していた方の中には、子どもさんとかがいっぱいいたわけですよ。そういう人たちはこれから、どのぐらい被ばくしたんだろうということ、非常に心配しましたし、東京電力と国に対してね、何をやっているんだと思いましたよ。

NA：関根俊二さん。現在、福島県二本松市にある仮設住宅の診療所に勤務しています。震災発生後、関根さんは、当時勤務していた浪江町の津島診療所で、原発事故から避難してきた人たちの診察にあたりました。

関根：何の情報も入ってこないわけですよ。放射能のことに関してのね。

一般の方の、避難していた方の中には、子どもさんとかがいっぱいいたわけですよ。そういう人たちはこれから、どのぐらい被ばくしたんだろうということ、非常に心配しましたし、東京電力と国に対してね、何をやっているんだと思いましたよ。

NA：診療所があった津島地区は、町の西部にあります。

震災当日、津島診療所では、棚から落ちてきた物が床に散乱しましたが、関根さんの他、職員6人は全員無事でした。

関根：棚とか何からも、いろんなものが落っこちたりしたんですけれども、幸いに建物そのものはね、全く壊れなくて。で、地震が収まってから、ある程度片づけものをして、また診察が出来た状態でしたね。

NA：翌日の（3月）12日、診療所に多くの人たちが詰めかけました。

何も持たないで津波から避難してきた人たちが、薬を求めてやって来たのです。

関根：薬を求めて患者さんが黒山の人ばかりだから、診療所開けないわけにいかないの
で開けますから、先生、来てくださってというわけで、呼び出されて、診療所に帰った
んですね。そうしたら本当にね、もう診療所の周りもう、人でいっぱいであふれてまし
た。着のみ着のまま来ましたから、お薬も何も持たないで、おそらくお家に置いてお
いたお薬なんかも流されちゃったから、お薬を求めて来たということですよ。普通ね、
津島の診療所には1日35人、多くて40人ぐらいしか来ないところに、1日目は140人ぐら
い来たんでしょかね。次の日は330~340人。そういう状況ですから、もうあっという
間に、診療所の在庫の薬がなくなりました。

NA：関根さんは、避難してきた医師の助けも借りながら診察にあたりました。

関根：とにかく薬さえもらえればいいからというような状況で、具合が悪くてどうにも
ならないって言う人は、最初はいなかったですね。それが、日を迫うごとに、結局あ
いう体育館とか、まだ3月の寒いときですからね。雪も降っていましたから、寒いとこ
ろに結局避難して押し込められた人たちが、ご高齢の方はだんだん具合が悪くなってき
て、病院に搬送しなくちゃならないような状態の人たちも出てきたということですよ。

NA：人工透析など、診療所では対応できない患者も多くいました。

関根さんは、電話で受け入れ先を探しました。

関根：一番困ったのは、結局、透析をしている患者さんね。人工透析をやっている患者
さんですけど、その人たちがやれなくなって、それでそっちこち郡山とかですね、福島、
二本松と連絡をしたんですけど、どこもいっぱいだめだということ。結局、県内で
受け入れられない人たちは、みんな県外にも搬送してもらいましたから。こういう被害
に遭ったときには、こういう透析患者さんたちは、どここの病院に運ぶとか、そこが
だめだったらどこどこに運ぶとかですね。で、県内の透析するところがだめだったら、
もう県外のどこどこに收容してやってもらおうとか、そういう計画が全く出来ていない
ですよ。ですから、もうこちらとしては、紹介する場合には、手当たり次第、人工透
析やっていると手当たり次第、電話を掛けまくったんですが、それがですね、だ
んだんつながらないんですよ、電話が。ええ。

いやもう本当にパニック状態ですね。だから、まあ我々自身よりも、特に真剣なのは、
患者さん自身ですよ。だって、今まで2日に1回ずつ透析しなくちゃならなかった方が、
これから見通しが付かなくなったわけですから。それはもうね、患者さん自身は、相当
深刻な気持ちでいたと思いますよ。命にかかわりますからね。うん。

NA：3月12日は、福島第一原発の1号機で爆発が起こり、原発から20キロ圏外の津島地区には、多くの人たちが避難してきていたのです。

原発事故が起きていたにも関わらず、津島地区では、住民の避難に関する指示はありませんでした。

関根：結局、何の情報も入りませんから。原発、1号機が12日に爆発して、14日に3号機が爆発しても、何の情報も入ってこないわけですよ。放射能のことに関してのね。ですから、そこに避難している人たち、原発から大体28kmぐらい離れていますから、何のあれもなくね。みんな普通に避難所でくつろいでいたり、散歩したり表に出たりとかね、そういうのやっていましたよ、みんな。ただ、一つだけ不思議に思ったのは、自衛隊員とか警察官がそこに、津島地区に入ってくる人たちは、すべて防護服を着て、完全装備で入ってきていたと、いうことはね、不思議に思っていたんですね。何であんなのを着て入らなくちゃいけないのかな。着てこなきゃいけないのかなって感じでは見ていたんですね。

誰も危機感を感じていなかったですよ、その放射能の汚染に関しての。我々も全くそんなことは感じなくて、部屋の中でね、診察していただけですから。全くそのことに関してはね、あまり危機感はなかったですよ。

NA：町が住民に、隣の二本松市へ避難するよう呼びかけたのは、震災から5日目の15日になってからでした。

この日の午前6時ごろには、4号機で爆発、2号機も損傷しました。

関根さんも、この日、最後の患者を送り出したあと、避難しました。

NA：関根さんら、レントゲン撮影に関わる医師は、事故の前から、被ばく量を測るバッジをつけ、毎月チェックをしていました。

震災から1か月をすぎた4月下旬、関根さんは、そのバッジで、自身が被ばくしていたことを知ります。

1号機が爆発した3月12日からの4日間で、0.8ミリシーベルトを記録していました。一般の人の年間許容量の目安とされる、1ミリシーベルトに迫っていたのです。

関根：あの当時は、すごく放射能の汚染がすごかったんだっていうのが分かったのは、このガラスバッジですよ。これ我々医療関係者は、結局レントゲンの機械なんかいじる人は、みんなこれ付けているんですけど、これは今まで一度だってね、カウントされたことがないんですよ。15年間私あそこにいましてけど。それが1か月に1回これ提出して検査してもらうんですけど、4月のね、20日前後にこれが帰ってきたときに、3月分の線量計が800マイクロシーベルト感知したという。それで初めてびっくりしたんですよ。ええ、やっぱりあの4日間の時はすごかったんだなということですよ。

津島にいた時の4日間は、相当放射能の汚染があったんだと。だから警察官とか自衛隊の方があそこに入ってくる人たちは、みんな防護服を着ているんだっていうことは、その時初めて納得したということですね。

NA：関根さんは、原発事故による放射線の情報が伝えられなかったことに、憤りを感じています。

関根：道路に並んでいる人たちは、普通の格好で道路に並んでいたわけですから。だから、我々部屋の中で診察している以上に、放射能を浴びているはずなんですよね。だからもうね、本当に正直言って、この被ばくしたということを感じたときには、やっぱり東京電力と国に対して、本当に怒りを覚えていますね。全く何をやっているんだということ、ずっと思っていましたね。ですから、内部被ばくの状態を早く検査しなくちゃだめだなんて思いました、その時はね。一般の方のね、避難していた方の中には、子どもさんとか何かがいっぱいいたわけですよね。そういう人たちは、どのぐらい被ばくしたんだろうということで、非常に心配しましたし。

ちゃんと早く知らせてもらえれば、あそこに、汚染地区にとどまる必要もないし、そこに最初から分かっていたら、そこに避難しないはずなんですよね。どんな手段を採ってもいいから、早く知らせてほしかったということですね。

○今野 義人 さん (67)

- ・ 区長
- ・ 田代 澄男 さん (65)
- ・ 田代 スミ子 さん (69)
- ・ 場所： 福島県浪江町
- ・ 番組名： あの日 わたしは

取材時期： 2012年1月21日

今野：線量計っていうのかな。何ていうのか。音を立ててピカピカ、ピーピー、ピーピーって音を立てて、来たんですよね。ここも危険だから早く逃げた方がいいよっていうふうに、全然自分たちの体には何も害がないから、全然痛くもかゆくもなかったからね、大丈夫なのかなと思っていただけだね。

NA：福島県浪江町（なみえまち）、赤宇木（あこうぎ）地区の区長、今野義人（このよしと）さんです。

原発事故後に、放射線の危険性が分からないまま、地区の集会所で避難所の運営にあたりました。

NA：福島県桑折町（こおりまち）の仮設住宅で暮らす、田代澄男さんとスミ子さん夫婦。

放射線量が高い浪江町・赤宇木地区から2週間避難することができませんでした。

澄男：近いうちにどこかに避難しろって言われるだろうから、それまで待っているしかないんだなということ。

スミ子：誰か来てね、田代さんも行こうって言うてくれればいいけど、そんなこと言うてくれる人、誰もいなかったもの。

NA：今も高い放射線量が計測されている浪江町赤宇木（あこうぎ）地区です。

今野：ここが集会所ですね。

NA：この集会所に、原発事故の直後から2週間以上にわたって、10人以上の人々が生活していました。町の避難呼びかけ後も、様々な事情で残った人たちでした。

NA：平成23年3月12日、東京電力福島第一原子力発電所1号機で水素爆発が起こります。

NA：福島第一原発から25キロ離れた赤宇木地区。山あいの小さな集落は、事故の直後、原発に近い町の中心部から避難してくる人たちでごった返していました。

今野義人さんは、避難してくる人たちのために、炊き出しや毛布の準備などに追われていました。

今野：150～160人ぐらいかな。入ったらいっぱいになるぐらいだから、中に入れない人は表で車の中にいたりしていたんだよな。

NA：今野さんがつけていたノートです。当初は、放射線の影響など考えてもいませんでした。食料や物資を融通し合って生活を続けていました。

今野：津島までは飛んでこないっていうふうなみんな意識があったんだね。津島は大丈夫だっていうことで。だから、あそこの10km、20km範囲内ぐらいがだめになって、津島は大丈夫じゃないかなっていうふうな、気持ちはあったね。

NA：3月14日、今度は3号機で水素爆発が起こります。

その日の夕方、警察官が今野さんたちの元を訪れました。

今野：お巡りさんがね、パトカーで来て、白装束でね、乗ってきたんですよ。
線量計っていうのかな。何ていうのか。音を立ててピカピカ、ピーピー、ピーピーって音を立てて、来たんですよ。ここも危険だから早く逃げた方がいいよっていうね。
NA：しかし、今野さんたちは、逃げなければいけないという切迫感を感じなかったといえます。

今野：さほど危険だっという感覚はなかったような気がしたね。ただ、お巡りさんの支度を見て、ずいぶんオーバーなのかなって感じはしたけどね。でもみんながこの中で平気で、マスクもしないで台所をやっていたり、まったりしていたからね。
全然自分たちの体には何も害がないから、全然痛くもかゆくもなかったからね、大丈夫なのかなと思っていたんだけどね。

NA：翌日15日の午前6時ごろには、4号機で水素爆発。

また、2号機の損傷も明らかになりました。

その日、町から今野さんたち区長に集まるよう指示がありました。

そこで、町独自の判断で住民に避難を呼びかけると知らされました。

今野：(津島)支所の狭いところだったけど、町役場の職員の人たちと町長さんはじめ、みんなでしたんですよ。そこの中で我々8人、区長が8人集まって、こういうふうになったいきさつとかを説明してもらって。だから逃げなくちゃいけないから、ここも危険だからっていうふうなことで、ほかから指示があったとか何かとは言わなくて、町独自の考え方で逃げようということだったんですね。じゃあどうしようかということに相談したならば、文書だったらば、いなくてもポストに入れておけば分かるはずだからっていうことで、とりあえずプリントして一軒一軒回って置いて歩きましょうっていうふうなことになったんだよ軒一軒回って置いて歩きましょうっていうふうなことになったんだよね。

NA：今野さんは、地区を一軒一軒回って、避難を呼びかける文書を配りました。

ところが、集会所に残っている人の中には、遠くに避難したくないという人たちもいました。ペットを家に残しているなどの理由からでした。今野さんは判断に迷いました。なぜ避難するのか。町からも具体的な放射線量の説明はなかったからです。

今野：すぐに直ちについていうか、影響がないっていうことがあったし。絶対危険だからだめだよと言われれば、あまり強くもだめだって言うことが出来ただけど、そういう

国の方針が、屋内待避ですよ。だったから、大丈夫かなということで、無理にも言えなかったし。強く出ていけとも言えなかったからね。

NA：結局、集会所の鍵は、残った人たちに託されました。

今野さんは、集めた食料を集会所に残して、地区を離れました。

NA：赤字木地区では、放射線量の具体的な情報が知らされないまま、10人以上が残りしました。この中には、避難したいと思いつつも、結果的に取り残された人もいました。

NA：田代澄男さんと妻のスミ子さんです。

田代さん夫婦は、地震の翌日、原発に近い地区から赤字木地区に避難してきました。妻のスミ子さんは足が不自由なため、ほかの人に迷惑がかかると思い、2人は集会所ではなく、車の中ですごしていました。

澄男：暖まったら切って、そしてまた寒くなったらエンジンを掛けて。その繰り返しだったですよ。日中でも毛布ここに掛けて、そしてこうやって2人で話をしていましたよ。

NA：車のガソリンは、暖房のため少なくなり、移動することはできませんでした。

NA：15日、田代さんも、町が避難を呼びかけていることを知りました。

しかし、スミ子さんをバスに乗せるには、手助けが必要で、迷惑をかけるのではないかとためらっていました。

すると周りから強く避難を勧められることもなく、そのまま地区に残されてしまいました。

スミ子：頼るっていても、みんな本当に自分が自分がついてバスに乗るぐらいだからね。

澄男：その時に自分も、人をそんなに頼り切るようなことはしてはいけないんだって。本当はみんな避難したかったですよ。本当にバスの運転手とか知っている人が、行くよって。いや、俺、実は行きたいんですよ。でもうちのやつが。ああ、そうなんだってということで。だから俺は、いずれは近いうちにどこかに避難しろって言われるだろうから、それまで待っているしかないんだってということ。

NA：田代さん夫婦は、車の中や近くの体育館で過ごしていました。

訪ねてきた自衛隊や消防の隊員からは、強く避難を勧められることはありませんでした。

スミ子：車はこうつかまって、それでこういう状態だね、ずっとね。だから背中が痛くなるし、腰は痛くなるし、股関節のところも痛くなってね。これじゃ死んじゃうと思っ

てね。じゃあ体育館に誰もいないっていうから。段ボールのところに毛布を掛けてね、そして意外とこの1部屋ぐらいの寝るところを作ってくれて、そこでいたんです。

誰か来てね、ほら、田代さんも行こう、って言うてくれればいいけど、そんなこと言うてくれる人、誰もいなかったもの。

NA：結局、知り合いに連れられて夫婦が地区を出たのは、原発事故から2週間後の3月26日でした。

この時期、赤宇木地区では、1時間あたり100マイクロシーベルトを越える高い放射線量が計測されていました。

澄男：外にいたんですから。だって車を出れば、距離数が、集会所に行くまでの距離が結構あるからね。マスクも何も、帽子もかぶらなかつたし。だから、自分なりだけど、あれ、被ばくは浴びているんじゃないかって自分では思っているんですけど、その検査がなかなか証明出しても、送ってやったんですけど、返事は来ない。何も来ないですね。

スミ子：私ら一番大変な所にいたんだっていう感じでね。やっぱりみんなと一緒にバスに乗って、ちゃんとしたところに避難すればよかったかなと思います。

NA：今野さんは、今も月に一度、地区に通って放射線量の測定を続けています。

今野：約1時間で6マイクロシーベルト以上あると、年間50ミリシーベルトを超えてしまうから、ここは住めないという数字になるのかな。何かそんなことを考えるとね、嫌になっちゃうっていうか、むなしくなっちゃうね。もう我々の先祖が、何代も築いてきたこの地域をね、放射能で逃げなくちゃいけないっていうのは、本当に残念でたまらないね。

NA：今野さんは、事故直後に放射線の状況を今のように理解できていれば、避難の呼びかけ方も違ったと考えています。

今野：2か月ぐらいあとな、その情報を知ったのは、160マイクロシーベルト、17日の日に。赤宇木地区はあったっていうことを聞いて、何としたものだと思ったね。おそらく17日にそのぐらいの線量だったら、14、15（日）はもっともっと高かったのかなと思うと、あの時お巡りさんが言ったことが、それが分かればすぐに、どんなことがあっても逃げなくちゃいけなかつたのかなって、後で感じたね。

早く逃げなさいと。強く言うことが出来たよね。だから、今になって思うことなんだけど、やっぱり原発の周辺の我々は、もっと勉強しておかなければならなかつたのかなという気もするし。あとは早く国・県・町から報告があっても良かったのかという気がします。

インタビュー収録 DVD パッケージ



Appendix C

1. ワークショップ告知用ポスター
2. memorytalk ユーザー挙動
3. プレイベント用配布資料
4. ワークショップ後のアンケート質問表

memorytalk試作発表ワークショップ

私たちが繋げる浪江の記憶:

2015年10月1日(木) 13:05~

memorytalk
動く絵本で残すコミュニティーの記憶

ようこそ! SIGN IN

あなたの町の物語がつながる
みんなの記憶。

Transcend local memories to future generations in a unique animated archive format. Users will be able to create and publish their own stories and share it over an interactive platform.

参加する

思い出の写真、心の片隅にある物語、通学中にみた風景...あなたが見て、感じた浪江の記憶を皆さんで保存していきませんか? memorytalkは、写真に登場したり、構成、編集できるインタラクティブなアーカイブアプリです。ワークショップでは試作段階であるアプリの使用方法を紹介すると共に浪江の記憶を新規作成します。

9月29日(火) 14:25~ プレイベント
持ち物:アーカイブしたい写真(使用したい写真)
*その場でスキャン→ワークショップで使用します。

現在、思い出を胸に前向きに生きています。

保存されたアニメの例

開催:東北大学、浪江の記憶を守る会

<memorytalk ユーザー挙動>

ログイン	
ユーザID	<input type="text"/>
パスワード	<input type="password"/>
<input type="button" value="決定"/>	
新規登録	
利用上のお願いと免責条項をよくお読みになり、ご理解頂いた上でご利用ください。	
*は必須項目です。	
写真	選択
キャラクター	<input type="text" value="男子生徒"/>
ユーザID*	<input type="text"/>
お名前*	<input type="text"/>
パスワード*	<input type="password"/>
地域*	<input type="text" value="指定なし"/>
年齢	<input type="text"/>
性別	<input type="text" value="指定なし"/>
<input type="button" value="決定"/>	

①マイアカウント登録

新規登録の際、名前、パスワード、地域、年齢、性別の他、キャラクターを選ぶことが出来る。

記憶を探す	
年代	<input type="checkbox"/> 2012年以降 <input type="checkbox"/> 2011年 <input type="checkbox"/> 2000-2010年 <input type="checkbox"/> 1980-1999年 <input type="checkbox"/> 1960-1979年 <input type="checkbox"/> 1940-1959年 <input type="checkbox"/> 1939年以前
地域	<input type="checkbox"/> 沿岸部 <input type="checkbox"/> 平野部 <input type="checkbox"/> 山間部
カテゴリ	<input type="checkbox"/> 震災 <input type="checkbox"/> 自然 <input type="checkbox"/> 仕事 <input type="checkbox"/> 学校 <input type="checkbox"/> 文化 <input type="checkbox"/> 生活
キーワード	<input type="text"/>
<input type="button" value="検索"/>	

② 検索

年代、場所、キーワードを元にデータベースから地域の記憶を検索し、該当写真、動画、アニメーション動画を閲覧する。

記憶を残す

入力

年代 2012年以降 2011年 2000-2010年 1980-1999年 1960-1979年 1940-1959年 1939年以前

地域 沿岸部 平野部 山間部

カテゴリー 震災 自然 仕事 学校 文化 生活

ストーリーの場所

キーワード

題名

エピソードを書く

③ 新規アニメーション動画や写真、動画のアーカイブ

DMDとの連動により新規動画を制作し、その動画ファイルをmemorytalkにアップロードする。その他、写真や動画をアップロードすることができる。

コメント

コメント

名前・日時

コメント内容

名前・日時

コメント内容

[次のコメントへ](#)

memorytalk
動く絵本で残すコミュニティの記憶

トップ マイアカウント 記憶を残す

トップ > コメントアニメ作成

コメントアニメ作成

手順 1

コメント情報とdmdファイルをダウンロードして下さい。

ダウンロード

手順 2

DMDにログインして下さい。ログイン後、DMDに従ってコメントアニメの作成、ダウンロードができます。

<http://www.movie-school.org/>(未確定)

手順 3

アニメとdmdファイルとアップロードして下さい。

アニメを選択	選択
dmdファイルを選択	選択

アップロード

④ 制作したアニメーション動画などへのコメント挿入

参加者はアニメーション動画を閲覧し、コメントを挿入したい箇所に選択した各自のキャラクターが登場し動画内にコメントが反映される。アニメーション動画以外の写真や動画にもコメント挿入は可能。

MEMORYTALK: アニメ作品準備

www.memorytalk.is.tohoku.ac.jp

浪江高校試作発表ワークショップ

2015年10月1日(木)

私の記憶にも小さい頃、浪江で過ごした楽しい思い出が眠っています。

夏休み、田んぼのあぜ道でみた蛍が舞う様子は目を閉じると宇宙遊泳体験のようで、今でもよみがえります。それ以来、どこに行ってもあの夜体験した蛍の群れには出会っていません。

これまで、こんな素敵な体験を自慢し、誇りに思ってきました。どうかこの浪江の思い出が後世に残ります様に。。。私たちの孫にも素敵な浪江が残ります様に。

一佐々木の場合

Memorytalk ID & パスワード

ID:

パスワード:

DMD ID & パスワード(使用パソコンに標記)

ID:

パスワード:

シナリオ下書きステップ

- ①背景写真を選ぶ
- ②登場人物
- ③セリフと動作
- ④キーワード、場所、年代

シナリオ下書き(例)



キーワード、場所、年代など

- ネコ • おばあちゃんの家泊まった夏の夜に見た蛍忘れられない。
- 犬 • 昔は田んぼにたくさんの蛍がいたもんだ。
- ネコ • 宇宙遊泳みたいだったね。
- 犬 • それにしても浪江で穫れたお米はうまかったのう。

シナリオ下書き



キーワード、場所、年代など

Four horizontal lines for writing, each preceded by a downward-pointing chevron icon.

続く

ワークショップ後のアンケート質問表

アンケートご協力をお願い

本日はワークショップにご参加頂きありがとうございます。今後の取組みをより良いものにしていくために、感想やお気づきの点をお書きください。ご協力お願い致します。

memorytalkID_____

ワークショップ内容・体験について

1. ワークショップに参加しての感想 例) 作ったアニメや他の作品の印象、全体の印象など

Memorytalk アプリについて

2. memorytalk アプリについてお気づきの点がありましたらお聞かせください。
3. memorytalk にアップされている写真や動画・アニメの中で、心に残っているものを教えてください。また、どんなところが心に残っていますか？
4. 今後も定期的に memorytalk にアクセスしたいと思いましたが？ はい・いいえ

浪江の記憶について

5. 浪江についてどんなことを思い出しますか？
6. 浪江について、親しい友人の間ではどんなことが話題にあがりますか？
7. 浪江についてよその人には話しづらいと感じることはありますか？ それはどんなことですか？
8. 親しい人の中では話せないけれど、よその人には話したいことはありますか？それはどんなことですか？
9. 浪江の話題について、以下当てはまる項目を○で囲んでください（複数可）
 - ① 特に話題にしたいことがない
 - ② 親しい人の中（友達、家族、近隣、その他）で話題になる
 - ③ 話題にしたいことはあるが、共有する人がいない
 - ④ 誰の間でも話題にしない
10. その他何でも感じたことがありましたら自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。